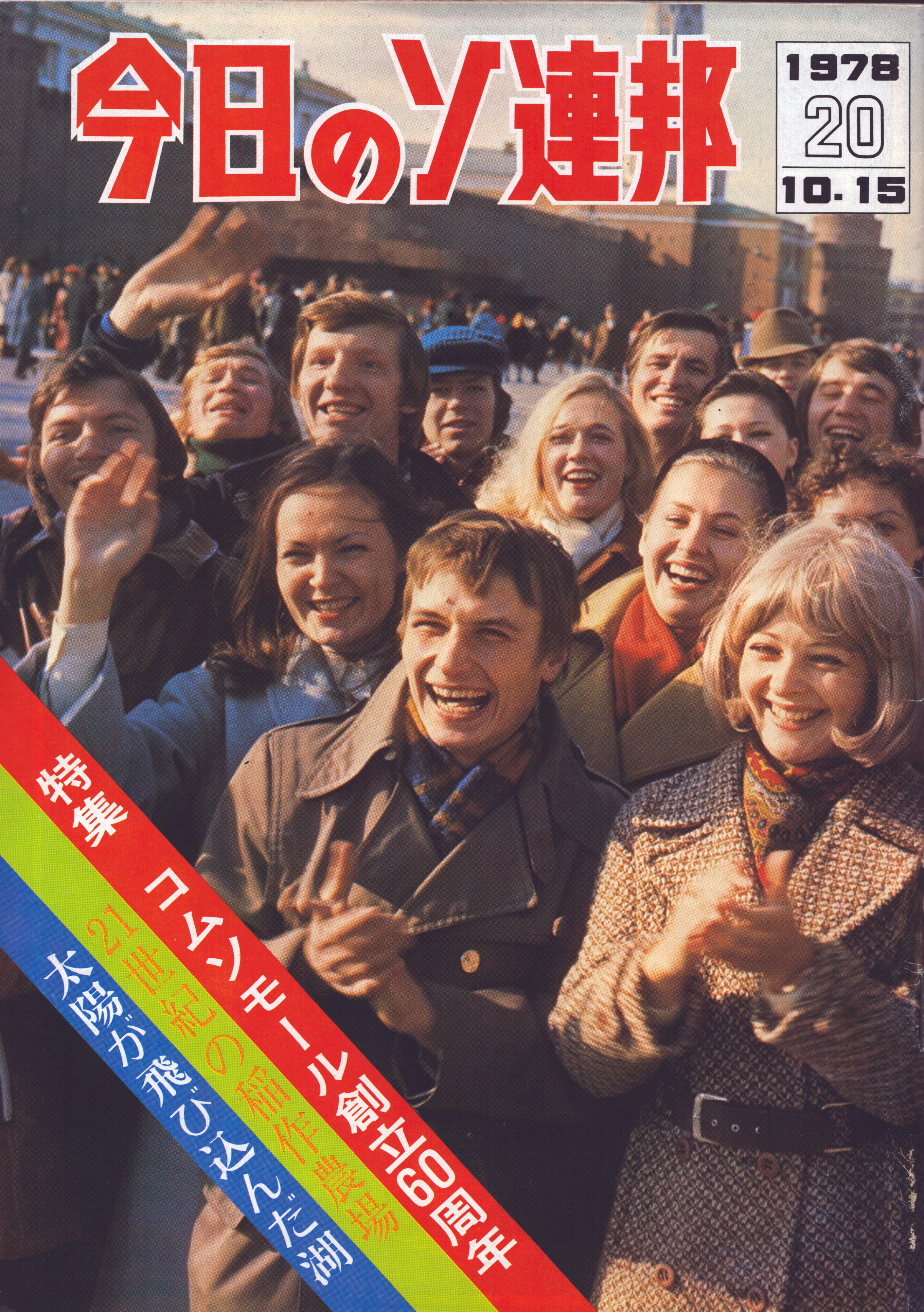
今日のソ連邦

1978
20
10.15



特集
コムソモール創立60周年
21世紀の稲作農場
太陽が飛び込んだ湖

今日のソ連邦

第20号　1978年10月15日号

АПН

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

本誌を入手するには

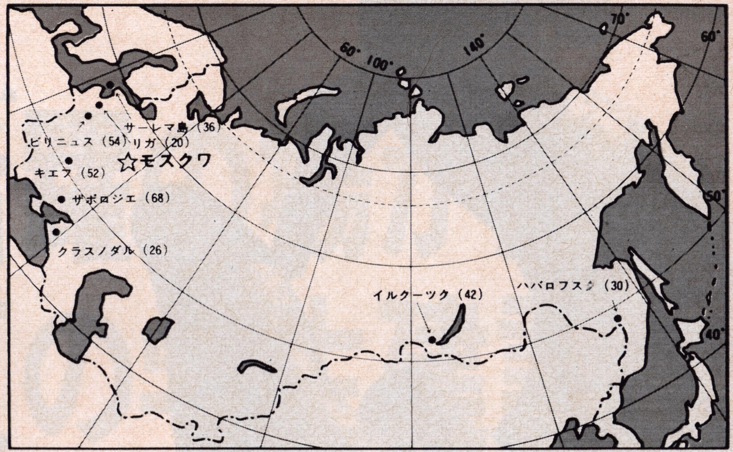
下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）

半年分送料……1200円

1年分送料……2100円

同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ



ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2—1—1　電話（583）4224
（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3—9—13
郵便番号141　電話（03）447—3536（代表）
振替口座東京9—122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

活躍の場が広い
夏の学生建設隊

オレグ・カシリン
カメラ　B・カワシキン





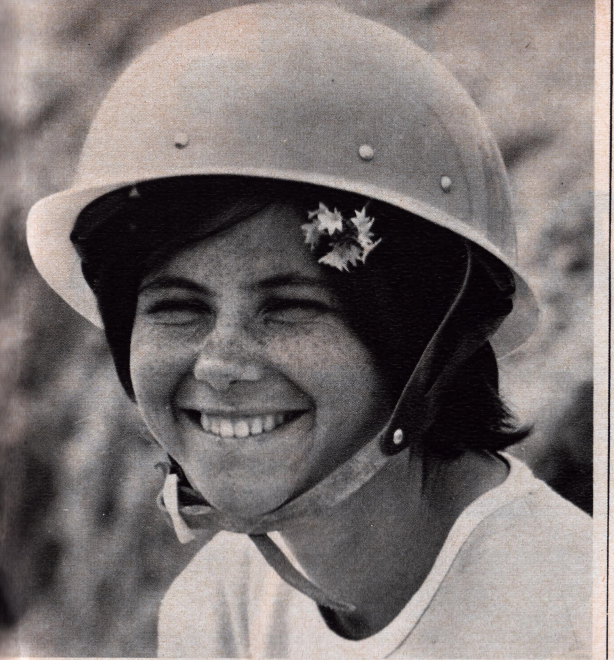
れっきとした建設工そこのけの学生の作業ぶり

処女地の住宅づくり

技師で、工学博士候補のイーゴリ・ペトロフ（40）は20年前を回想してこう語る――「一九五八年当時私はモスクワの鉄道運輸技術大学の学生だった。そのころソ連では北カザフスタンの処女地の開拓が始まったばかりで、われわれ学生も処女地の開拓にできる限りの援助をしようということになり、班をつくってカザフタンに出かけた」

総勢70人の彼の班は、暑さでやけたステップに着いた。彼らより早くここに来ていた学生たちは先輩顔で「君たち、何ができるの？　トラクタの運転や農業機械の分解をやれる？」とたずねるが、一同困惑げに咳（せき）払いをするだけで、黙りこくる。そもそもまちでずっと暮らしてきた彼らには、穀物をどうやって栽培するのか、見たこともなかったし、またはっきり知らなかった。しかしそれでも、なんとかやってのける者も二、三人はいた。

大学入学前煉瓦積み工をやった者やコンクリート打設工だった者がいて、結局、処女地に住む人々の家をつくろうということになって、建築に取りかかったが、最初の家の工期はずいぶんかかった。やり直しがかなりあった。そのかわり、2番目のものは上出来とはいわないまでも、結構住めるものになった。こうして2カ月間に3部屋の家を12戸建てた。



私もがんばっています――とにっこりするキエフ民間航空技術大学の学生ナターシャ・スクボルツォワ。



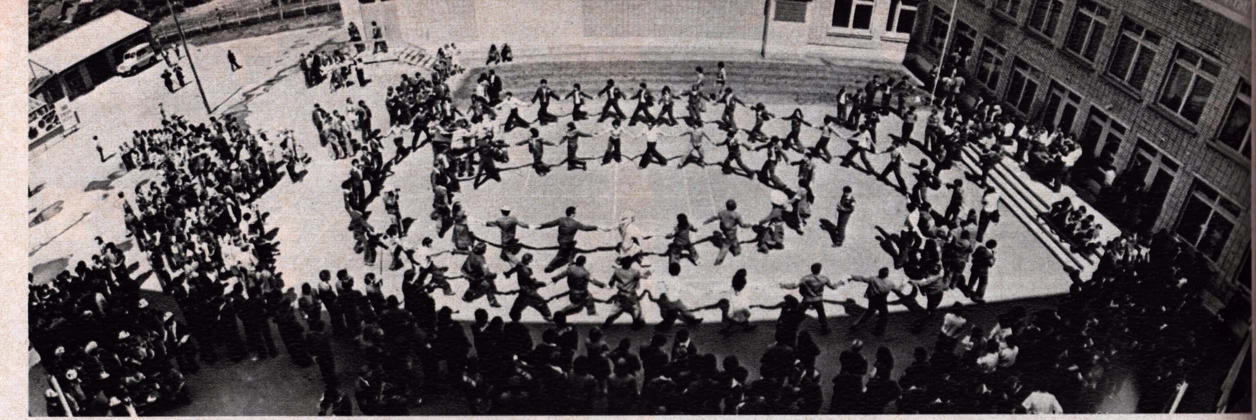
建設工事の手初めはまず測地。



きのうで作業は終わり、きょうはアドレスの交換。そして家路へ……



きょうの学生食堂の当番はフルンゼ市（キルギス共和国）の学生



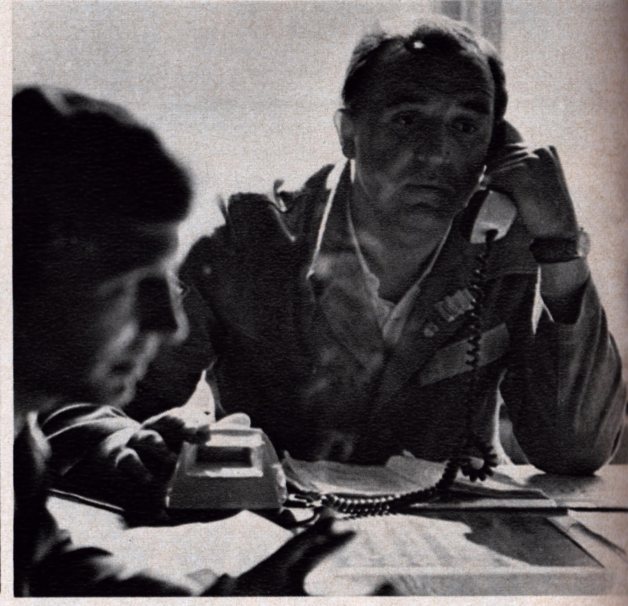
▲夏休みの作業の60日はたちまち終わり、ほっと一息入れてダンスを楽しむ。



キエフ民間航空技術大学の学生班長アナトリー・サモホジコは、てきぱき学生たちに指示を出す。



宇宙飛行士ガガーリンの母親アンナさんを囲んだキルギス共和国の建設隊の学生



ミハイル・チェルノフはことしでガガーリン市（旧グジャツク）が4度目。こんどはコムソモール隊本部長をつとめている。

一番必要な所で働く

一九五八年は、学生の建設運動が始まった年といわれている。当時いくつかの大学の夏休みの勤労奉仕志願者数は総勢数百人。全部がモスクワっ子だった。マスコミが彼らのことを大々的に取り上げたので、その翌年の夏には何千という学生が、前年のイーゴリ・ペトロフらの快挙にならった。一九七七年には学生建設隊員数は七〇万人以上にふくれあがり、過去20年間の夏の学生建設参加者数は五〇〇万人以上にのぼっている。いま全国のどの大学からも建設隊員が出ていて、しかも一番必要な場所、時には最も困難な場所で働くのがしきたりとなっている。

一九六〇年代に、学生は震災にあったタシケントを復興し、中央アジアの砂漠の改造を援助し、ソ連欧州部北方やシベリアの奥地に部落を建設した。七〇年代に入るとその活躍の場はさらに広がり、ロシア共和国の非黒土地帯と西シベリア、バム鉄道とモスクワのオリンピック施設、ボルガ川とカマ川にのぞむ自動車工場など、合計一〇の最も重要な全ソ建設場が、学生たちの建設の対象となった。多くの学生建設隊は夏休みにふるさとの町のクラブや住宅を建て、街路を整備している。

この5年間だけで学生が建設した施



毎年ソ連の各都市から約1000名の学生がガガーリン市に来て住宅や官庁を建設している。このまちは全ソ・コムソモール建設場に指定されており、数年後には工業・文化の大中心地となろう。

設数は六万。それらを一ヵ所に集めると、一つの都市ができる勘定になる。学生建設隊が社会にもたらした物質的貢献を具体的に示すために、もう一つ数字をあげておくと、前の第9次5ヵ年計画（一九七一―一九七五）中の彼らの作業量は金額にして五〇億ルーブル（一ルーブルは約二八二円）になる。

将来の職業を実地に知るため

学生建設隊という名前は、いまでは見当はずれだが、どうやらこの運動を始めた提唱者たちを尊敬する意味で、いまも「建設」という言葉が使われているようだ。夏休みの学生の働き場所は、住宅や道路の建設現場だけに限らない。列車の車掌、病院の看護人、コック、店員、幼稚園の養育係など、要するに夏休み中人手がたりなくなる場所でどんどん働いている。

ある具体的な大学をベースにした専門別の学生隊も出現している。たとえば機械化班をつくった農業大学の学生は、夏休み中に土地の干拓・給水作業をしたり、収穫物の刈り入れに参加している。彼らはコンバインやトラクタ、トラックを運転し、通信関係の学生は遠い農村地区で架線工事をやり、未来の建築技師は修復工事に参加し、石油化学関係の学生は掘削設備をつくっている。この経験は、未来の職業を理論だけでなく、実地に学べるので、二重に有益である。

全ソ学生隊の現在の隊員の約1/3は、中等専門学校と職業技術学校の学生だが、社会主義諸国やアジア・アフリカの発展途上諸国の留学生も少なくない。建設隊への参加は、まったくの自由意志だが、参加を希望したからといって、みんなが隊に入れるわけではない。第一の壁は医師の審査委員会、第二の壁はコレクチブの意見であり、ちょっとやそっとでへこたれないとタイコ判をおされた者だけが、建設場へ行ける。

名誉も、報酬も

夏の学生隊で働くのは学生総数の約20％。参加申し込みは普通その2―3倍ある。どうしてせっかくの当然の休みを棒にふって、わざわざそんなに働こうとするのだろうか？ ロマンのせいか、それとも義務感のせいだろうか？

建設隊員になるのは名誉であり、一人前のれっきとした市民になったことを証明するものだというのが、第一の最も肝心な理由である。それからお金がかせげることも理由の一つ。学生隊の隊員には、隊員が仕事をする組織の賃金条件が適用される。このほかにもふつう学生は、国から奨学金をもらって、ふところはかなりあたたかくなる。

学生隊の〝作業監督〟はソ連の国家計画委員会で、発注者となるのは関係官庁である。大学と企業は長期契約を結ぶ。学生は作業期間中、自分たちに割り当てられた施設での機械の主人役をつとめる。多くの大学ではあれこれの職業のわく内で建設隊員の養成、学習が行われている。

学生隊の1日の労働時間は8時間。農村地の住民にとって学生隊は、ある程度啓蒙役を果たしており、コンサートや講習会を開き、大学希望者の相談にのり、夏の子供キャンプの運営を援助している。

コムソモールの建設場

現行第10次5ヵ年計画（一九七六—八〇）では、一四〇の大建設場がコムソモール建設場に指定された。（コムソモールの歴史、功績、活動については10ページの「コムソモールの60年」を参照）

重要建設場を後援するのはコムソモールの伝統で、コムソモールは建設志願者を募り、志願者の職業訓練、日常生活や余暇の組織などに気をくばる。

毎年コムソモールの呼びかけに応じて、各地の建設場に働きに行く若い情熱家は一〇万人以上にのぼる。

現在コムソモールが後援している建設場のほんの二、三をあげると、まず第一が延長三二〇〇kmのバイカル・アムール鉄道。深い森林、山脈、何十という川を通るこの鉄道の建設現場に来た男女コムソモール隊員は、二万三〇〇〇人以上である。

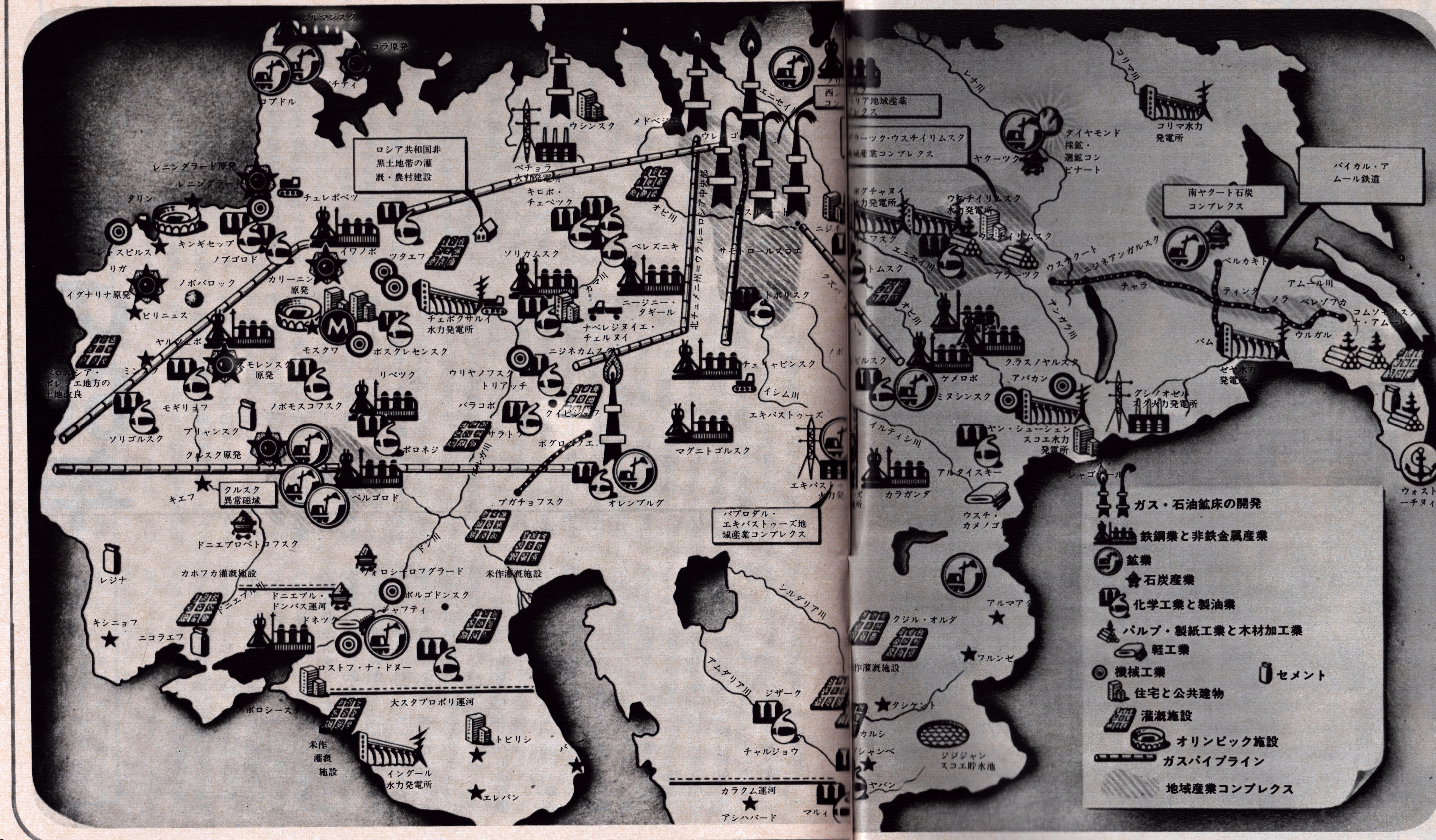
もう一つの大がかりな建設は、面積約三〇〇万平方km、人口六〇〇〇万人余りのロシア共和国非黒土地帯における土地改良作業と農村建設である。約一〇万人の若い土地改良家や建設者が、沼沢地を干拓し、住民や学校、畜舎や穀倉を建てている。非黒土地帯の農村地区に毎年働きに行く志願者は約二万人である。

目下建設中の延長約三〇〇〇kmのオレンブルグ＝ソ連西部国境間のガスパイプラインは、ソ連のガスを欧州社会主義諸国へ供給するもの。建設現場では、ソ連の若者をはじめ、ポーランド人、チェコ人、ブルガリア人、ハンガリー人、ルーマニア人、ドイツ人が働いている。このような国際的な青年建設場は、東シベリアのウスチ・イリムスクにもある。ここではブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、ソ連の青年が、年間五〇万tのパルプを生産するコンビナートを建設している。

では、なぜ青年は新建設場へ行くのか？

各人それぞれに動機や生活上の事情があるが、共通点があるとすれば、新しい困難な仕事に力とエネルギーを注ぎ、自主性やイニシアチブを発揮することができる点であろう。このことをはっきり物語っているのは、バイカル・アムール鉄道の線路敷設コムソモール・青年班のビクトル・ラコモフ班長の次の言葉である。

「バム鉄道は私の3番目のコムソモール建設場だ。これらの建設場で私は、ひょっ子だった若者が真のたくましい男、責任感に燃える男に成長してゆくのをこの目で見てきた。こうした苦しい日々を経て、若者たちは本を手にし、大学や中等専門学校の試験に合格し、アマチュア・オーケストラで演奏し、壁新聞をつくり、スポーツをやっている。私は、われわれの建設場ほどりっぱな人生の学校はないと信じている」



コムソモールの60年

アナトリー・クプリコフ

政府から6度も表彰された人がいると、読者は「その人は国のためにうんとつくしたから、そんな栄誉をうけた」のだというにちがいない。ソ連には人だけでなく、工場、都市、社会団体にも、勲章を授けるしきたりが古くからある。ソ連のコムソモールは全ソ（連邦）・レーニン共産主義青年同盟のロシア語の略称。このコムソモールは政府から6回表彰されており、しかも3回はソ連で最も名誉なレーニン勲章を授けられている。

コムソモールとは？

ロシア共産主義青年同盟は、一九一八年10月29日の第1回労農青年同盟全露（ロシア）大会で結成された。レーニンの死後、一九二四年7月にコムソモールにレーニンの名が付けられ、一九二六年から現在の呼称になった。

目的と課題が共産主義的であり、性格が大衆的で、活動方法が自主的な、新しい型の青年組織が、ここに初めて生まれたといってよい。コムソモールは政治綱領を定めて、コムソモールの本質を、青少年の育成、新社会の建設と防衛における共産党の補助者と規定した。ここではっきりことわっておかねばならないのはコムソモールが青年の間に「共産党の思想を植えつける」ために、共産党の要請で、上から中央集権的につくられたものではないことだ。コムソモールは、初めての社会制度の建設に力をそそぎ、どんなに困難であろうと前人未踏の道を歩み、現実の社会主義の建設を始めたいという、青年の心からの希望に答えて結成されたものである。そういう青年の希望を実現するには、組織をつくり、新しい諸関係のめざましい形成過程に参加する形態を見付けなければならなかったが、こうした形態となったのがコムソモールである。

現在のコムソモール

現在のコムソモール員の数は約三八〇〇万人。ソ連の一三〇全部の大小民族の青年が加入しており、ソ連の青少年（14歳以上―28歳未満）人口の半数以上を占めている。コムソモール員の56％は国民経済（うち47％は直接物質的生産の分野）で働いている。コムソモール員のうち労働者は一二五〇万人、コルホーズ員は二三〇万人、技師、技手、農業専門家は二二〇万人、教師と医師は八〇万人である。国民経済で働いている専門家の$1/6$、教師の$1/5$、科学研究員と中等専門・高等教育の教師の$1/4$がコムソモール員である。

コムソモール員の数はたえずふえており、コムソモールの第17回大会（一九七四年）から第18回大会（一九七八年4月）までの期間に一九〇〇万人ふえた。

14歳から28歳未満のソ連の青年ならだれでもコムソモール員になれる。加入希望者はコムソモール規約のすべての事項を守ることを誓約した加入申請書を出す。コムソモール加入希望者と各コムソモール員は、自分の職場または学校のコレクチブの社会活動にそれぞれあれこれの程度参加しなければならない。個別的にそれぞれの青年の加入をきめるのは、その青年の学校または職場のコムソモール初級組織のコムソモール員総会での公開投票である。

コムソモール員は全員同盟費を支払う。最低額は学生生徒で収入のない者の月2コペイカ（約6円）から最高は月収一五一ルーブル以上の者の月収の1・5％。コムソモールの予算の第2の収入項目は、コムソモールの編集・出版活動や宝くじ、演劇、コンサート、展覧会の収益である。

また支出の中には、たとえば、青年ホテル、国際ツーリスト・キャンプ、青年の家の建設費やコムソモールの出版所の印刷工場の拡張費などといった項目もある。

コムソモール員になると、何か特権が与えられるのか？

コムソモールの特権は、国が一番必要とする困難な場所にいって働けること、報いられることを期待せず、困難な仕事を期限内に完了するために、必要とあれば自分の時間を犠牲にすること、自分自身の利益ではなく、社会の利益を生活の第一義におくことである。仕事での昇進、学校の試験の点数、昇給などは、ソ連の法律ではコムソモール員であろうがなかろうが全く関係ない。コムソモール員という名称は、わが身のためではなく、社会のために人々がやっているすべてのことに参加することを示す尺度のようなものである。そして、コムソモールの歴史全体がそれを証明しているといえる。

コムソモールの六つの勲章

一九一八年。若いソビエト共和国は外国干渉軍と国内の反革命勢力を撃退した。この国内戦で総計二〇万人のコムソモール員が干渉軍や反革命勢力と戦った。国内戦における戦功をたたえ、一九二八年にコムソモールに**赤旗勲章**が授けられた。

一九二九年。コムソモールは国民経済の復興に立ち上がろうと青年に呼びかけた。そしてまたもや二〇万の青年が、ソビエト経済発展第1次5ヵ年計画の建設場の作業に参加した。この労働により、一九三一年1月にコムソモールは**労働赤旗勲章**を授けられた。

一九四一年―一九四五年の対独戦争中にコムソモールに加入した青年男女は一二〇〇万人にのぼった。ファシスト占領軍が真っ先に共産党員とコムソモール員を処刑していた時期に、なんとこんなに多くの青年がコムソモールに加入したのだ！　戦時中三五〇万人のコムソモール員が勲章、記章を受けた。しかし一九四五年にコムソモールに授けられた**レーニン勲章**は、コムソモール全体にたいする最高のほう賞となった。戦禍をうけた経済の復興に参加した功により、コムソモールは一九四八年に二つ目の**レーニン勲章**を受けた。

一九五四―五五年に全国津々浦々から三五万人の青年男女が、カザフスタン、アルタイ、シベリアの処女地の開拓に出向いた。短期間に三六〇〇万haの処女地が開拓され、四二五の大穀産ソフホーズが建設された。国はコムソモールの労働の功績をたたえ、一九五六年に三つ目の**レーニン勲章**を授与した。

一九六八年はコムソモールの創立50周年であったが、この記念日にコムソモールに授けられた**10月革命勲章**は、ソビエト政権を守り、経済を復興し、工業を創設した青年男女にたいするほう賞であり、すべての世代のコムソモール員にたいするほう賞であった。

コムソモール員と国事

10月29日はソ連のコムソモールの創立60周年に当たる。これに先立ちさる4月に、第18回コムソモール定期大会が開かれ、若干の活動成果を総括し、こんごの課題を定めた。

いまはっきり断言できるが、コムソモール員はソ連の社会生活のあらゆる分野で積極的に活動している。地方のソビエトの代議員のほぼ$1/3$がコムソモール員と青年であり、ソ連最高会議代議員の$1/5$近くが青年である。また一〇〇万人のコムソモール員が、企業や機関の労働組合委員に選ばれている。だからソ連の生活のどの重要問題も――それが国全体の問題であれ、個々の労働集団の問題であれ――事実上青年やコムソモール員を通じて解決されているわけである。国政や社会的な業務の運営とか、政治的、経済的、社会・文化的諸問題の解決とかに参加するコムソモールの権利は、ソ連憲法に定められている。

さまざまな行政機関や社会団体の選出機関に、コムソモールの代表が参加するというよいしきたりがあって、コムソモールの代表は、高等・中等専門教育、教育、文化各省、体育・スポーツ委員会の省議や全ソ労働組合中央評議会幹部会やその他の組織のメンバーの一員になっている。コムソモール中央委員会のボリス・パスツーホフは、ソ連最高会議幹部会員である。

コムソモールの第18回大会では、コムソモール員と青年のソ連経済への現実の貢献にかんする発言が多かった。この前の記事（「コムソモールの建設場」）のなかで、われわれは青年の援助や直接の参加をえて、ソ連で実施されている巨大経済プロジェクトのいくつかを取り上げたが、コムソモールの建設場後援は、現場の建設作業だけに限らない。新しい都市の発展のマスタープランを、作成過程で修正したり、建設現場で青年画家の展覧会を催したり、コムソモールの出版所『若き親衛隊』の出店を開設するなど、地味な分野の仕事もある。

コムソモールが現在一四〇の大建設場を後援していることは前掲の記事で御承知であろう。こんなに多くの建設場を後援しているにもかかわらず、コムソモール第18回大会ではさらにこの活動を強化することになった。この大会で演説したレオニード・ブレジネフは、ソ連経済にとって非常に重要な西シベリア地域、とくにチュメニ州の産業開発を最も重視するよう、青年に呼びかけた。L・ブレジネフが指摘したように、西シベリアの建設場で直接働いている者ばかりでなく、ソ連の他の土地でチュメニの注文を遂行している者も、西シベリアの開発を援助できる。

本誌でなんども書いてきたように、ソ連国民経済の主要な課題とは、労働効率と生産物の質の向上闘争（まず基本建設や運輸）であり、農業、まず畜産業の振興闘争である。コムソモールと青年は、この課題の解決に最も積極的に参加しなければならない。このこともコムソモール第18回大会で述べられた。



コムソモール大会に党中央委員会のメッセージを手渡すL・I・ブレジネフ

「ここではひじょうに多くのことが、皆さん、青年にかかっている。そしてわれわれは、皆さんがうまくやってのけることを信じている」とレオニード・ブレジネフは大会で述べた。

ソビエト青年の国際主義

コムソモール規約には、各コムソモール員はその行動全体を通じて、世界のすべての勤労青年との親善、兄弟関係の強化を助長しなければならないと定められている。

国際主義は、ソビエト的性格の切り離すことのできない一部分となっている。ソ連の青年は青年の国際平和運動に積極的に参加しており、外国の青年団体との協力をたえず強化、拡大している。

コムソモール中央委員会とソ連青年団体委員会が協力し、交流している国際、各地域、各国の青年団体の数は、一三〇ヵ国、一三五〇団体である。このことだけで、ソ連青年の国際交流の規模がよくわかろう。ソ連青年の対外交流の形態は、フェスチバル、親善週間、会議、代表団、観光グループの交換、学習・見学旅行、友好キャンプなどさまざまである。

この数年来、平和、民主主義、民族独立と社会的進歩をめざす闘争を基盤とする協力は、コムソモールの最も重要な活動方向の一つとなっている。その証拠の一例は、さる8月キューバのハバナで開かれた第11回世界青年学生祭にソ連青年代表団が積極的に参加したことである。

コムソモールと社会主義諸国の青年団体との交流は、長期の協力計画に基づいており、とくに緊密である。

親善フェスチバル、会議、シンポジウム、セミナー、労働者相談会が定期的に催されており、現地での交流、青年の新聞、雑誌、出版所間の交流は、一段と緊密になっている。

社会主義諸国の青年団体が、社会主義的統合総合計画の実現に参加するに及んで、青年の親善と全面協力がさらに強まる大きな見通しが出てきている。ソ連のウスチイリムスク木材工業コンプレクス、モンゴルの「エルデネト」鉱業コンビナート、ポーランドの「グータ・カトビツェ」製鉄コンビナート、チェコスロバキアの「ツシミツェ」発電所などの建設に、社会主義諸国の青年が参加しているのは、青年の共同労働のよい例である。

正しくも「友好ライン」と呼ばれている「ソユーズ」ガスパイプラインの建設にたいする共同後援の経験は興味深い。ここではブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、ポーランド、チェコスロバキアの何千という青年が働いている。

活動経験の相互交流は、ますます多面的で、深いものになっており、青年の労働、政治、道徳面の教育の諸問題の解決に役立っている。

※　※　※

いまコムソモールが積極性とイニシアチブを発揮していないような社会生活分野はない。10月革命によって誕生し、共産党によって育てられたコムソモールは、共産主義社会の建設に直接参加している積極的な創造力である。



第18回コムソモール大会の休けい時のひとコマ

ソビエト民主主義

ソビエト青年——その問題点

ノーボスチ通信解説記者　ウラジスラフ・トラペズニコフ

ソ連は人口学的に見て若い年齢層が最も多い国の一つである。一九七〇年の国勢調査によると、ソ連の人口の50・8％は30歳未満であり、国民経済就業者の40％余りと科学研究員全体の1/4余りが青年である。

青年層はすでにソビエト社会の現在の動きを大きく左右しており、その未来となると、もっと大きく左右するのは当然のことだ。また社会が青年の問題に関心を寄せているのも当然だし、まして、こうした問題のいくつかは、おいそれとは解決のつかないものだから、注目されて当然といえよう。しかしこれらの問題の性格は、外国の多くの新聞、雑誌の読者がよく思いえがくようなものとは違っているようだ。

違いか葛藤か？

ソ連における「青年の造反」が時たま話題になることがあるが、その造反とはまず青年がポップスやジーンズにフィーバしていることだといわれている。ポップスやジーンズに夢中になることが「造反」ならば、この「造反」者の中に、もっと年長の世代の多くの人々も入れなければなるまい。たとえば、ソ連で放映されたスウェーデンのABBAアンサンブルのコンサートを満ちたりた思いで聴いた中年以上の人は多い。その反面、現代音楽のリズムや現代ふうの衣装にひかれる〝子ども〟の気持ちがわからない〝父親〟もかなりいるのは当然だ。文化、余暇、モード、日常の行いなどの問題で、世代間にげんに違いがあるし、またこんごも違いは出てくるだろう。好みや熱中するものが何十年も少しも変わらないような社会に、生命力なんて果たしてあるものだろうか。

価値体系にも違いが見られる。社会学的調査によると、若い労働者は年寄りに比べて、家族や教育を重視している。年寄りのほうは健康第一であり、教育よりも実際の生産活動を重視している。こうした当然ともいえる違いは〝世代間の葛藤〟といえるものだろうか？

また家族や教育問題を重視しているからといって、ソ連の青年が〝個人主義〟だということにはならない。もっとも自分の出世に汲々としている個人主義者や自分のこと以外は無関心という若い人ももちろんいることはいるが。

特権をもつ世代

ソ連の青年には失業はないし、たとえ技能資格に上下はあっても権利は同じである。そのうえソ連には無料の中等、高等教育制度があって、青年なら例外なく誰でも職業を修得したり、技能資格を引き上げる平等のチャンスに恵まれている。大学や中等専門学校の通信教育や夜間教育の受講者数は数十万人。授業料が無料であるだけでなく、試験または卒業論文準備のための休暇のときも賃金がもらえる。

若い労働者には労働保護の分野でも特権が与えられている。満18歳以下の青年の労働時間は約1時間短いが、賃金はまる1日分のものがもらえるし、休暇日数も成人労働者と同じだ。青年労働者の場合、かりに並の労働者の作業量（ノルマ）をこなすことができなくても、労働経歴が短ければ、解雇できない。

ソビエト社会はこのように教育や仕事につごうのよい条件を青年のためにつくって、若い世代が自分の身の振り方や自分の社会・経済計画にたいする態度をきめるのを手伝っている。こんなよい環境に恵まれているので、青年はたとえば新しい大きな社会計画や経済計画の実現が問題になるとき、おそらくソビエト社会の最も積極的な部分として力を尽くすにちがいない。げんに現代最大の建設場の一つである東シベリアのバイカル・アムール鉄道の建設者の4/5は青年である。ここの建設場の環境は、おだやかな表現をすれば、保養地なみとはいかないが、ここで働くことを希望した若い志願者の数は、求人数の数倍にのぼった。

権力機関における青年の増加

青年にとって政治に関与するチャンスは、〝社会・経済的〟諸権利以上に魅力がある。そして政治への参加はますます活発になっている。一九六七年のソ連の地方の権力機関（ソビエト）の代議員中、30歳未満の者は16・4％であったが、一九七七年のそれは32・4％にふえた。

昨年10月に制定された新ソ連憲法では、連邦構成共和国と自治共和国の最高会議の代議員の被選挙権は21歳から18歳に、ソ連最高会議代議員の被選挙権は23歳から21歳に引き下げられた。

これらすべての変更は、とくに新憲法草案の討議に四六〇〇万人の青年男女が参加して、五〇〇万余りの提案を出したことを考慮すれば、けっして偶然ではない。

青年は批判する……

ソ連の青年が何を批判しているかを知ってもらうために、ことし2月のコムソモール第18回大会での二〇〇余りの発言の中からいくつかをあげておこう。(これら二〇〇余りの発言にはみな批判色がただよっていた)

大会代議員は、青年が大きな全国家的課題の解決に参加していると語るとともに、少なからぬ新しい課題（全般的ならびに純青年的性格の課題）を提起した。

大会発言の中の基本的考えは、国家計画機関は労働者、農民の技能資格の向上や教養ゆたかな青年を目標に置かねばならないというものであった。具体的な省庁にたいする批判的意見も少なからず出た。西シベリアからきた掘削工のウラジーミル・グレーボフとれんが積み工のタチヤナ・ワシナは、国家計画委員会とソ連国家建設委員会は、文化・生活サービス量がいまのところ全国平均よりも低い新興都市（創建されてまだあまり年月がたっておらず、人口も少ない）の特殊性をあまり考慮に入れていないと語り、ウクライナのビンニツァから来た店員のナタリア・アルテミエワは、商業のやり方がまずいので、個人のたくさんの自由時間が無駄になっていると激しく批判した。

リャザン州のコルホーズ員ウラジーミル・ツチンは、大会ですべての人にかかわりのある問題を取り上げた。ソ連、とくにロシアの中央非黒土地帯で、いま収量を大幅に引き上げるための大がかりな土地改良計画が実施されているが、「机のように平らな」農地を目指すあまり、生態系の均衡が破られることが時々あり、ロシアの美しい自然が消え失せている。このまま進めば、未来の世代の人々はロシアの美しい自然を文献でしか知ることができなくなるのではなかろうか——とツチンはたずねた。

大会で討議されたもう一つの重大問題は、青少年の教育である。

新ソ連憲法は「市民によるその創造力、才能、天分の適用ならびに個人の全面的発展のための現実的可能性」の拡大を目的にかかげた。この憲法の重要な命題は、まず青年にあてはまる。

しかし若い人にとって可能性がふんだんにあることが、かえって選択を困難にしている。なぜなら職業技術学校だけで一四〇〇の職業を青年男女に提供しているからである。だから青年の職業・進路指導体制を改善し、とくにさしあたって「職業百科事典」を刊行しなければならない——と大会で述べられた。

青年の問題の解決は、社会や国家と青年との相互関係のかなめをはっきり法律で認証するかどうかにかかっている。ウクライナのコムソモール中央委員会第一書記アナトリー・コルニエンコが強調したとおり、ソ連最高会議は新ソ連憲法の精神に従って「青年法」を採択する必要がある。

いくつかの問題点

問題点はかなりあり、しかも二つの理由で問題は複雑になっている。その一つは肉体と精神の成熟度の開きを大きくしている加速度であり、もう一つは青年の一部を勉学や仕事のため大都市に流入させている都市集中化の傾向である。後者は青年を家族から引き離し、青年に新しい環境に〝適応〟する苦労を負わせている。

その反面、どの親もこぞって、青少年の自立の意識を認めているというわけではない。青少年向け新聞の編集部に送られてきたティーンエージャーの多くの手紙が申し合わせたように書いているのは、「親たちはわれわれのことなどわかっちゃいない」という言葉である。こうした一見家庭内だけの問題のように見える問題は、社会的に解決されている。

ティーンエージャーの活動が否定的な性質をもつことがあり、その結果——アルコールにひたり、公共の場所で不良行為をしたり、もっと大きな法律違反をすることが多くなっている（ただしあくまでも客観的な目で見れば、この法律違反の程度も西側の青少年犯罪に比べればたいしたものではない）。

いまソ連では青年の余暇の過ごし方の問題が重視されている。たとえば、レニングラードにティーンエージャー専門のクラブが設けられており、約一〇万人がここを利用している。ついでながらそのおかげで、すぐにレニングラードの未成年者の法律違反は減り始め、現在もこの減少傾向は続いている。

こうした青年問題や他のあらゆる青年の問題はけっして黙過されていない。肝心なのは、そのさい頭の中でつくられた問題ではなく、実際の問題が取り上げられていることだ。

ソ連の視点

非核保有国の安全保証強化にかんする国際条約案

K・ボリソフ

ソ連は9月8日、新たに大きなイニシアチブを発揮し、非核保有国の安全保証強化にかんする国際条約締結の問題を、重要かつ緊急の問題として、第33回国連総会の議題に含めるよう提案した。

軍拡競争の停止と軍縮をめざすソ連の提案はいつも、好意的な反響を呼び、多くの国に支持されている。たとえば、大きな潜在的軍事力をもつ国をはじめとする国々の装備と兵力のいっそうの量的、質的増大の完全停止をめざす諸措置のプログラムは、国連軍縮特別総会における討論の中心となった。核兵器の生産と入手を拒否し、自国の領内に核兵器をもたない諸国にたいしてこの種の兵器を行使しないというソ連の提案はとくに強い支持を得た。

非核保有国にたいしては核兵器が行使されないという国際法上の保証を得たいという、これらの国の願望にたいして、ソ連は理解ある態度をとっている。このような願望はしごく当然なものである。世界には危険な緊張と衝突の発生地が依然として存続している。イスラエルと南アフリカ共和国の侵略政策、東南アジアにおける中国の策動、アフリカの独立諸国の内政にたいするNATO（北大西洋条約機構）諸国による干渉は、国際平和と安全をひどく脅かしている。軍拡競争は疑惑や不信、恐怖をよび起こし、世界各地の国際紛争の中止を妨げており、また軍事力の増大は、相互理解と協力の拡大をめざす努力をぶちこわし、すでに合意ずみの協定の実現を阻んでいる。

非核保有諸国が自国の安全保証の強化を願っているのは、軍拡競争抑制がいまのところ決定的な転換をとげておらず、核兵器を含む兵器の貯蔵量がふえ続けているためでもある。

ソ連は、核兵器の生産と入手を拒否し、自国領土内に核兵器の配置を許さない国々は、核兵器の拡散防止、従って核戦争発生の危険の弱化と、とどのつまりはその危険の除去に重要な貢献をするから、これらの国は核兵器を行使されないという保証をもつ権利がある、という立場をとっている。

国連におけるソ連の新しいイニシアチブには、それなりの歴史がある。

すでに一九六六年に、ソ連は非核体制を守る義務を負っている国にたいして、核兵器を行使しないことを条約で定めることに賛成した。一九六六年2月11日付けの軍縮委員会あてのA・コスイギン・ソ連閣僚会議議長のメッセージの内容は次のようなものであった。

——ソ連が軍縮委員会に提出した核兵器拡散防止条約案を貫いているのは、条約締結の合意達成を容易にするために、核兵器がさらに拡散する一切の道を閉ざそうという一つの願いである。ソ連政府は、この条約案に、自国領土内に核兵器をもたない条約当事国の非核保有諸国にたいする核兵器の使用禁止条項を入れる用意があることを声明する。

ソ連のこの提案は、核拡散防止条約の作成に参加した若干の国の反対態度のため、そのときは日の目を見なかった。

一九六八年6月、ソ米英3国政府は特別声明を発表し、国連憲章にもとづき、核兵器を行使する侵略の犠牲または侵略の脅威の対象となる非核保有国への支持を確保するために、3国は安全保障理事会に即時行動をとらせる意向であると述べた。一九六八年6月19日付けの安保理事会決議は、3国声明に述べられた意向を歓迎した。

3国声明と安保理事会決議は、核拡散防止条約とともに、非核保有諸国の安全保証を確保するりっぱな土台となった。また国際関係における武力の不行使と核兵器行使の永久禁止にかんする一九七二年11月29日付け国連総会決議も、非核保有諸国の安全保証確保に重要な役割を果たす使命をもっていた。

ソ連は9月19日から始まった第33回国連総会に、非核保有国の安全保証強化にかんする国際条約締結の問題を議題として提出したが、これはさきの国連軍縮特別総会に提出されたソ連提案をさらに発展、具体化する措置である。こんどの場合、ソ連は特別総会の最終文書のしかるべきくだり、とくに核兵器を持たない国々にたいする核兵器の行使を防止する効果的な協定を結ぶために、ねばりづよい努力をしてほしいというこの文書の要請を考慮に入れたし、またこうした保証は多国間条約の形をとったほうが一番よいという若干の非核保有諸国の考えも考慮においた。ソ連の意見によると、しかるべき保証を与える用意のある核保有諸国が参加すると同時に、非核体制を守り、自国領土内に核兵器の配置を許さないことを義務としている国々が参加する国際条約の締結が、この目的に役立とう。

こうした条約が締結されれば、非核保有諸国の安全保証は、全般的な国際法的認証を与えられることになる。非核保有諸国は条約に参加することにより、非核体制を守る以外別に何も要求されることはなくて、しかもはっきりした、ひじょうに重要なメリットが得られる。

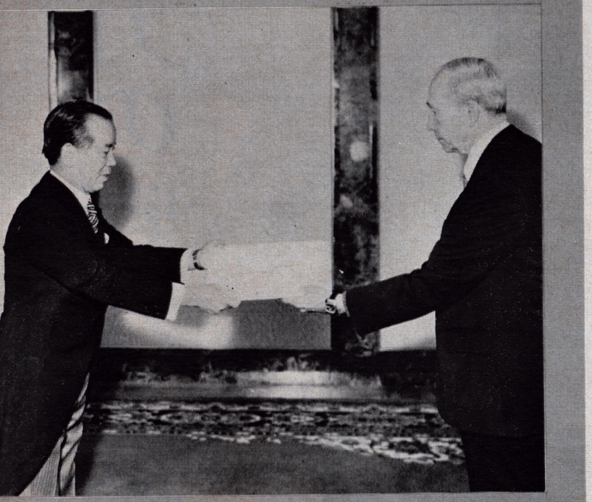
条約案の第一条には、条約の当事国で核兵器を保有する諸国は、条約当事国で核兵器を保有せず、核兵器の生産と入手を拒否し、自国領土内およびその司法権および管轄権下にある陸上、海上、大気圏内、宇宙空間のあらゆる場所に核兵器をもたない諸国にたいし、核兵器を行使せず、また行使するとの脅迫を行わない義務を負う、と定められている。さらに条約案は、第一条に定められた義務は、非核保有当事諸国の領土のみならず、陸上、海上、大気圏内、宇宙空間のいたるところで、これら諸国の司法権および管轄権下にある兵力および施設にも適用されると述べている。

条約案には、条約のすべての当事国は、他のいずれかの当事国の行動が条約の規定に違反していると見なす根拠を有する場合、実状を明らかにするため当事諸国間の協議の実施を要求でき、この要求にはあらゆる関連情報と、その根拠を裏付けるあらゆる可能な証拠が含まれなければならない、との条文が入っている。

条約は無期限であるが、各条約当事国は条約の内容に関連する異常事態が、その国の最高の利益を脅かすにいたったと判断した場合、国家主権を行使して条約から脱退する権利をもつ。その国は条約の全当事国と国連安保理事会に3ヵ月前に脱退を通告する。この通告は、当該国が自国の最高利益を脅かすにいたったと見なす異常事態についての声明を含まなければならない。

さて、各国が非核保有国の安全保証を強化する措置にかんするソ連の提案をひじょうに真剣に審議することを期待したい。国連総会がこの重要な提案の即時実現をめざす建設的決定を採択すれば、戦争の危険の弱化と国際緊張緩和の強化に役立つにちがいない。

魚本・新駐ソ大使が信任状を奉呈



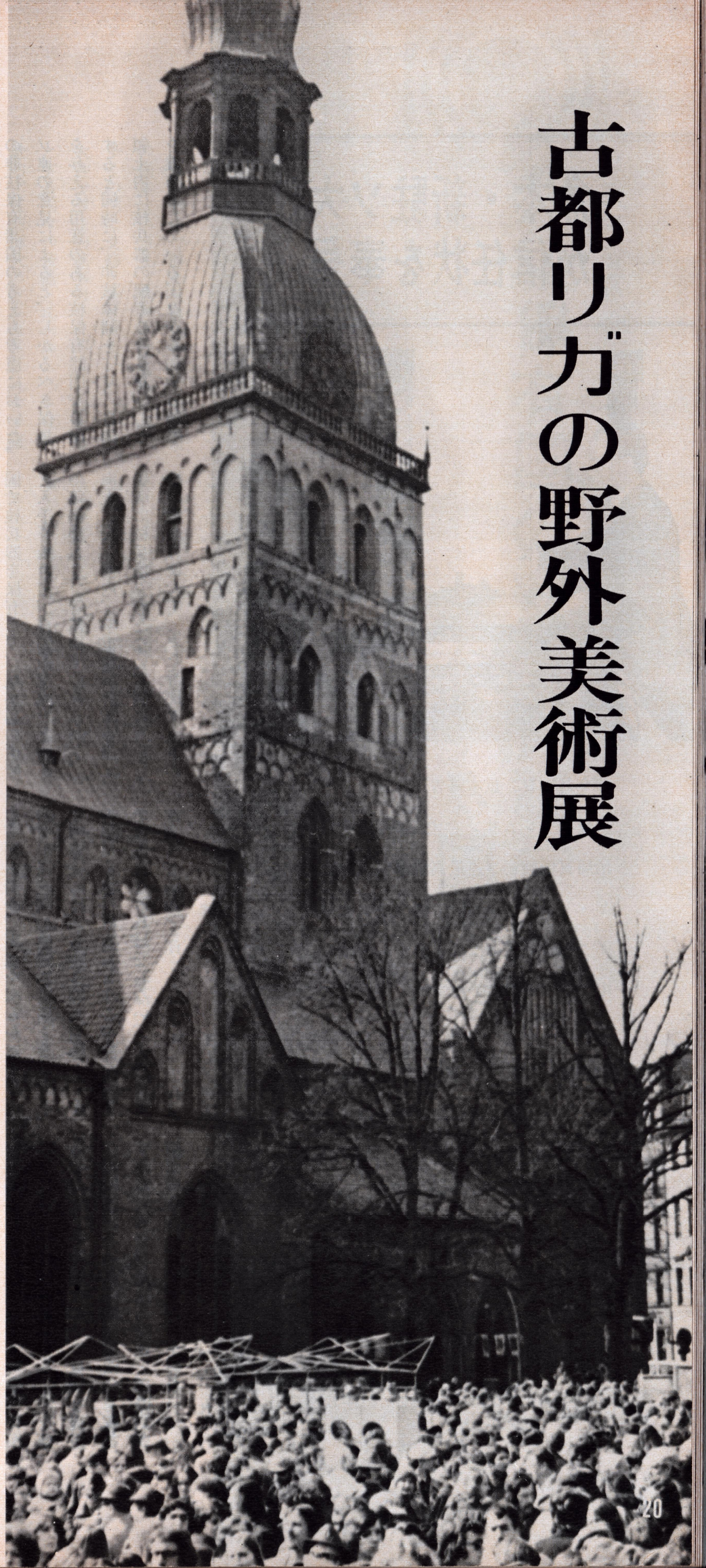
9月1日、魚本藤吉郎・駐ソ日本特命全権大使はクレムリンでソ連共産党中央委員会政治局員候補、ソ連最高会議幹部会第1副議長V・V・クズネツォフに信任状を奉呈した。

この奉呈式には日本側から松原進公使、田中義具、合馬敬、山本貞一各参事官らの大使館員が出席。ソ連側からはソ連最高会議幹部会書記M・P・ゲオルガゼ、ソ連外務次官N・P・フィリュービン、ソ連最高会議幹部会国際交流部長V・G・ビソーチン、ソ連外務省部長N・N・ソロビヨフらが出席した。

信任状呈出とV・V・クズネツォフ、魚本氏のあいさつの交換のあと、M・P・ゲオルガゼとN・P・フィリュービンが加わって懇談が行われた。

写真はV・クズネツォフに信任状を奉呈する魚本・新駐ソ大使。

古都リガの野外美術展



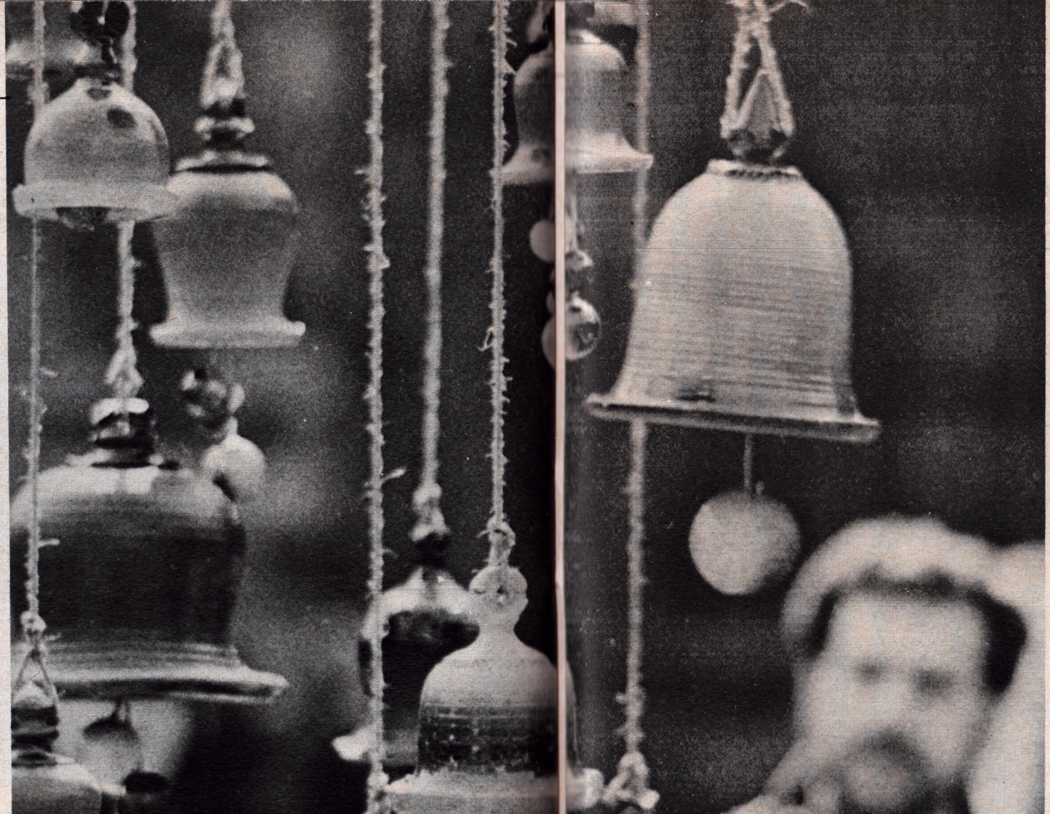
この焼きものの鈴は、リガ美術アカデミーの学生たちの作品。室内の飾りにも使えるので、人気が高い。

▶
野外美術展でにぎわうドムスキー寺院前広場（1978年４月23日）

◀
広場には過去１年間に制作されたラトビア共和国の若い美術家たちの作品――水彩画、焼きもの、油絵、ポスターなどが展示される。

この野外美術展は共和国の各地で開かれていた〝美術の日〟の最後を飾る祭典。ラトビア美術家同盟のエドガル・イルトネル理事長（ソ連人民美術家）も出席して、あいさつ。





ラトビア共和国の首都リガにあるドムスキー寺院前の古い広場は、年に一回、大展覧会場に姿を変える。イーゼルやパネルや陳列台に水彩画、ゴブラン織り、油絵、ポスター、木、金属を使った作品、焼きもの、その他の材料の作品が展示される。これはみな、ラトビア共和国の若い美術家たちがこの一年間に制作した作品である。

ラトビア共和国では〝美術の日〟を催すのが春の恒例行事になっている。共和国内の各都市で「陶磁器と花」展、「春の水彩画」展、「青年彫刻家」展、「ラトビア・ゴブラン織り」展、「生活



の中のデザイン」展、「青年グラフィック」展、「蔵書票」展などが開催される。そしてこれらの〝美術の日〟の最後を飾るのが、ドムスキー寺院前広場の美術祭だ。

……太鼓の響きとともに何世紀もの歴史を秘めた石の舗道に行列が現れる。先頭は少年鼓手たち。そのあとにクラシック・カーの行列が登場する。ついで、美しい衣装を着た騎乗者の一団が続く……

広場ではまた、詩人たちが詩を朗読



祖先たちのことをかいた絵物語……

広場の至るところで若者たちの話がはずむ。





展覧会の始まる何時間も前から、作者が広場に現れて自分で飾り付けをする。

この日だけは、広場への騎馬の乗り入れも大目に見られる。





準備は早めにしておかないと。展覧会が始まったら、作者でもなかなか自分の作品のところに近付けない。

し、モデルたちが最新のモードを披露する。

この祭典には数万人のリガ市民と観光客がやってくる。カメラのシャッターを押す音や8ミリ・カメラを回す音があちこちで聞こえる。ドムスキー寺院前の野外美術展は見物人たちを大いに楽しませているようだ。

ソ連取材の旅から帰って



日本工業新聞社編集局
第二工業部次長　倉田　雅生

七月下旬から八月上旬にかけて、ノーボスチ通信の招きでソ連を訪問、各地の研究所、工場を取材した。滞在中現地で五十人をこえるソ連の科学者、工場幹部に会ったが、いずれも日ソ友好を望み、日ソの経済・技術交流促進の必要性を強調していたのが印象的であった。

◇

こんど取材したのは、西シベリア・ノボシビルスクに置かれた科学アカデミー・シベリア総支部、モスクワのゴスプラン（国家計画委員会）付属生産力研究委員会、自動機械工場、ウクライナ・キエフのサイバネティックス研究所、工作機械工場、ベロルシア・ミンスクの核エネルギー研究所、冷蔵庫工場など、合計十ヵ所の研究所、二つの工場。いずれもソ連の産業、技術をリードする代表的な研究所、大工場であった。

外国貿易次官との会見

また、モスクワでセミチャストノフ外国貿易省第一次官、フェドレンコ科学アカデミー副総裁とも会ったが、二週間のソ連取材のなかで、一番手ごたえを感じたのは、なんといってもセミチャストノフ次官との会見である。

ちょうどそのころ、日本の財界、産業界は日ソ間に複雑な問題がおきているなかで、ソ連がどういう対日政策をとってくるかに関心があった。これにたいしてセミチャストノフ次官は「今秋、日ソ経済合同委員会の幹部会議を開き、日本側首脳と日ソ経済協力の今後の方向を話し合いたい」と述べ、日本経済界の疑問に答えてくれたのである。

日ソ経済合同委は、シベリア開発を中心にソ連と日本の経済界が経済協力について協議する場、日ソを結ぶ最大のパイプである。

しかしここ数年、シベリアの日ソ協力は〝中だるみ〟が続いている。昭和四十年代に日ソが合意したシベリア案件は順調に進んでいるが、最大の〝目玉〟だったチュメニ原油の開発輸入プロジェクトが〝流産〟して以来、それに続く新規プロジェクトが登場してこないためである。そういう状態をどう打開するか、も日ソの関係者の大きな課題になっている。

そういう事情を考えると日ソ合同委幹部会議の意味は大きい。セミチャストノフ次官の会見でえた感触をまとめると、ソ連としては、まず一九七八年中に幹部会議で予備交渉したうえ、七九年または八十年に全体会議を開き、そこで八一年からスタートする第十一次五ヵ年計画の日ソ協力シベリア・プロジェクトを日本側に示す——というスケジュールを考えているようである。

その通りに進み、日ソが新規プロジェクトで合意できれば、日ソ協力は新段階をむかえることになる。

シベリア開発の本部で

ところで、シベリア開発といえば、ノボシビルスク南部のアカデムゴロドク（学者の町）に置かれた科学アカデミー・シベリア総支部で、ゲイツイ学術書記代理からきわめて興味ある話をきいた。「シベリア・プログラム」のことである。

シベリアの自然条件はきわめてきびしい。道路、鉄道、住宅、文化施設など基盤整備も欧露部に比べ立ち遅れ、慢性的な労働力不足に悩まされており、シベリア開発のテンポはとかく遅れ勝ちである。今春、極東・シベリアを歴訪したブレジネフ書記長は各地で、工場建設の遅れ、労働の非能率性を指摘したが、それだけシベリアがかかえる問題点は多い。

このシベリア・プロジェクトは、そうしたシベリアの科学的、経済的、社会的課題を総ざらいし、「全科学者が全力をつくす」という壮大な〝実験〟である。テーマの数は二十以上といわれ、すでに今春から、「バム鉄道建設」「褐炭の有効利用」など緊急を要するテーマについては具体的な研究活動がはじまったという。

つまり、一九八〇年代から二十一世紀へのシベリア未来像を頭において、それを具体化しようというもので、それだけにシベリアの科学者にとって問題解決に意欲がそそられるようで、ゲイツイ代理は「これは初めはあるが、終りのないプログラムだ」と意欲満々だった。

また、モスクワの科学アカデミー本部で会ったフェドレンコ副総裁の会見も印象的だった。フェドレンコ副総裁は「ソ連は戦争で二千万人を失った。その〝第二の波〟が現われる次の第十一次五ヵ年計画後半から新規労働者の就労が減る。そのなかで、どう経済成長するか、それはソ連の将来にかかわる問題だ」と率直に語ってくれた。シベリアでの労働力不足はきいていたが、二億六千万人の人口をかかえるソ連にこうした〝悩み〟があるとは正直なところ初耳だった。

ソ連は、現行第十次五ヵ年計画のもとで「質と効率」をかかげ生産設備の自動化、経済・社会各分野のコンピュータ利用に懸命に取り組んでいる。モスクワのオルジョニキーゼ・プラント工場、キエフのゴーリキー記念工作機械工場は自動機械・プラントの需要増に対応するため、工場の増設計画をもっていた。キエフのサイバネティックス研究所では、これからの電算機高度利用に備えて従来バラバラだったソ連製電算機の機種を互換性のあるファミリーシリーズに再編成した事実が確認できた。フェドレンコ副総裁のブリーフィングは、そうした動きを理解するうえで大いに役立ち、得るところが非常に大きかった。

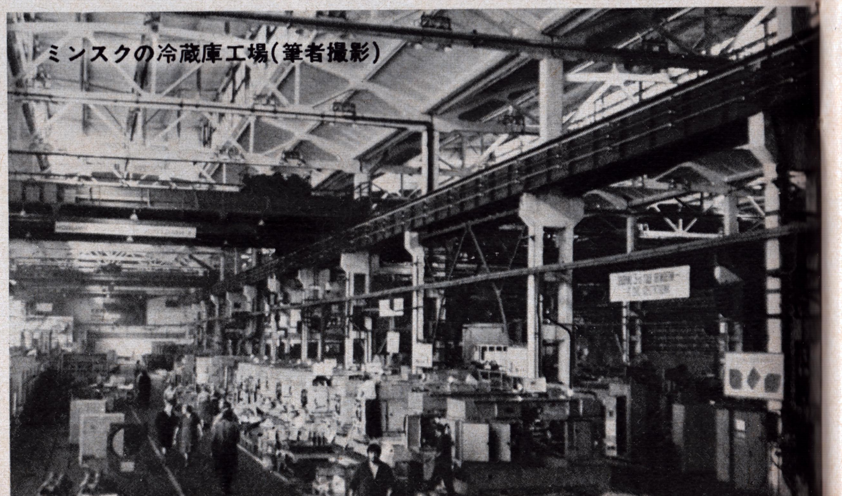
「自力開発」への自信

ソ連滞在中、カーター米大統領がいわゆる人権外交の立場からタス通信のオリンピック報道用のユニバック電算機の禁輸措置をとるという事件が発生した。これはオリンピックを機会に西側の先端電算機の技術を導入しようとしていたソ連には大きなショックだったようである。

しかし、その一方で「カーターの決定は心配していない、ソ連は自力で同じものを完成させる」というフェドレンコ副総裁の発言にみられるように、ソ連各地で「自力の開発」という言葉をきいた。電算機にかんしていえば、キエフのサイバネティックス研究所を中心に、目下、マルティ処理プログラミング機能をもち、命令処理能力では西側の実用機を上回る〝スーパー計算機〟の開発が進められており、それがフェドレンコ副総裁の自信の裏付けになっているように感じられたが、モスクワのゴスプラン生産力配置研究委のトカレフ副委員長も、「第十次五ヵ年計画の策定にあたって、とくに自力達成に注意した」と強調。シベリア開発についても「バム鉄道の建設にカネがかかるので、極東・東シベリアの開発には時間がかかるが、時間をかけて自力で取り組む」という。

もちろん、日本との協力関係を否定しているわけではない。「日ソの協力は相互の利益になる。しかしそれは助けを求めるのではなく、あくまで開発のテンポを速めるため」であり「日本との協力がなければ自力でやる」と自力開発の基本線は崩さなかった。

こんどのソ連訪問は、取材対象が研究所、工場ばかりという〝硬派〟の取材に終始した。その意味でミンスクでの冷蔵庫工場見学はソ連の国民生活向上の一端を知るうえで非常に参考になった。ここでは、半自動ながら大量生産方式が完全に定着し、ボルチン、スモレンスクの工場をあわせると、全ソの生産の五分の一にあたる年間百二十万台の冷蔵庫を生産している。その生産力を背景に冷蔵庫の普及率もすでに昨年で七〇%をこえ、一般家庭から若夫婦、独身者への普及がはじまっており、冷蔵庫に関しては、ソ連も〝選択時代〟にはいっているという。女性も仕事をもち、いわゆる〝共稼ぎ〟があたりまえのソ連では、冷蔵庫が必需品であり、ソ連政府が積極的に生産増強政策をとったという事情もあるようだが、これまでソ連の消費材部門は立ち遅れているという固定観念をもっていただけに、これはソ連における一つの〝発見〟であった。



ミンスクの冷蔵庫工場（筆者撮影）

21世紀の稲作農場

ノーボスチ通信記者　ユーリー・ゼニューク



クラスノダル地方クバン川流域の水田

ソ連のコメどころ

あらゆる農作物のうちで、これこそ人が水中で育成する作物と胸をはって言えるのは、まず米であろう。なぜかというと、コメは普通人間がうまくコントロールしなければ、正常に育たないからだ——クラスノダル（北カフカズ）のクバン農業大学教授エブゲニー・アリョーシン生物学博士はこう考えている。

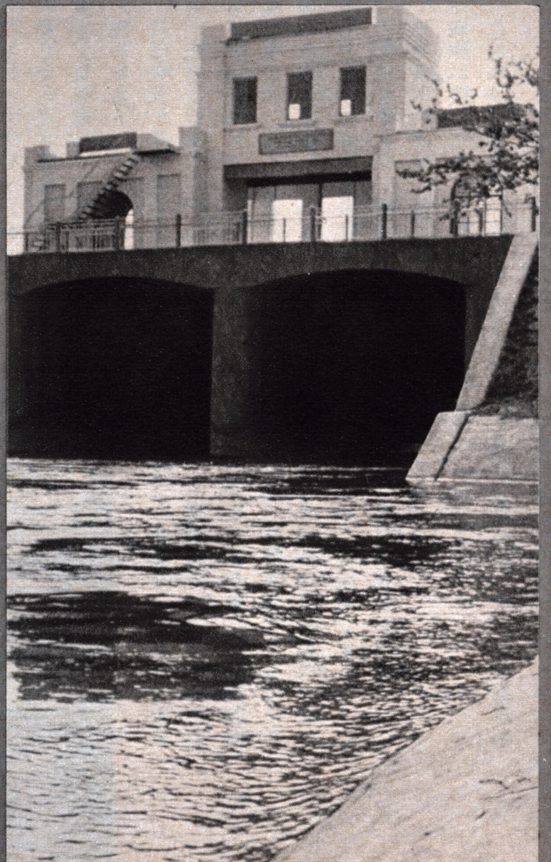
事実、この熱帯植物は、本来の土壌、気候条件とは全く無縁の北緯47度、さらには49度線（世界最北の米作地帯）にまで、人間の意志で北進させられている。北緯49度は最北の米作地帯であるにもかかわらず、ここのコメの収穫量は伝統的な米作地帯さえ追い越している。伝統的米作地帯とはクバン川（ソ連欧州部の南）一帯のソ連の最も豊かなコメどころである。

クバンでコメが大量に生産されるようになったのは、第2次世界大戦後である。クバンの現在のコメの年間収穫量は七〇万t（一九七七年のソ連のコメの総収穫高は二二一万t）。コメはクバンのほか、ウズベク共和国、カザフ共和国南部、ボルガ下流地域、極東、プリモーリエ（沿海地方）などでも栽培されている。

クバンでは稲作のために、約二〇万haの近代的な灌漑網



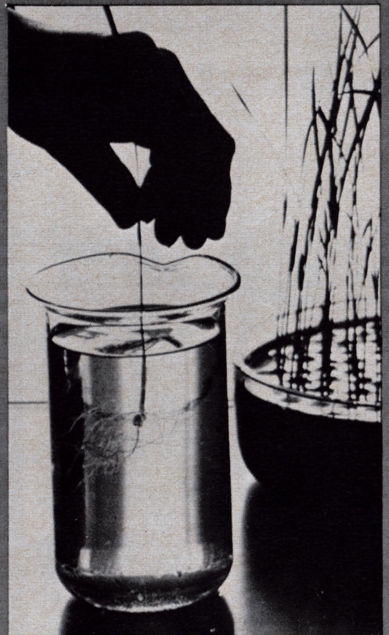
各農場への給水をコントロールする自動配水制御盤

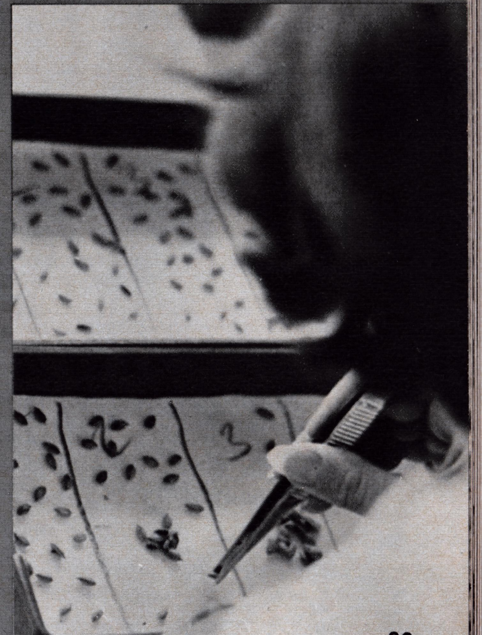


ペトロフスカヤ・アナスタシエフカ灌漑施設の水門の一つ









上　稲の耐塩水性の測定をするエブゲニー・アリョーシン・クバン農業大学教授（ソ連国家賞受賞者）
右　レーザー装置を使って行われている水田のレイアウト
下右　モミの抽出検査
下左　環境要因にたいする稲の反応を調べる実験（コメ研究所の生理学・生化学実験室で）

が建設された。これは数千kmの灌漑水路と排水路、四方八方に通じた道路網と送電線網、鉄筋コンクリートの大建造物などからなっている。四万haの水田を受け持つペトロフスカヤ・アナスタシエフカ灌漑施設では、コンピューター制御の自動機械や遠隔操作機械で、8つのコルホーズ（集団農場）とソフホーズ（国営農場）に水を配分している。いまクバンの他の水田も次々にこの方法に移っている。言いかえると、工業手段でコメの栽培に都合のよい環境——熱帯なみの豊富な熱がないのは欠点だが、この欠点は、生育期が比較的短い新品種のコメの栽培によって幾分償われている——が新しくつくられているのである。現在の平均収量はha当たり約5tの線に安定している。もっともha当たり10t、あるいはそれ以上の収穫をあげている農場も多い。1haの栽培に要する労働支出量は現在、70人時（1人時は1人1時間の仕事量）である。

クラスノダルの全ソ・コメ研究所副所長のウラジーミル・ルデンコ工学博士候補の話——「われわれの条件だと、ha当たり少なくとも平均14—16tのコメを安定生産できるはずだ。コメの生物学的ポテンシャルは30—35tだから、さきの見当はいっそう確実だといえる」

自動化農場の構想

ルデンコ副所長は昨年末まで、この地方の〝コメの都〟と呼ばれているスラビャンスク・ナ・クバニという小さい町で、クバン自動機械・遠隔操作機械実験所の所長を勤めていた。この実験所の50人の研究員は、コメ栽培の自動化農場の大規模な設計計画を作成した。この農場はまさしく21世紀の農場といえるもので、われわれのコメ作りにかんするわれわれの考えを根本的に変えることがねらいだ。このような大きな課題を解決するには総合的なアプローチが必要であり、実験所で、生物学と数学、機械工学と無線電子工学、自動機械と遠隔操作機械、水力工学と遺伝学、化学と経済学の学者や専門家が働いているのも、このためである。

学者たちの設計によると、コメの自動化農場は事実上循環方式、つまり一種の限られた規模の工学施設となろう。この施設でイネは、生育に必要な最適条件を自分でつくり出す。土壌までがポリエチレン膜あるいはその他の遮蔽材で、その下の底土から隔離される。これで、手の打ちようのなかった地下水の有害な影響を防ぐことができるし、また広い地域の土壌の流失を防ぐこともできる。

「これまでのコメ作りの農作業は、圃場全体を対象として行われてきたが、これからはイネの1本1本を対象として仕事をやらねばならない」と実験所のスベトラナ・アルテイリャコワ次長は考えている。

将来の稲作農場には、1本1本とはいわないまでも小グループのイネを対象として、ミニ送信機が設置されよう。イネに注水あるいは追肥が必要だとか、温度条件が変わったとかの情報をつたえる送信機の信号が中継装置を経て制御盤に入ると、コンピュータが入力データを分析し、早速自動機械と遠隔操作装置を通じてイネの希望をかなえる。

温廃水の利用も

そのほか各水田（現在のものよりも大きくなる）には温度、水、肥料の状態を自動調節する装置がとりつけられる。だからこの装置がなんらかの原因で十分に作動しない場合のほかは、中央制御盤は介入しない。これまでやってきた表面散水と組み合わせて、必要な肥効成分を含む水がかけられる。作物の収穫ぎりぎり前まで農場で必要な人間といえば、指令係ただ1人である。

すでに述べたとおり、クバンの気候では、熱帯植物に必要な熱がたりない。そしてこれは、調整が最もむずかしい要因である。0・1tのコメを生産するのに、四〇〇—五〇〇立方mの水が必要なことを考えると、これだけの水の加熱費がどんなに高くつくかは容易にわかる。学者が未来の灌漑施設で大容量発電所の温廃水を使おうと考えているのはこのためだ。この廃水は、途中の熱の損失を計算に入れて、最高一〇〇kmの距離を運ぶことができる。また部分的に地下から噴出する湯を使うこともできよう。やがてそのほかの可能性も出てくるかもしれない。要は、このような研究方向がごく最近生まれたものであり、熱土地改良というまだなじみのうすい術語が使われていることだ。

クバンの学者は、未来の水田の設計づくりを2段階に分け、設計された灌漑施設のあれこれの要素と関連のある調査、研究をつづけるとともに、コメの収穫のプログラミングに努力を集中している。ソ連では、この方法を小麦栽培ですでに使い始めているが、コメの生理学と農業技術は小麦とひどく違っているので、これまでの経験もおいそれとは使えない。

プログラミングの方法とは、学者が予め計画した収穫をもとに、それぞれの生育段階におけるイネのさまざまな要求やこの要求を最もよく満たす方法を決める、というやり方である。このため、作柄の数学的モデル（非常に複雑で、大量のデータを含んでいる）がつくられ、モデルはコンピュータに記憶させられ標準基のような役割をする。つまりこの標準基にもとづいて農場におけるコメの実際の生育過程が調べられる。農業技師が毎日、気温と土壌の温度、水田の水位などを測定する。これらのデータはコンピュータに入り、コンピュータは標準基とデータを照合し、農場をモデルどおりの状態にするのに必要な勧告を農業技師に出す。勧告を受けた農業技師は、あれこれと追肥をしたり、水位を加減する。こうしてイネの生育状態は、モデルどおりの水準にたえず引き上げられ、計画どおりの作柄が得られるまで、ずっとその努力が続けられる。

計画できる収穫量

プログラミングにかんする理論研究に3年かけたのち、一九七四年に、学者は実際の生産条件での実験に取りかかった。計画どおりの収穫量と実収とのずれは大体5%以下で、たとえば『クバン』ソフホーズの農場では、計画の収量12tにたいして、実績は11・2t、計画が10tの場合は9・8ないし10・2t、計画の8tにたいして実収は7・8tであった。このように新しい方法の効果は一目瞭然だったので、たちまち普及し始めた。一九七七年にはプログラミングの多くの要素がすでに五〇〇〇haに適用された。

一九八〇年までにスラビャンスク地区に建設され、未来の農場のひな型となる20haの実験自動化農場の具体的設計は近く完成の予定である。これが完成すれば、学者は自分の構想を実際に点検できるだけでなく、設計を改善することもできよう。

ウラジーミル・ルデンコの意見では、21世紀の農場といえるこの型の最初の生産農場は、今世紀末よりもずっと早く出現しよう。

「これは八〇年代の、しかもその前半にも現れよう」とV・ルデンコは断言した。

ハバロフスクで夏休み

ピオネール・キャンプで過ごした新潟の小中学生

ハバロフスク市の姉妹都市新潟の小中学生たちが、ハバロフスク地方労働組合評議会の招きで7月20日から8月3日までハバロフスク市郊外の夏季児童キャンプで過ごした。

商業従業員組合管理のこのキャンプには、極東における国内戦の英雄、コムソモール員のビタリー・ボニブルの名が付いている。キャンプ場は、ハバロフスク市の東北5㎞の景色のよい丘の針葉樹や広葉樹の林の中にあって、そのそばをアムール川が流れている。

ここで渡辺薫先生と新潟県労働組合評議会の桝山真一氏に引率された10人の小中学生たちは三六〇人のソ連の児童たちと一緒にキャンプ生活をたのしんだ。

ソ日両国の児童たちはすぐに打ちとけ、2日目からはもう通訳を通さなくても、ジェスチャーやロシア語と日本語のかたことで結構意思が通じ合った。



すぐ仲良しになったハバロフスクと新潟の子供たち

日本の子どもたちが遊戯の一つに名付けた「平和と友好」は、こんどのキャンプ生活中ずっと両国の子どもたちのモットーとなった。

8月1日には〝日本デー〟が催され、桝山真一氏がまず日本について語り、日本の小中学生たちは愛唱歌をうたい、遊戯や踊りを披露して、それをソ連の子供たちに教えた。次の日は〝ソ連デー〟。それが済むと第11回世界青年学生祭をテーマにした〝われらが船はハバナへ〟という名のゲーム劇が行われた。



新潟の小学生がハバロフスクの児童に贈った絵

エブゲニー・ブガエンコ

両国の子供たちは、いろいろの民族の歌や踊りを披露したり、アスファルトにかいた絵のコンクールをしたり、童話劇を演じたりした。キャンプファイアを囲んでのゲームや合唱、イチゴ採りやキノコ狩りもあった。キャンプファイアでジャガイモを焼くのも、テントの組み立て競争や徒歩競争をするのも、みんないっしょで、日本の子供も賞品をもらった。

このキャンプを去る日、子供たちはそれぞれ印象を語ってくれた。

村山裕介くん――キャンプの夏休みはとても良かった。ぼくたちは思う存分遊んだ。ロシア語はわからなかったけれどソ連の子たちの笑顔を見ると、親しみがわいた。

ツォイ・ナターシャさん――わたしたちは、日本の歌や踊りをたくさん教わった。わたしたちもいろいろ教えてあげた。今度日本に手紙を書きます。わたしたちの友情がこんごも続くように願っています。

田中宏敏くん――ここは良い所だった。自然や森があるし、空気はきれいだし、面白いゲームがあって。一番面白いゲームは〝われらが船はハバナへ〟だった。

ホドゾワ・ターニャさん――日本の小学生たちの歌がとってもきれいだった。みんなとお友達になれてよかった。

池田裕子さん――ソ連のお友達がたくさんできた。とくに仲良しになったのはオーリャとナターシャです。幾人かの住所を教えてもらったので、手紙を書きます。ここはとっても良いので、できたらもう一度きたい。



〝ゆかいなスタート〟競争で優勝した新潟の少年



渡辺　薫先生は次のように語った――「私達の夏休みの計画は、大変充実していたし、魅力的だった。お互いに言葉が違っていても、同じく平和と友好を目ざしているんだと感じた。ソ連の子供たちが集団の中で教育され、集団生活者として育っていることを強く感じた。ソ連の人々みんなが平和を守ろうとしているし、この気持ちが子供たちの考えの中にも生きていることが分かって、とてもよかった」

最後にこの夏季キャンプを、ハバロフスク地方労働組合評議会からもらった説明書で紹介しておくと――

ビタリー・ボニブル記念ピオネール・キャンプで子供たちは、24日間ずつ3交替（1交替に三七〇人の児童を収容）で夏を過ごす。キャンプでは教師やコムソモール・リーダー、料理人、医療関係者ら75人が児童の世話をする。ことしハバロフスク地方商業従業員組合が支出したキャンプの整備管理費は九万二〇〇〇ルーブル、ゲーム用具やスポーツ用具の購入費は五五〇〇ルーブル。国の子供一人当たりの支出は49ルーブルで、親の負担は9―12ルーブル。子供が多い家庭には、無料のキャンプ利用券が支給される。ハバロフスク地方では、今年このようなピオネール・キャンプが二二〇ヵ所開設された。国家はこれらのキャンプの維持費として四四万九〇〇〇ルーブル支出した。



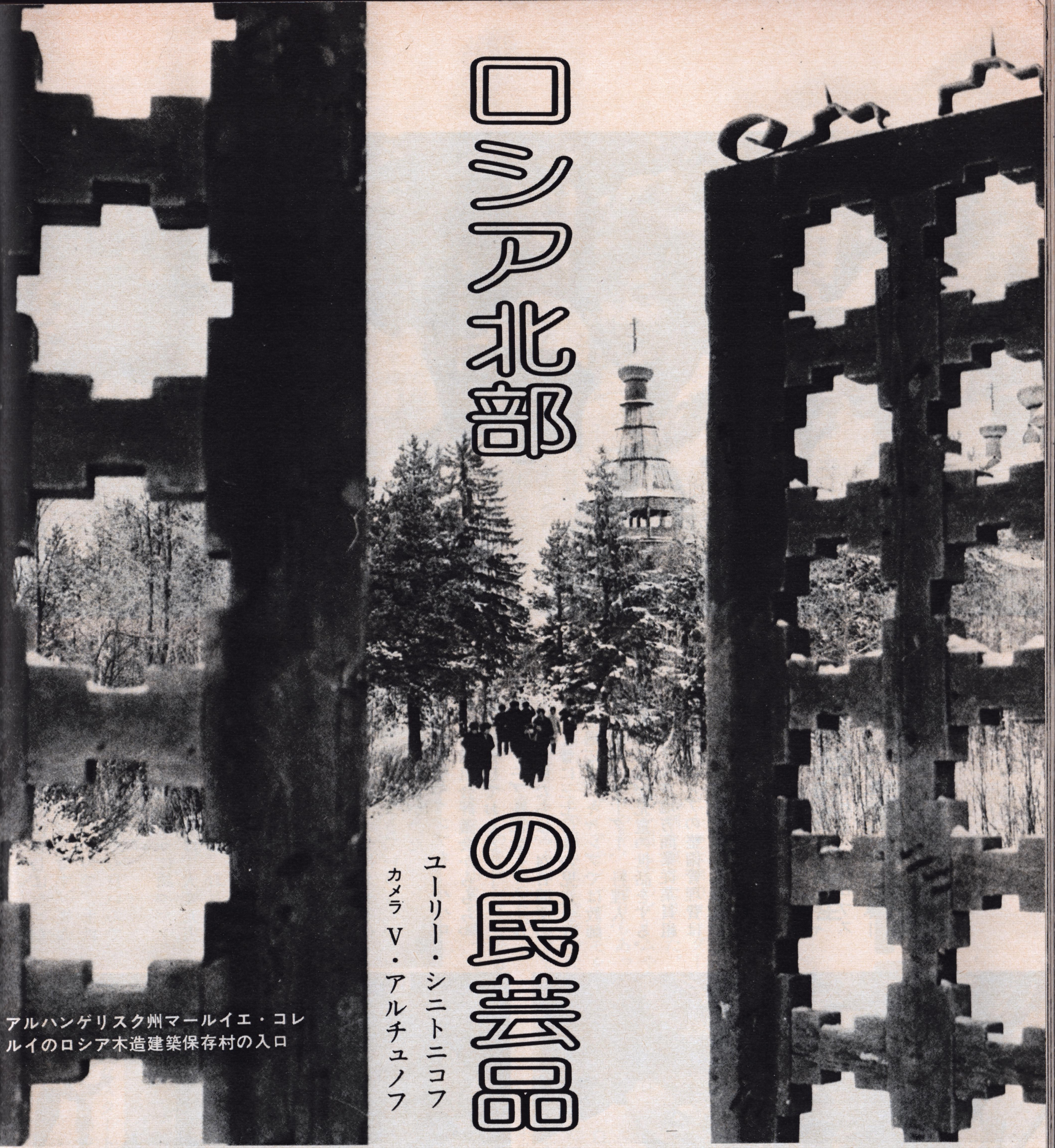
アドレスを交換する…



キャンプの昼食風景

ロシア北部の民芸品

ユーリー・シニトニコフ
カメラ V・アルチュノフ



アルハンゲリスク州マールイエ・コレルイのロシア木造建築保存村の入口

白海沿岸ぞいのソ連欧州部北部の地方は、古来工芸品で名高い。

この地方の寒さはきびしい。このきびしい自然が、海獣猟者や漁夫、船員やいかだ乗りといった男の職業の人々を〝育てた〟。そして外で働くシーズンが終わると、人々は外での荒々しい心を和らげ、歌をつくり、教会を建て、彫刻刀や絵筆をにぎり、粘土を焼く。

ソビエト政権は成立以来、民芸を貴重な文化財として保護してきた。

一九二一年にアルハンゲリスク付近のロモノソボ村（骨細工の中心地）につくられた国営の民芸品細工場は、やがてれっきとした工場に成長した。ここの骨細工はたびたび万国博に出品され、受賞してきた。また優秀な骨細工は、いまエルミタージュ美術館やソ連のさまざまの大美術館の所蔵品となっている。

ロシア北方の工芸家（骨細工だけではない）のすぐれた伝統を継承するために、10年前アルハンゲリスクに工芸品工場「ベロモルスキエ・ウゾールイ〔白海の模様〕」が設立された。工場長の工芸家ワレ



ベロモルスキエ・ウゾールイ工場製の装飾板（マナイタなどに使う）



右 ワレンチナ・ブグリナの最近作——高さ３ｍの鏡板（ベロモルスキエ・ウゾールイ工場の商標）





カルゴポリの粘土玩具。農村の生活をユーモアたっぷりに物語っていて、売れ行きは上々。

シチナ・ジェリャギナは、半年余り村々を回って、新製品のモデルとなるものを探し歩いた。そして年とった細工師たちのところで、孫や知人にたのまれてつくっているだけという色付けした粘土玩具を見付けた。わけをいうと、老細工師たちは、その忘れかけた民芸品をつくることに喜んで同意した。

はるかな森の中の村から送られてきたささやかな小包に、ジェリャギナは思わず胸がおどった。彼女の知り合いで、若木の樹皮でいろいろな物をつくる老人が、昔夏に村人たちがはいた樹皮製の軽い靴のセットを送ってきたのだ。やがて工場で何千足もつくられるようになったこの靴のみやげ用玩具は、いまとても売れ行きがよい。

老細工師の次の小包には、ニレの樹皮でつくった軽い円筒形のつぼが数個入っていた。昔はこんなつぼにひきわりや穀粉、砂糖、蜜それに牛乳さえも入れたものだ。

若い細工師ワレンチナ・ブグリナはこんなつぼを土地の博物館で見たが、そのとき見たつぼには色が施してあった。彼女はそこで絵筆をとった。こうしてロシア民族スタイルの製品がまた一つ誕生した。

「ベロモルスキエ・ウゾールイ」工場には〝民族的伝統を必ず守る〟という明確な仕事の原則が確立している。だから細工師たちは、たびたびこの道の名人のところへ出かけて行く。こうして彩色した木さじ作りの秘けつをつかむことができた。これらのさじの特別の製法を知っていたのは90歳の細工師一人で、なにぶん歳が歳だけに自分からアルハンゲリスクに出かけて行くのは無理とあって、細工師たちのほうから老人の住む村に出かけていった。いまこうしたさじは、北方住民やこの地方を観光旅行した人々の多くの家で見かけられる。

近く「ベロモルスキエ・ウゾールイ」は、アルハンゲリスク中心部の新しい建物に移転する。ワレンチナ・ジェリャギナの思いは、もうその新しい建物の工場に飛んでいる。

「そうだわ、ここに織り物工房、ここに毛皮製品の縫工場、あそこにみやげ用トランク用の鉄部品工場、そっちに家具工場……それがいいわ」





上　ベロモルスキエ・ウゾールイ工場製の民芸品に客の人気が集まる。(みやげ物店で)

右　老細工師の指導で古い民芸品の粘土玩具も復活。

左　北方民芸品のふるさとカルゴポリの春



太陽が飛び込んだ湖

——サーレマ島カーリ湖の謎

アレクサンドル・ハリコフスキー

本誌の読者はきっと、一九〇八年7月30日に、東シベリアのヤクーチアの森林に落ちたツングース隕石の謎について、聞いたことがあるだろう。今回は三〇〇〇年ほどまえにバルト海沿岸のエストニアで起こった同じような自然現象について紹介しよう。

サーレマ島のクレーター

私たちの飛行機は、バルト海に浮かぶサーレマ島の上を旋回した。私の連れのアウグストは窓の外を指して、ぽつりと言った——「カーリ湖です！」

私はサーカスの舞台のようにまん丸い湖を見た。少し離れて、まったく同じ形の小さな〝乾いた湖〟もいくつか見えた。それは、月面のクレーターを思わせた。

「よその天体からの使者を探そう」と私は冗談に言った。

「言い伝えによれば、あるとき太陽がこの島にぶつかった。カーリ湖はその墓なのです」とアウグストはまじめに答えた。「とはいえ、サーレマ島の異変について伝えているのは、伝説だけではありません……」

湖に近づいても、謎めかしさは消えなかった。むしろ逆だった。器用な巨人たちが築いたかのように、高くて険しい緑の土手が湖を取りまいている。湖を守る壁だ。何だってこんな物を？

すぐに私の考えていることに気づいて、アウグストが言った。

「いや、これは古代エストニアの城塞都市ではないのです。ここには、人間の労働の跡がありません」

「湖は深いのかい？」と私がきいた。

「底なしです。妖精たちはここから直接バルト海まで泳いで行くんですよ」

「妖精だって？」

「太陽が飛び込んだ湖に、ほかに何が住めますか？」

私は返事につまる。アウグストは詩を朗読する——「われは見ぬ、熱きサーレマを、そして溶岩のように、火が野を走るのを」

ガイドの説明によれば、大昔の異変はエストニアやフィンランドの民謡に盛り込まれているだけではない。最近の研究によれば、サーレマ島の出来事がバルト海沿岸からはるかに離れた他の諸民族の文献にも反映されている。

……ギリシャの詩人ロドスのアポロニオス（前二九五？—二一五）の叙事詩『アルゴナウティカ』の主人公たちは、聖なる湖に近づく。彼らは黙って、太陽をのみ込んだ墓のそばに立つ。

……紀元前4世紀。この地を訪れたギリシャの旅行家ピテアストは語っている——「エストニア人たちは私に、太陽が飛び込んだ大地の傷を見せてくれた。傷からは、煙が湧き上がっていた」

……12世紀。ドイツ年代誌の著者ハインリッヒ・ラトビースキーは、エストニアには太陽を呑み込む恐竜が住んでいる、と書いている。さらに3世紀後には、ドイツの地理学者セバスチャン・ミュンツァーが、エストニアでは夜ごとに燃えるヘビが空を舞う、と伝えている。

私たちがカーリ湖からもどったのは朝だった。島の上に太陽が昇りかかっていた。カーリ湖の円形の〝湖面〟からは霧が立ちのぼっていた。アウグストは思案顔でつづけた——「あなた方ロシア人には、火のないところに煙は立たない、ということわざがありますね。ここサーレマ島には、何世紀もたってからようやく煙の匂いが感じられるような火があったのです。この湖には、秘密が隠されていたのです。人々がこの湖にまじめに取り組むようになったのは、つい半世紀まえにすぎません。その最初の一人が、イワン・レインバリトです」

謎解きの発端

カーリ湖についての言い伝えを、感受性の強い少年は父親から聞いた。彼は半生をかけて、湖の秘密の解明の準備をした。鉱山技師の職業を選び、ペテルブルグ（現在のレニングラード）の大学を卒業して、エストニアにもどった。

彼はあるとき、鉱山局長に呼び出された。

「きみにカーリ湖の調査をしてもらいたいんだが……湖の周辺に石膏と岩塩があるという報告が出されている」

レインバリトの心はおどった。

何週間、何ヵ月と調査が行われた。岩塩や石膏がサーレマ島にないことは明らかだった。しかし、どんな力も、カーリ湖の謎を解こうというレインバリトの決心を棄てさせることはできなかった。彼は次々に仮説を立ててはそれを打ち消した。たとえばだれかが、カーリ湖は、水や溶岩や蒸気が噴出した跡で、いわゆる休火山だ、と主張した。では、ガスの充満は？ しかし、ここにはガスが充満した跡はない。レインバリトの研究はそれを明快に示していた。では結局、湖はどのようにしてできたのか？

鉱山技師レインバリトは、事実だけを信用した。しかし、ボーリングの結果をどう説明すればいいのか？ 地面が逆転していたのだ。白雲石の裏返しになった層があり、その下に、2階建てのビルほどの厚さの白雲石の粉末の層……そしてレインバリトが湖の底で発見したのは、あまり大きくない〝漏斗〟だった。これは、小さな天体がものすごい勢いで地面に突っ込んだような、強烈な打撃の結果以外に考えられないものだった。

一九二七年にレインバリトは調査の結果を報告した。

「私は、サーレマ島に巨大な隕石が落下したと断言します。隕鉄です。隕石は落下のまえに爆発し、主クレーターと周辺の小クレーターができたのです」

居並ぶ技師や学者たちから質問が出された。

「しかし、隕石が爆発するというような事実はまだ知られていません。それに、その隕石はどこへ行ったのです？ 破片なりとも発見できましたか？」

「雨に洗い流されてしまったのかもしれません。畑を耕していた農夫が拾い上げたかもしれません。いずれにせよ、隕石を探す必要があります」

レインバリトは調査をつづけ、一九三七年についにサーレマ島で、一〇〇gほどの隕鉄を採集した。これが湖の謎の解明の始まりだった。だが一九四一年、イワン・レインバリトは帰らぬ人となった。

レインバリトの後継者

この種の発見がつねにそうであるように、レインバリトの発見は、いっそうたくさんの新たな問題を提起した。というわけで私は、レインバリトの研究を受け継いでいるエストニア共和国科学アカデミー地質学研究所研究員アゴ・アーロエ博士候補を訪ねた。彼は次のように語った。

「カーリ湖の超隕石は、史上まれな現象です。学者たちは、このような現象が起こるのは五〇〇〇年に1回ぐらいの割合だと考えています。さらに、地球の表面の約3/4が海であること、人類の歴史はせいぜい数千年であることを考えれば、巨大隕石が人間の住む地域に落下したという事実は（ついでながらカーリ湖の超隕石は人類の記憶に残っている最後のものです）、人類の歴史を解明する上でも多くのものを含んでいるはずです。

一九五五年の最初の野外活動で、私たちはかつてレインバリトが集めたものの約5倍、四五〇gの隕鉄を採集しました。その後、長年にわたる研究が開始され、私たちといっしょにモスクワやソ連の他の都市の学者たちもこの研究に参加しました。こうして次のことが明らかになりました。カーリ湖の隕石の重量は約一〇〇〇t。落下時の速度は秒速20km。隕石は大気の上層に突入して、上空一二五kmのところで爆発。太陽のように明るく、半径七〇〇km以内のところで見ることができた。サーレマ島には隕石の破片が〝鉄の雨〟となって降り注いだ。大きな破片は大気を突き抜けて爆発し（最大の隕石孔は直径一一〇m）、その他の破片はもっと小さいクレーターをつくった。

レインバリトは、これが起こったのは海が後退してサーレマ島が海底から姿を現わした四〇〇〇—五〇〇〇年ほどまえのことだと考えていました。しかし、ラジオ・アイソトープを使った最新の方法による私たちの研究によれば、カーリ湖の隕石孔はもっと新しいもので、紀元前7世紀の初頭にできました」

伝説が教える湖

私はタリン（エストニア共和国首都）の友人ヤナ・オイヤロの家にいる。彼は民族叙事詩『カレワラ』の一節を私に読んで聞かせる。叙事詩の主人公たちは、意地悪な魔法使いによって闇の国に追放されてしまった太陽を探しに出かける。主人公たちを助けるために、雷と稲妻の神は新しい太陽が成長するもとになる火花を出す。雷と稲妻の神はこの火花を揺りかごに入れて、ある娘に揺すらせるが、娘はそれを落としてしまい、火花は空の屋根を突き抜けて飛ぶ。主人公たちは叫ぶ——あれは何だ？ 太陽か、月か、それともいままで見たこともない何かか？ すると娘が説明する——これは不思議な炎。

オイヤロは黙り込んだ。私には、彼がサーレマ島で起こったことを考えているのが分かった。この出来事は長い年月、『カレワラ』の詩的諸形象の中に書きとめられていた。これを最初に証明したのは、エストニアの研究者で作家のレンナルト・メリだ。叙事詩の中には、ミツバチが現れて、主人公たちにアウエ湖への道を示す。道の特徴を正しく解明すれば、『カレワラ』はカーリ湖へ通じる、とレンナルトは考えている。

サーレマ島の異変を反映していることの作品の迫真的な描写と正確さは私を

驚かせた。このように語ることができるのは、この特異な出来事を目撃した者だけである。とはいえ最近までは、サーレマ島への隕石の落下を直接に目撃した者はだれもいないと考えられていた。

考古学者は語る

「カーリ湖の隕石には、目撃者がいたのです。爆発による犠牲者さえいました」と語るのはエストニアの考古学者ベロ・ルイウガス博士候補。「あるとき地質学者たちが試掘坑を掘りました。彼らは紀元前6世紀の層まで掘り進み、陶器の破片、骨その他、隕石とは一見何の関係もないようなものを掘り出しました。それらは私のところへ持って来られましたが、それを見るなり私は〝やったぞ！〟と叫びました。この島に、遠いむかし、人間が住んでいたのです。いつ？　それを解明するために科学アカデミーはサーレマ島に考古学調査隊を派遣しました。私もそれに参加したのです。

こうして新しい掘り出し物――いや、発見がありました。カーリ湖から遠くないところで、私たちはちょうど紀元前六〇〇年（ラジオ・アイソトープ分析によって分かった）に起こった、つまり巨大な隕石が落下したときに起こったものすごい火事の焼け跡を見つけたのです！　二人の住人――アスバとリダラがこのとき死にました。私たちはこの二人の遺骨を発掘しました」

「アスバとリダラが隕石のために焼け死んだという確証は？」

「もっと正確に言えば、二人は爆発の衝撃波でやられ、そのあと焼かれたのです。発見された品々は、この二人が大あわてとパニックのために置き去りにされたことを示しています。爆発のためとしか考えられません」

「それからどうなりました？」

「何年かたって、人々は恐怖を克服してこの〝聖なる湖〟にもどってきました。ここで発見された銀製品は、沿バルト地方で考古学的に発見された唯一の銀製品です。このことは、カーリ湖で生贄（いけにえ）を献げる儀式が行われていたこと、湖そのものが神格化されていたことを証明しています。

一九七八年5月、ソ連のさまざまな都市からやって来た専門家たちが、サーレマ島で〝カーリ湖の奇跡〟を目のあたりに見た。これらの人々はカーリ湖を、隕石が月や火星の表面につくった巨大なあばた――クレーターと比較した。天体の秘密がまた一つ解明され、サーレマ島の異変を目撃した人々の心理も明らかにされた。

カーリ湖からは2本の道が延びている。1本は歴史の彼方への道であり、もう1本は宇宙の彼方への道である。しかし2本とも、地球と人類の歴史の一部分なのである。

シャボテン公園のシベリアリスに二世

昨年9月、伊豆シャボテン公園（静岡県伊東市）にモスクワ動物園から日ソ交流協会のあっせんで5組のつがいのシベリア・リス（赤リス）が送られてきた。

今年の5月から7月にかけてこのリスたちの二世が9匹生まれて、係の人たちを喜ばせた。寒いモスクワ生まれの親リスたちが、日本の暑い夏を乗りきれるかどうか危ぶまれたが、一時はげんなりしたものの、係員の努力で、今では子リスたちと一緒に舎内をかけまわっている。

乳離れした子リスたちに係の人たちはミルクをやっていたが、今ではリンゴやサツマイモ、ドングリなどをもらってすくすく育っている。これらのリスたちは、係員にすっかり慣れて、頭や肩にも乗るようになっている。園では、どんどんこのリスたちを増やして、園内に放し飼いする予定でおり、また来園者に子リスを分けることも考えている。

関係者たちはこういう形でソ日間の交流が定着したことを喜んでおり、リスが〝親善使節〟になることを願っている。



人にすっかり慣れた親リス



ハイ〝離乳食〟！　安心しきった子リス

未来をえがくSF画家

工学博士候補　ウラジーミル・シチェルバコフ

20世紀は人類の宇宙時代の幕開けであったが、めくるめくような遠い未来に、人間ははたしてどうなっているだろうか？　そのころ人間はどんな威力をもつだろうか？　人間は太陽系を組み替えるだろうか？　そして、果てしない問題の答えを求めて、どのような未知の世界に入り込んでゆくのだろうか？

われわれの心をときめかせるいろいろな問題に初めて答えようとしたSF小説に続いて、こんどはSF画が現れた。この絵画では、科学と芸術という二つの根本要素が、ぴったりと有機的に結びついている。

このジャンルの創始者の一人――ソ連のユーリー・シュベツは、SF画家としてSF絵画史を飾る存在となっているが、彼の作品は、磁気の光に輝く、おとぎ話のような銀河系や星でいっぱいの広大な宇宙を驚くほど綿密に描いている。

いまの観測計器では、まだまだ宇宙観測は無理だ。たとえば最新式の望遠鏡を使ったとしても、地球型の惑星を直接観測することはできない。だから科学の結論や仮説をもとに想像を働かして描いた画は、宇宙の微細構造を見る少ないチャンスの一つとなっているといえよう。

ユーリー・シュベツのほかにも、SF絵画をかいている人は多く、大学教授、労働者、技師などソ連各地のさまざまな職業の人が絵筆をとっている。そのなかには宇宙飛行士のアレクセイ・レオーノフさえいる。こういう人がいまSF画の分野でジュール・ベルヌ、コンスタンチン・ツィオルコフスキー、ハーバート・ウエルズの仕事を継いでいるのである。

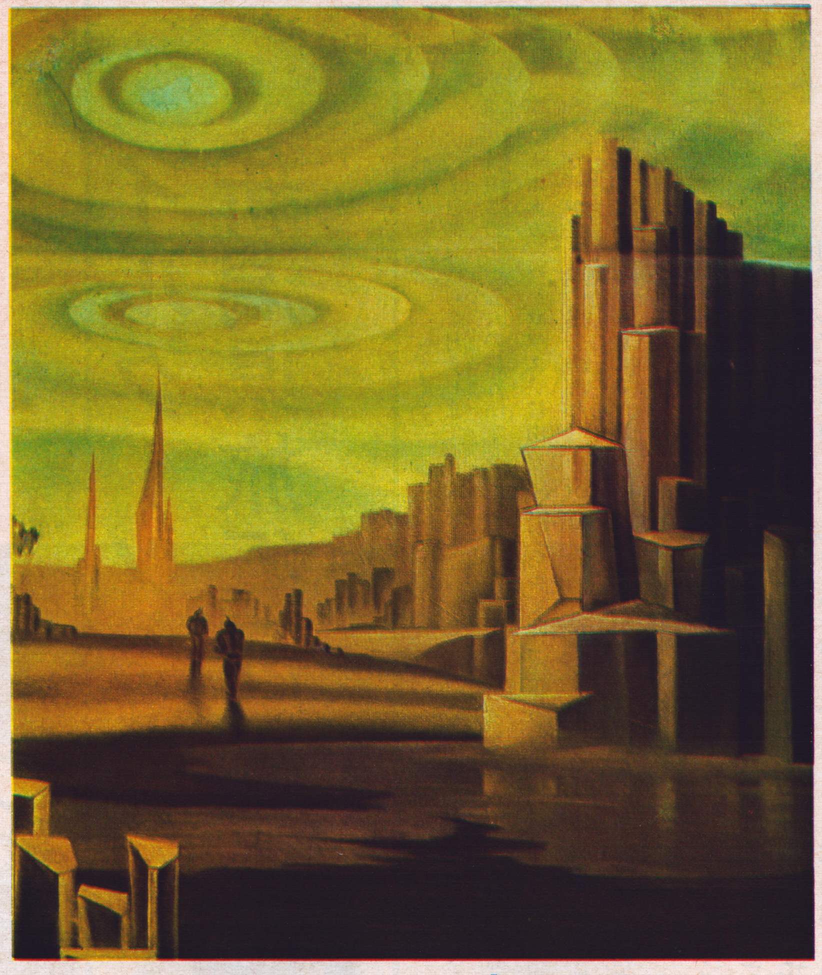
ソ連の月刊科学普及誌『青年のための技術』（発行部数一七〇万）は『明日の世界』というコンクールの実施を発表し、SF画を募集したが、プロ、アマを問わず、あらゆる年齢の画家が同誌に作品を送っている。同誌はすでに数年前からSF画のすぐれた作品をカラーで掲載しており、また同誌の移動展は各国で開催され、好評であった。

いまもこのコンクールの応募作品が、日本をはじめ多くの国から来ている。外国の画家のうちのリーダー的存在は、ブルガリアのジミトル・ヤンコフとプラメン・アブラーモフで、二人とも、なんどもコンクールに作品を寄せている。

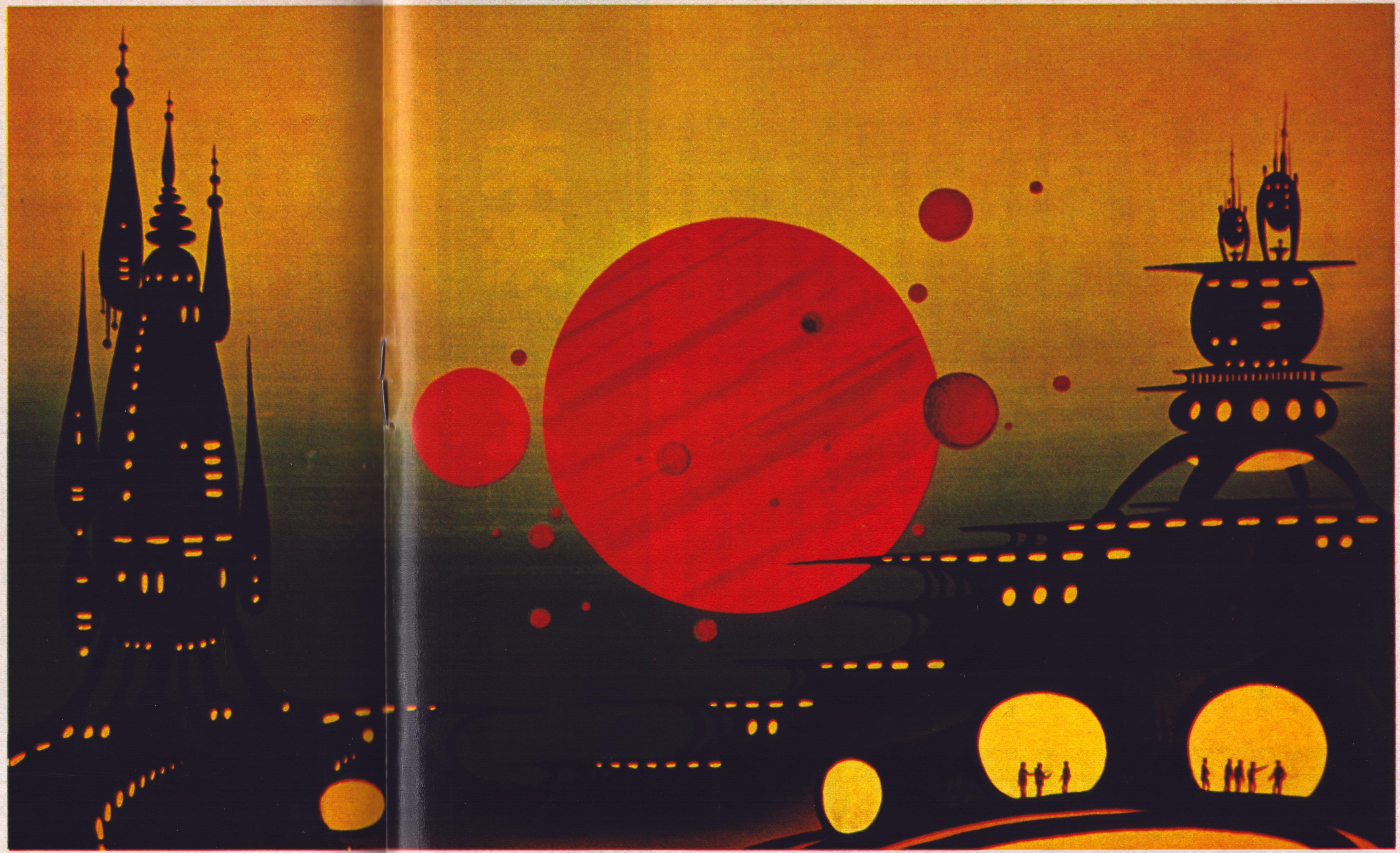
SF画のテーマは宇宙に限らない。SF画家たちは、時代の命じるとおり、わが地上の世界、わが現代人である人間そのものを、ますます凝視している。ところで現代人が未来に持ち込みたいと思っているのは何か？　それはまず自然であろう。げんに画家たちの絵には、実にさまざまな風景が描かれている。現代の人が夢みている何百年も先の世界は、煙のたちこめた超大都市でも、灰色の個性のない空間でもなく、地球上いたるところ常春（とこはる）という伝説が現実のものとなった世界である。だが人々を待ち受けるのは、いまなお永遠の眠りから覚めやらぬ広い荒野と氷の海岸である。

未来にたいする人間の責任は大きい。そして創造過程のあらゆる細部や人間と自然の結合のありとあらゆる現れのバリアントのモデルを何百回、何千回も作る必要があろう。こうしたモデル作りやSF画家の未来にかんする思索のためにこそ、カンバスと絵筆があるのであり、そしてSF画家は、現在から未来へ目に見えない糸を自分なりに通そうと努めているのである。

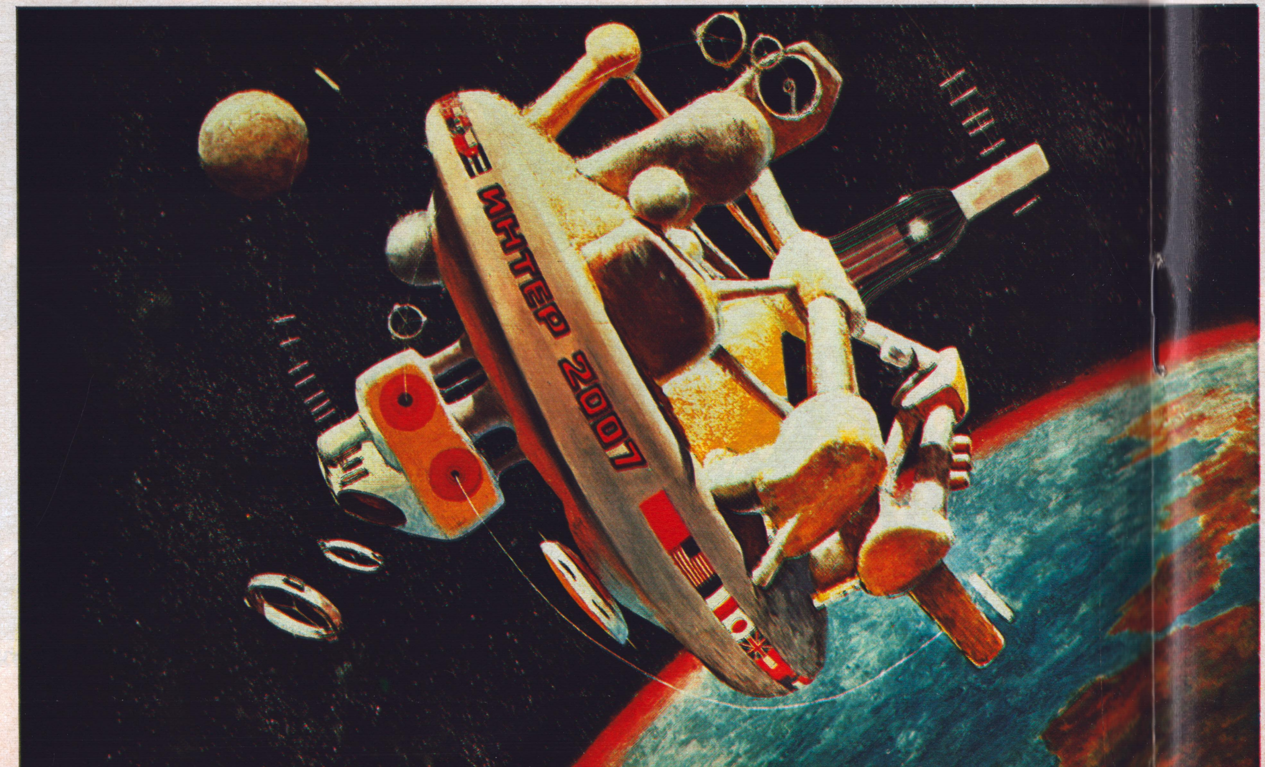
未来をえがくSF画家



『インターコスモス2007』　ジミトル・ヤンコフ（ブルガリア）



『赤い大惑星』　ニコライ・ネドバイロ（モスクワ）



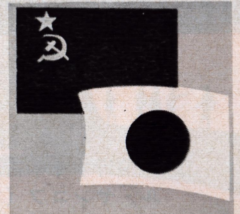
『飛行する宇宙船』　ジミトル・ヤンコフ（ブルガリア）



『二つの理知の出会い』　ジミトル・ヤンコフ（ブルガリア）

イルクーツク市の新潟県旅行団

ウラジーミル・スミルノフ



7月29日から8月6日まで新潟県の一七五人の旅行団がナホトカ、ハバロフスク経由でイルクーツク州を訪れた。この旅行団は、新潟の日ソ協会支部が、支部創立20周年を記念して〝第1回新潟市民の船〟として組織したもの。

旅行団の日程はかなりきつく、2日間でイルクーツク市とその周辺を見物し、バイカル湖や郊外の学生夏季キャンプにも立ち寄るという駆け足の旅だった。

イルクーツク市のニコライ・サラツキー市長との会見の席で、旅行団の本間高明総団長（新潟市助役）は、イルクーツク市の大がかりな住宅建設ぶりをほめて、「新潟市の年間住宅建設戸数は約二〇〇〇戸だから、人口五〇万のイルクーツク市の年間住宅建設戸数が六〇〇〇戸だときいて驚いています。家賃も労働者の平均賃金の3—4%だそうだから、日本の標準からすれば、まったく考えられない安さです」と述べた。

イルクーツク市長は、一行に水差しの水を飲んでみて下さいとすすめ、「これは、アンガラ川の水です。浄化などしなくとも飲料水として合格ですよ」と言い、きれいな水が飲める理由を語った。

「これは、イルクーツク水力発電所ダムの上流70㎞からバイカル湖までの地域に、工場を建てることを禁止したおかげです。アンガラ沿岸の戦前に建てられた老朽工場を市外に移転し、その工場廃水や生活廃水はすべて排水溝で市の処理施設に集めて浄化しています」

さらにニコライ・サラツキー市長は、新しい公園、庭園、郊外の緑地帯などの造成をはじめ、環境保護関係のいろいろな措置について説明した。

その後一行は、その現場の一つに立ち寄った。

アンガラ左岸の美しいバイカル道路ぞいの白カバ林の中にイルクーツク工業大学の学生スポーツ・キャンプがあり、このキャンプで五〇〇人程の学生たちが夏をたのしんでいる。大学の労働組合から提供される20日間のキャンプ利用券は、規定料金の7割引ないしは無料である。

学生たちはロシアの慣習に従って塩をのせたパンで旅行団一行を大歓迎。水上スキーの得意な連中も、湖上からソ日両国の国旗を振って歓迎した。

佐藤尚義さん（新潟県庁勤務）は、イルクーツクに戻って、その時の歓迎ぶりに言葉をはずませる。

「あの時のキャンプの夜は一生忘れられません。友好の会が始まったとたん、まわりのふん囲気がとてもうちとけた感じになって……バレーボールやピンポンをやったり、学生さんといっしょに『サクラ、サクラ』や『カチューシャ』を歌ったりして……

ソ連が初めてという私には、なんだか前からソ連を知っているような気持でした。言葉が違っていても、こんなに簡単に互いの意思が通じ合うなんておどろきでした」

一行はイルクーツク郊外の日本人墓地に参拝したが、建設労働者の中野貞吉さん（長岡市）は同じ中野という姓の人の墓のところにたたずんで、かつて捕虜生活中戦友たちと初めてイルクーツクに来た時のことを思い出していた。

「そのころ戦場から遠く離れたこの地にさえ、戦争の恐ろしい傷跡が残っていたが、こんど見たイルクーツクやシベリアの人々には昔の面影はなかった。30年間にイルクーツクはすばらしい都市になった。人々の顔を見れば、十分しあわせだということがわかる。イルクーツクの人の服装はセンスがあり、商店の品物もよい……」

イルクーツクを去るに当たって本間総団長は「旅行団のメンバーは農民から大学教授までさまざまだった。帰国してこんどの旅行のことを市民にくわしく話すつもりです。私はありのままのソ連の姿を知らせることがとても大事だと思っています」と語った。



古いロシアの慣習どおりパンと塩で歓迎された旅行団

大祖国戦争中のシベリア人の勲功を記念したメモリアルホールで献花





バイカル湖の水はおいしいわ



イルクーツク市の風物は絶好の被写体



国内問題

三つの面から見たソビエト生活様式

『今日のソ連邦』評論員　ミハイル・エフィーモフ



さる9月に、ソ連の世論の注目を集めた数多い人物や出来事のうち、くわしく取り上げたいものが三つあった。この三つはそれほど特筆すべきものでもないが、わがソ連の現実をかなりよく示しているといえる。きっと読者の皆さんも興味をもって下さるだろう。

国際主義の軌道で

9月3日、3度宇宙船の明かり窓から地球を見たソ連のV・ブイコフスキー大佐と、ドイツ人として初めて宇宙から帰った喜びをかみしめたドイツ民主共和国市民S・イェーン中佐の二人の国際宇宙クルーが、地上に帰還した。イェーンは、“ソ連製”のマークのついた強力なロケットで軌道に打ち上げられた社会主義共同体3番目の息子（もちろんソ連を除き、チェコスロバキア、ポーランドについで3番目）となった。

ソユーズ31号の国際クルーは、31号をサリュート6号＝ソユーズ29号軌道コンプレクスにドッキングさせた。コンプレクスに乗り組んでいたV・コワリョーノクとA・イワンチェンコフは、31号とのドッキング（8月28日19時38分＝モスクワ標準時）までにすでに2ヵ月半宇宙で働いてきた。4人の宇宙飛行士は計画どおりきちんと作業し、計画を完全に遂行した。

専門家たちはソ連、ドイツ民主共和国両国の学者が共同開発し、ドイツ民主共和国のカール・ツァイス・イエナ工場で製作されたカメラによる地球の撮影と肉眼観察にとくに注目している。

この国際宇宙クルーの成功を促進したのは、まず当然ながら、軌道コンプレクスを開発したソ連の技術の絶対的信頼度である。クルーの飛行時間の95%が観測調査と設備の予備修理に費され、操縦に費されたのがわずか5%という事実は興味深い。

国際クルーが宇宙でおこなった観測調査を十分に評価するとともに、別の面にも触れておこう。

宇宙観測探査の分野で社会主義9ヵ国（ブルガリア、ハンガリー、ドイツ民主共和国、キューバ、モンゴル、ポーランド、ルーマニア、ソ連とチェコスロバキア）が協力し合ってもう10年以上になるが、この期間に『インターコスモス』シリーズの衛星が17個、地球物理探査ロケット『ベルチカーリ』が6個打ち上げられ、数多くの総合実験がおこなわれた。ガガーリン記念宇宙飛行士訓練センターでは、ソ連の宇宙飛行士といっしょに兄弟諸国の宇宙飛行士が複雑な訓練課程をこなしている。付言しておくと、訓練課程は2年であり、現在や未来の宇宙の英雄たちが居住しているモスクワ近郊の“星のまち”には、いま外国の宇宙飛行士たちが家族ともども移り住んでいる。もう一つ付け加えておくと、ソ連は『インターコスモス』計画による共同実験のために、自国の宇宙技術を私利をぬきにして無償で提供している。

さてここで終わりたいところだが、西独の宇宙飛行士の打ち上げをめぐって、もう数年間米国と西独の間で商談が続けられている事実をあげておきたい。一方が米国の“丸木船”の技術面の欠点をあげると、相手方はガメつくソロバンをはじくといった具合いであり（米航空宇宙局は“お得意先”用の価格表さえつくった）、宇宙飛行に西独の宇宙飛行士が参加するチャンスはいまのところ少なく、早くてせいぜい一九八一年と見られている。

それと比較などするつもりはないが、一つだけ、ロシア人とドイツ人が最初の社会主義ドイツ国家の創建30周年記念日を前にして、兄弟のように仲むつまじく宇宙で働いたことをあげておきたい。このように国際主義の軌道の安定度は保障されているのである。

どこで魚をとるか？

この問題はけっして無駄なから騒ぎではなく、ソ連人がますます心を痛めている問題である。一九七六年のソ連の人口一人当たりの魚と水産物の消費量は18・5kgであったが、一九七七年の魚と水産物の住民向け販売量は前年の98%にすぎなかった。いまのところことしの販売量ははっきりしないが、全般的な漁況からみて、手放しの楽観はできない。しかもソ連人は日本人にいささか劣るとはいえ、魚が大好きである。

ソ連はずっと以前から世界の魚資源の枯渇に警鐘をうちならし、世界の海洋の魚資源を維持するために、いろいろとイニシアチブをとり、多くの努力を払ってきている。しかしいかんせん、われわれだけの力ではたいして役にたたず、若干の品種の食用魚はほとんど姿を消しつつある。

9月にソ連の中央紙は、ソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議の「ソ連の淡水水域における養魚をさらに発展させ、漁獲量を増やす措置」にかんする決定の詳細を発表した。こういう重大な決定が出たのは、国民の食生活の内容に対する国の配慮の現れであるだけでなく、ソ連政府が自然を守ろうとつとめているゆるがぬ熱意の現れでもある。

ソ連には大小の川、湖、池、貯水池がたくさんあり、つり人の足跡が及ばないようなところはない。モスクワ中央部の河岸通りのモスクワ川には、いつでも糸をたれている太公望の姿が見られる。『夕刊モスクワ』紙の報道によると、一九七〇年以来モスクワの川や池などに、ウナギに近いウーゴリ、スダーク（スズキに近い）、コイ、チョウザメなど20種の魚が放流され、一九七五年から一九七八年までの間だけで、カワカマス、スダーク、レシチ（コイの一種）などの稚魚や幼魚三〇〇〇万匹が放流された。

しかしそれでも魚は少ない。

新しい決定は養魚業を根本的に改善し、漁獲量をふやすことにしている。一九八五年までに淡水水域の漁獲量は一九七七年の二倍にふえる予定であり、総漁獲量は九二万四〇〇〇tになる。

そのために一五万ha分の池が新設、改修され、六〇万haの湖の養魚場が新設されよう。養魚・土地改良作業によって、バイカル、ハンカなどの一連の大きな湖の漁獲量もふえよう。また一九七九―八二年中に「ソ連の内水水域の魚資源の合理的利用の科学的基礎がまとめられ、西北部、シベリア、極東の大きな湖と貯水池の魚の生産性を引き上げる措置と養魚業を集約化する措置が立案される」

ロシアに「労せずして池から魚はとれない」という諺がある。この諺はひじょうに広い意味で使われている。ここで私がこの諺をあげたのは、国民に水産物を確保するために、国がぼう大な物材や財源を支出する予定であり、大きな労をとることを指摘したいからだ。また「池から魚をとる」ためには、まず魚が池にいるようにしなければならない。そして現在食べている若干のおいしい魚が数年後に大多数の食堂やレストランのメニューにのるようになることを期待したい。

責任者は罰せられた……

9月17日のプラウダ紙の「批判のあと」というらんに「味方のほうにオウン・ゴール」という記事がのった。厳密に言えば、8月25日にもプラウダ紙に同じ見出しの記事がのったが、こんどの記事はプラウダ紙から批判されて、どういう措置がとられたかを編集部が読者に報じたものである。

ソ連共産党中央委員会の機関紙が一三〇〇語近い記事をのせた出来事というのは何だろう。

18歳のピョートル・チョルバは職業技術学校を卒業し、就職先のソ連最大の製鉄所ザポロジスターリへ出発した。

しかし彼は仕事を始めることはできなかった。工場の先任職長から、君は数年間製鉄所のジュニア・サッカー・チームの選手をしてきたが、ここで必要なのは労働者で、スポーツ選手ではないから、働いてもらうのはごめんだといわれた。一ヵ月間チョルバ君はぶらぶら。父親にいわれてプラウダ紙になんとかしてほしいと投書した。8月25日のプラウダ紙にのったこの一件の記事は次の言葉で終わっていた。

「ことし二一五万人の新しい労働者が職業技術学校を巣立った。彼らはあたたかく迎えられており、経験豊富な指導員が彼らを教え、はぐくむだろう。

もちろん一人一人よりも、全体の面倒を見るほうがずっとらくである。実のところ、ここに問題のかなめがある。一人一人の新入工員を相手にし、各人の気持ちを知り、喜びやいまいましさをともにすることが大事なのであり、タイムリーに後押したり、直してやることが肝心だ。何分まだ18歳なのだから」

9月17日のプラウダ紙はふたたび若いチョルバの運命を取り上げ、さきの記事に対するザポロジスタリ製鉄所指導部の反響をのせた。批判の正しいことが認められ、チョルバは自分の専門どおりの仕事につき、仕事につけなくてぶらぶらしていた期間の賃金は当の責任者たちが彼に支払った。責任者たちは罰せられ、製鉄所の次長は重けん責、労働組合工場委員会議長はけん責、人事部長は解任などの処分をうけた。

※　※　※

こうして、9月中の国内生活から拾った三つの出来事を紹介したわけだが、一見三つの出来事の間には共通点がないようだが、それはあくまで一見にすぎない。よく注意して見れば、それぞれにソビエト生活様式の性格がそれなりに現れていることがわかろう。それらに共通している特徴とは、国際主義であり、国民の福祉に対する配慮と真の民主主義である。



社会党日ソ問題特別委員会代表団のモスクワ訪問

フェリクス・プラテ

8月29日から9月3日まで、ソ連共産党中央委員会の招きで日本社会党日ソ問題特別委員会代表団（団長・川村清一同特別委員会委員長・参院議員）がモスクワを訪問した。代表団に加わったのは伊藤茂衆院議員、栂野泰二衆院議員、対馬孝且参院議員、岡崎圭介日本社会党国民運動局副部長。

代表団はアレクセイ・シチコフ・ソ連最高会議連邦会議議長に迎えられ、ソ連共産党中央委員会国際部、ソ連外務省、ソ連外国貿易省、ソ連漁業省で会談を行った。

代表団は、現在の極東における国際情勢の性格について、ソ日関係の広範な諸問題についてソ連の責任ある代表者と意見を交換した。代表団は、日本社会党が一貫して対外政策で中立路線を進め、あらゆる軍事・政治同盟に日本が加わるのに反対し、ソ連との協力

一行は9月3日、レーニン廟に花輪を捧げた。

の一層の強化をはかり、日ソ両国国民間の平和と友好をめざしていることを強調した。

モスクワを立つ前に川村清一代表団長は本誌記者の質問に答えた。

——あなたがたの特別委員会の主要な目的は何ですか？

「私たちの特別委員会は日本社会党執行委員会の決定によって設置されましたが、その主要な目的は、日ソ両国間の友好関係を強化することです。私たちの前に提起された課題の重要性は非常に大きいのです。なぜならこの活動分野は日本社会党の対外政策全体における主要な分野の一つだからです。

全世界の平和、とくにアジアの平和を維持するためには、両国民間の友好と相互理解を強化しなければなりません。日ソ両国は隣国ですから、日本にとってもソ連との友好関係を発展させなければなりません」

——今回の訪問から得たあなたの印象は？

「日本社会党日ソ問題特別委員会委員長として私は貴国を初めて訪問しましたが、今回の訪問はこの委員会の代表団のすでに5回目のソ連訪問にあたります。

私たちの訪問の成果について言うならば、世界情勢はいまやきわめて複雑であり、現存する困難を成功裏に克服するには各国、各政党の代表者がもっと会う必要があることを指摘しなければなりません。関係改善の道をたえず探し求めることがきわめて大切です。これが、ソ連の代表者たちとのすべての会談の中心思想でした。会談中にすべての問題にわたって意見が一致したとは言えません。しかし私たちは主要なものをかちとった、すなわち私たちは意見が一致している分野をできるだけ拡大し、意見が一致しない分野を縮小するように努めたと、私には思われるのです」

——ソ日両国はどんな分野で具体的に協力できるとお考えですか？

「私たちが協力できるし、また協力しなければならない広範な分野があると私は考えます。何よりもまず、これは言うまでもなく文化、科学、スポーツです。この分野で日ソ関係を発展させることによって、私たちはソ日両国民間の接近と相互理解の強化を大いに促進することができるでしょう」

——あなたはどんな気分でソ連を立ちますか？

「私たちは課せられた使命を成功裏に遂行したと考えています。私たちが世界革命の指導者でありソビエト政権の最大の活動家である偉大なレーニンの廟に花輪を供える機会を持ったことに非常に感激し、誇りを持ちました。今回の訪問はきわめて短期間ではありましたが、それでも私たちはソビエト社会は順調に発展しているという印象を得ることができました」





モスクワのクズネツキー・モストにある全ソ・モードハウス

どのデザイナーにも、お気に入りのモデルがいる。

80年のモスクワ・モード

——V・ザイツェフに聞く

カメラ　B・カウフマン　V・チェルノフ

オリンピックが開催される一九八〇年までにはまだ1年以上もあるが、モスクワのファッション・デザイナーたちはすでに八〇年のソ連モードの方向を決定するモスクワ・コレクションを発表した。そこでソ連のトップ・デザイナーとして知られるビャチェスラフ・ザイツェフ・全ソ・モードハウス・デザイン副主任に最近のファッションの動向について話を聞いた。

モード雑誌からミニスカートの少女が姿を消し、新しいイメージ、衣服による新しい美的表現の探求が始まったこの10—12年の間、世界のファッションは困難な道を歩んできた。女性、それも以前のように30歳ではなく、若やいだ40歳が脚光を浴びるようになった。

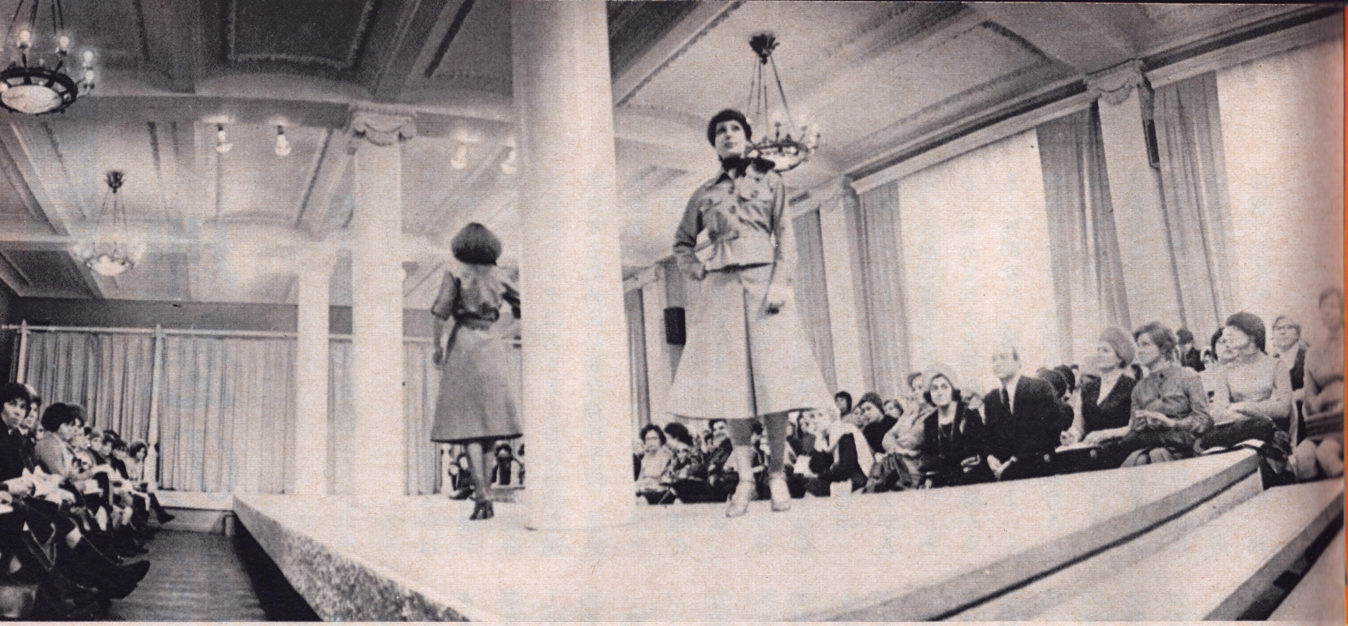
手初めに、ドライな幾何学ラインや明確な平面的シルエットに代わってロマンチシズム熱が登場し、婦人服の特徴を取り入れた洋服を着た女性みたいな男性すら出現したほどだ。一九七二—七五年には二〇—五〇年代のオールドファッションの再来期がやってきた。そして最新のパリ・コレクションは不調和、不均衡を賛美している。

以前ファッションはつねに選ばれた人たちのためのものであった。だが現在はいわゆる〝ハイ・ファッション〟と並んで、より進歩的で将来性のある〝街頭のマス・ファッション〟が成長している。この大衆のためのファッションはソ連をはじめ、世界各国で発展している。

ソ連のデザイナーは幅広い大衆のための民主的なモード作りをめざしている。われわれは、イブ・サンローラン、マルク・ボアン、ピエール・カルダン、ワレンチノといった世界のすぐれたデザイナーの仕事には敬意を表するし、その最高級の技術には感服するが、無秩序な世界ファッションの潮流に流されることなく、独自の道を切り開いている。

最近のソ連モードの主要テーマはフォークロアだ。新コレクションでもあらゆる方向で民族調が取り入れられている。無論、民族衣装をそのままコピーするわけではなく、民族衣装の裁ち方、配色、活動性などの諸要素を現代のコスチュームに生かすわけだ。

今度発表した全ソ・モード





英国スタイルのテーマを受け継ぎながら、ロマンチックな要素を盛りこんだクラシック・スタイルが、ソ連モードの方向の一つ。

ハウスのコレクションには三つの方向が打ち出されている。一つは、時の試練を経て生き残り、基本的に大衆性を備えたクラシック・スタイル。これは厳密な英国スタイルのテーマを受け継ぎながら、ロマンチックな要素を盛りこんでいる。こうした作品をデザインする際には直線的な形を避け、背広の線にも柔らかさを出し、スカート、ブラウス、ベスト、細部の飾り全部の線をよりソフトに仕上げている。

二番目はスポーティーな中にロマンチックな要素を秘めた装いで、大胆な配色、レイヤード・ルック、トータル・ルックが特徴だ。色々な付属品やアクセサリーが大きな意味をもつ。モスクワ五輪が近づくにつれてスポーティーなスタイル、ゆったりした形、着やすさが求められつつある。

最後は女らしいロマンチックな装い。柔らかなシルエット、凝った細部の仕上げが特徴になっている。この方向はおそらくパーティーなどの正装用だ。

将来のモードを具体的に予測することは不可能だ。しかし、ひとつ言えることは、将来も合理的で、着やすくて、見た目にも美しい、実用的で快適な装いが主流となるだろう。

☆ ☆ ☆

イブニングドレスと紳士用フォーマル・スーツ



◀全ソ・モードハウスには型紙やモード雑誌の売店、最新モードの展示場があるほか、1日3回、ファッション・ショーが開かれている。ショーでは広い範囲のモードが紹介されているが、関心の的は何といっても実用的なカジュアル・ウェアー。





ニュー・コレクションの一つ、タイトなクラシック・ドレス。

コットンやサテンを使った服からスカーフやショール、農村風のカラフルなスカート、ロシア・サラファン(吊りスカートの一種)まで、みな全ソ・モードハウスのコレクションに入っている。

理想の花嫁・花むこ像

哲学博士候補
ベニアミン・ザツェーピン

相手に求める条件

コンピュータでうまく花嫁あるいは花むこを選べるかどうかという論議が始まってから久しい。しかしこの場合、コンピュータはあくまで真に自由な選択をするために必要な補助手段、道具、情報源にすぎない。

社会学者がウクライナのロブノ市で一七五人の男女学生（17歳から26歳、その大多数が未婚）を対象にアンケート調査をした。質問表には次のような性質――「美しい、背が高い、聡明、判断力がある、誠実、正直、勇気がある、大胆、意志が強い、ユーモアがある、努めて他人を援助する、教養がある、他の女性（男性）の評判がよい、仕事が好き、自制力がある、酒好き、甘い物が好き、友人との夜のパーティーが好き、ダンス好き、読書好き、スポーツ好き、やきもちやき、けんかに強い、攻撃的、勘定高い、りんしょく、率直、信じやすい、快活、楽天的、精力的、活動的、勤勉、のろい、肉体的に強い、肉体的に健康……」があげてあり、このうち自分の将来の配偶者として、どんな性質の人が望ましいかを5点満点で示すよう求めていた。回答を集計したところ〝平均的な〟望ましい夫は、長所では〝平均的な〟現実の青年にまさるとはいうものの、ただ一つ〝他の女性の評判〟という点ではノーという意見が多かった。つまり女子学生たちは〝とげのないバラ〟を見つけたいし、未来の夫に重要なすべての長所をもっていてほしいとは思っているが、妻以外の女性を好きにはなってもらいたくないのだ！

男子の学生の回答は、女子学生のものとはいくらか違っており、理想の妻とは、彼の周囲にいる現実の女性よりも、長所が多いだけでなく、また男子の学生よりもかしこく、誠実で、もっと快活、勤勉であり、控え目でなければならないことを示している。

しかしこれはあくまでも〝平均的な〟回答であり、実際には各人が自分のパートナー、つまり理想の、あるいは望ましい配偶者像を自分自身の像に比較しているのである。

では、学生がえがいている自分自身の像とはどんなものだろうか？

年ごろの男女学生の約2/3が自分を3点と見ている。この場合、女性の方が控え目であり、まじめでもある。自分の外見を5点あるいは1点と評価した女性は1人もいなかった。そして質問に答えた女子学生で、美男または醜男（ぶおとこ）を夫に持ちたいと思うものはゼロだった。

知性が発達するにつれて、質問に答えた者の約半数（女性の42%、男性の43%）が自分を4点、5点と評価している。自分の知能について高すぎるほどの評価をしているものは別として、ほとんどすべての女性が、自分よりも聡明で判断力のある相手を希望している。男の学生で自分の知能を5点と見ている者は、自分とほぼ同等の知能の妻を持つことを望み、また4点以下と自分を評価している者は、女性の知能が自分より高いことを望んでいる。言いかえると男の方は、自分の足りない点を知的な妻をもらって埋め合わそうと努めているのである。

女子学生は、将来の夫が自分よりも大胆であることを望んでいる。これにたいして自分の大胆さを5あるいは4点と評価した男は、配偶者にそれほどの大胆さを求めてはいないが、平均またはそれ以下と評価した者はやはり、配偶者に大胆さを求めている。

夫婦げんかを避ける工夫

アンケート調査の結果わかったことは、青年男女が自分自身や望ましい配偶者の重要な個性の発達程度をかなりたやすく表現できることである。つまりコンピュータに使うテストの作成とその後の機械処理は完全に現実的で、有益である。

しかしもちろん、このようにして夫と妻を選ぶことが、あらゆる家庭のごたごたを避ける万能薬だと見ることはできない。人間は変わるもので、一時はその人にとって本質的なものと思われた特徴、欲求、特質、個性も他日になって本質的なものでないとわかることはあり得る。だから最良の縁であっても、晴れた大空のように明るく、幸せな生活を完全に保証するとは限らない。それは非常に重要ではあるが、やはりしあわせな生活の一つの条件にすぎない。

あとはもはや夫婦しだい、平和に和合してうまく暮らしてゆく夫婦の手腕しだいである。

20年間、日常生活のことでは1回も夫婦げんかをしなかったという家庭を私は知っている。これはけっして万事が具合よくいっているという家庭ではなく、言い争いは少なからず起こった。しかし炊事・洗濯・掃除の問題で衝突が起きたことは一度もない。第一に、夫は妻のやれることなら、ほとんど何でもやれる。第二に、妻が平凡な台所仕事にあき、夫もそれをやりたくない時は、夫が妻にこうきく。「うちには食べるもの何があるんだい？」――「パン、かんづめ、たまごとお茶よ」――「それで結構」。だれも腹を立てない。

その代わり、キノコがうまいぐあいに、どっさり採れた時は、塩の味つけをするのは夫の役目である。そんなとき妻は、責任の軽い仕事をする助手役にまわる。どんなに努力しても、きのこの味つけをこんなにりっぱにはやれないことを妻は知っているのである。事実、これよりもうまい塩味のキノコを、私はこれまで一度も口にしたことがなかった。

ところが、夫婦がかなり大きなコイを買った時には役割が変わる。夫にまかされるのは、うろこをとり、コイを適当な大きさに切ることだけ。魚に具を詰めるのは妻である。

女は女

偉大なロッシーニは音楽に劣らぬ情熱をさまざまな料理づくりに傾けたといわれる。

ある時、友人のひとりがロッシーニの『セビリアの理髪師』をほめ始めると、台所でペーストを作っていた彼が叫んだ――「ほら、そこにあるのが『セビリアの理髪師』だよ。そのペーストを食べてみな。そのうえで私がどんな作曲家だか言うんだな！」

残念ながらいまの若い男性は、実生活のなかで、責任のある家長の役割をはたす用意が十分ではない。たとえば社会学者のE・ワシリエワの調査によると、子供のない若い夫婦の家庭では、夫の28%が、自分が家長であるとは考えていない。

母権制のもとでの女性による男性への圧迫や族長制のもとでの男性による女性への圧迫に代わって、いまは同権の家庭で男女の平等が行われているのと私は思う。ただこの平等は一部のものが求めているような〝算数的〟イコール（あとでこの平等により彼らが真っ先に苦しむのだが）ではなく、人々の自然的相違が考慮されるような平等である。

しかしなにはともあれ、夫はやはり家長でなければなるまい。といってもこれは女性の権利をけっして縮小するものではない。家庭内でリーダーシップを握ろうという妻の一時的な感情の高まりをあまりあてにしてはならないし、何につけてもすぐ妻に家政の実権を渡すようなことがあってはならない。あえていうと、そのような実権は、妻にとってもいつまでも必要のないものである。女はしょせん女。彼女はやはり女にしておこう――彼女自身の幸せのためにも。

トピックス*

超低温電動機

ソ連ウクライナ共和国のハリコフ重電機工場付属研究所で一万KWの超低温電動機を開発中。特殊合金で作った巻線を液体ヘリウムで零下二六九度に冷却し、電気抵抗をゼロにして電力のロスを防ごうとするもので、新型電動機はグルジア共和国ルスタビ製鉄所の大型圧延機に取り付けられる。

開発チームを指導するウラジーミル・ダンコ博士の話――「われわれの知る限り、この型のモーターはこれまでどこでも作られていない。われわれはモスクワの科学者と協力して二〇〇KWの超低温モーターを製造し、テストして好成績をあげた。新型電動機の重量は、同容量の在来型に比べて30%がた軽い。全速力回転までもっていくのに要する時間あるいは停止して逆回転させるまでの時間も在来型の半分ですむが、これは圧延機の場合特に大切なことだ」



9月5日、京都市役所を表敬訪問し、船橋求己市長と握手するラブルーヒン・キエフ副市長（写真＝日ソ協会京都府連提供）

京都市で盛大に〃キエフの日〃

A・ゾーリン

ウクライナ共和国の首都キエフ市と京都の間で姉妹都市の協定が調印されてから、9月7日で満7年。この日を記念して京都では「キエフの日」（9月5日—8日）が催され、その期間中に、ニコライ・ラブルーヒン・キエフ副市長を団長とする公式代表団ならびにウクライナのアーチスト・グループなどが京都を訪れた。

キエフと京都との間では、代表団、写真展、児童絵画展、芸術家と専門家グループなどの交換が積極的に行われ、キエフにおける「京都の日」と京都における「キエフの日」は恒例の催しとなっている。

ソ連代表団は京都滞在の4日間に、20以上の行事に参加した。これらの行事には合計一万五〇〇〇人が参加したが、主な行事について触れると——

——9月5日。ソ連の客は京都市役所で心からの歓迎を受けた。船橋京都市長とニコライ・ラブルーヒンがあいさつの言葉をかわし、互いに贈り物を贈呈した。夕方には国際ホテルでレセプションが開かれ、これには市役所と市議会の幹部、学者、文化人、社会団体代表ら二〇〇人が出席。

——9月6日。キエフ代表団は京都の名所旧跡を見物、京都会館第二ホールのキエフ・京都友好の夕べの席上、市議会の代表に、両都市間の友好を象徴する大きな陶器の花瓶を贈呈。

——9月7日。大丸百貨店で「森と公園の都ウクライナ・キエフ」展の開幕式でN・ラブルーヒン、船橋京都市長、林田京都府知事、吉村京都・キエフ委員会委員長らがテープ・カット。キエフの生活を物語る写真、児童画、子供たち自作の玩具や工作品、民族衣装、楽器など四〇〇点の陳列品が興味を呼んだ。

満員の京都会館ホールでウクライナの芸術家のコンサート。ウクライナの歌手——V・ピボワロフ、2年前の『マダム・バタフライ』東京国際コンクールの優勝者G・ツィポラやバレエ『エスメラルダ』のパ・ド・ドゥーを踊ったV・コフトゥン、T・タヤキナはとても好評だったが、最大の成功を収めたのは、G・ベリョフカ記念国立功労アカデミー人民合唱団の『トロイスティエ・ムズイキ』アンサンブルのアーチスト・グループ。心を燃え立たせる民族的メロディー、歌、そして各自がいくつかの楽器で演奏する演奏者たちの妙技——これらが京都の聴衆の心を文字どおり魅了した……。

以上が、両姉妹都市の今回の友好祭の大体の輪郭だが、他にも京都芸大音楽部、同志社女子大学での会合、寺田バレエ・アート・スクールでの授業（この学校は6年前からキエフ・バレエ学校との接触を始めた）、キエフ市民寄贈のワシがいる動物園の参観、青少年科学センターの視察、日ソ協会京都府連の幹部、協会員との会談とパーティーなど盛りだくさんの行事があった。これらすべてのライトモチーフはただ一つ——「姉妹都市間の友好を強化、発展させよう！」であった。

ラブルーヒン団長は京都を去るにあたってインタビューでこう語った——

「京都で過ごした数日間、われわれは多くの新しい友人、多くの有益で興味のあることを知った。われわれ両都市間の友好をさらに発展させる近い将来の計画として、教育および市営公共事業の専門家代表団の交換について、市の幹部たちと有益な意見を交換した。われわれは姉妹都市の線での接触の強化をきわめて重視し、このような関係がソ日両国国民間の信頼感づくりやソ日間の善隣と協力の関係の強化にたいする重要な貢献となり、世界平和の強化に役立つものと確信している。〃キエフでまた会いましょう〃」

山形氏（左）と松本氏



長寿の国からきた鉱泉水〃ボルジョミ〃

V・タラネンコ

ソ連ではさまざまな商品名でミネラル・ウォーターが市販されている。「ナルザン」「ボルジョミ」「エッセントゥキ」「ポリュストロフスカヤ」「ラストチカ」などが有名だが、その中でも最高級といわれているグルジア産の「ボルジョミ」が日本に紹介されている。

「ボルジョミ」は、炭酸、重炭酸塩、ナトリウムなどを含むミネラル・ウォーター。胃腸病、肝臓病、泌尿器疾患、新陳代謝障害などの治療に高い効果があり、胸やけ、胃酸過多を抑える。

「ボルジョミ」はまた、慢性胃カタル、胃や十二指腸の潰瘍、慢性腸カタル、慢性肝臓炎、慢性胆のう炎、慢性胆のう管炎、胆管閉塞を伴わない胆石症、気管支炎（非結核性）、脂肪過多、軽度の尿崩症、尿酸素質、シュウ酸素質などにも効果があるといわれる。

「ボルジョミ」の飲み方は、1日二〇〇—三〇〇mlを3回に分けて飲む。胃酸過多には食事の1—1・5時間前に温めて飲む。胃酸欠乏を伴う胃病には食前の10—30分に15—18度Cで、胃酸正常の時には食前45分にやはり15—18度Cでそれぞれ飲む。「ボルジョミ」は、病人ばかりか、健康人の保健にも効用がある。

「ボルジョミ」の輸入元である山形商事の山形省三代表取締役と販売元の松本信平「セイツー」代表取締役の両氏に話を聞いた。

——輸入のきっかけは?

山形氏「たまたまある本を読み、ヒントを得ました。

水というものは、体内でいろんな働きをします。たとえば血液の浄化作用、内臓の老廃物の排泄作用、内臓機関の浄化です。それに人間の体液は常に弱アルカリの状態にしておくとよいわけですが、こうした作用は水そのものでなく、水中に含まれるミネラル類の働きですから、当然そういう物質を含んだ水を飲むことが必要です。

ソ連のミネラル・ウォーターは、主にヨーロッパに輸出されていますが、今度山形商事が長寿者が多いことで有名なグルジアの〃ボルジョミ〃を輸入し、ソ連のものが日本に出現したわけです」

——「ボルジョミ」の販売に取り組まれた理由は?

松本氏「いろいろな本を読むと、健康と水は切り離せないことが分かります。これは単なる商売ではなくて、われわれの健康を出発点として、体の弱い人、健康に注意されておられる方々を中心に1日1回は〃ボルジョミ〃を飲もう、ということで始めました。

〃ボルジョミ〃は、他の物と一緒に飲んでも大変良く合います」

——これまでに何本の「ボルジョミ」を輸入しましたか?

山形・松本氏「現在二万本を輸入し、年末までに四万本輸入する計画です。いまのところ注文販売が主ですが、近い将来、ロシア料理店にも納入する計画です」

——山形さんは、ソ連に長く滞在しておられたそうですが、「ボルジョミ」についてのご感想は?

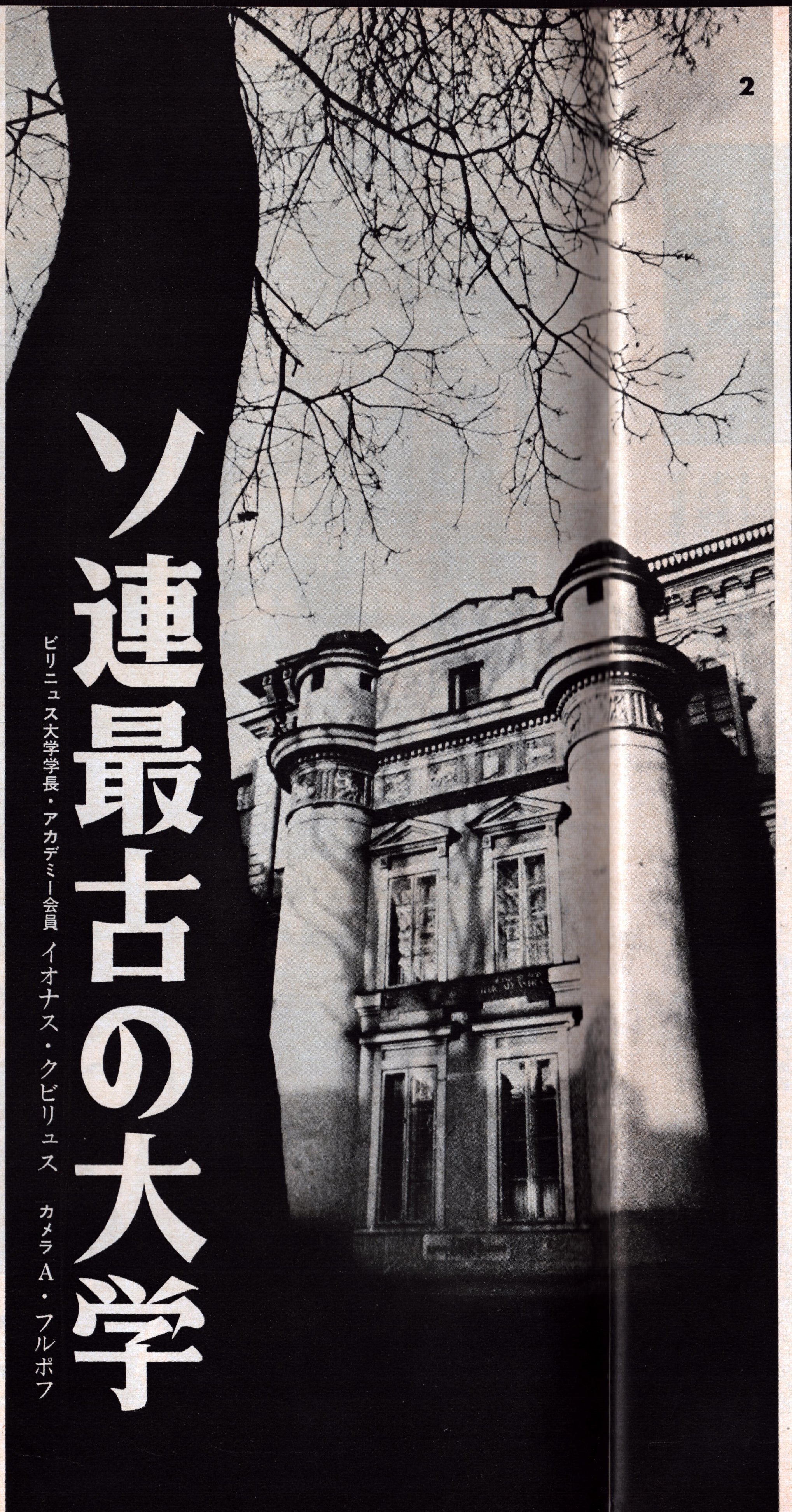
山形氏「ソ連滞在中、人々がミネラル・ウォーターをたくさん飲むことに気がつきました。初めて〃ボルジョミ〃を飲んだ時には、やや塩からくて、変な味がしましたが、1本2本と飲むうちに気に入りました。そこでこれを日本に輸入しようと考えついたわけです」

☆　☆　☆



ソ連最古の大学

ビリニュス大学学長・アカデミー会員 イオナス・クビリュス
カメラ A・フルポフ





1 3 講義の合い間に……

2 400年前に建てられた大学の図書館

ソ連最古の大学

四〇〇年の歴史を持つわれわれの大学は、リトワ共和国ばかりか、ソ連全体でも最古の大学（一五七九年創立）である。

17世紀すでにビリニュスにはヨーロッパの諸大学の学者や教師が、〝カリキュラム〟の審議のためにやってきた。ビリニュス大学は当時の著名な学者たちの名で輝いていた。教授で詩人のサルベビウスは、ローマで月桂冠の栄誉を受けた。彼のラテン語による『叙情詩』はヨーロッパで60回も版を重ね、そのうちのある版のさし絵は偉大なルーベンスが描いている。

一六五〇年、卒業生のシモナビチュスは『大砲術』という書を著し、ロケット技術の原理について書いたが、その中には多段式ロケットの原理も含まれている。この基礎的な学術書は仏、英、独の各国語に翻訳された。スミグレツキー教授の『論理学』は、ヨーロッパの諸大学で研究され、オクスフォードでは3回も出版された。ビリニュス大学の天文台は（今日も保存されている）、一七五三年に建造されたものだ。

ビリニュス大学は、ラトビア文化ばかりか、近隣民族（ロシア、ポーランド、ウクライナ、ベロルシア）の文化にも大きな影響を及ぼした。ポーランドの大詩人アダム・ミツケビチ、ウクライナの大詩人タラス・シェフチェンコら多数の著名な世界文化の貢献者たちがこの大学で学んだ。19世紀初めビリニュス大学は、強大な学術センターになったばかりでなく、進歩的な自由愛好思想の普及者ともなった。学生や



7



4



6



5

4 重合体化学の実験室で

5 イオナス・クビリュス学長（右）と語る著名な数学者イリダル・イブラギモフ

6 民俗芸能の好きな市民たちに人気の高い学生コンサート

7 美術好きの学生たちが大学ホールで開いた自作展覧会

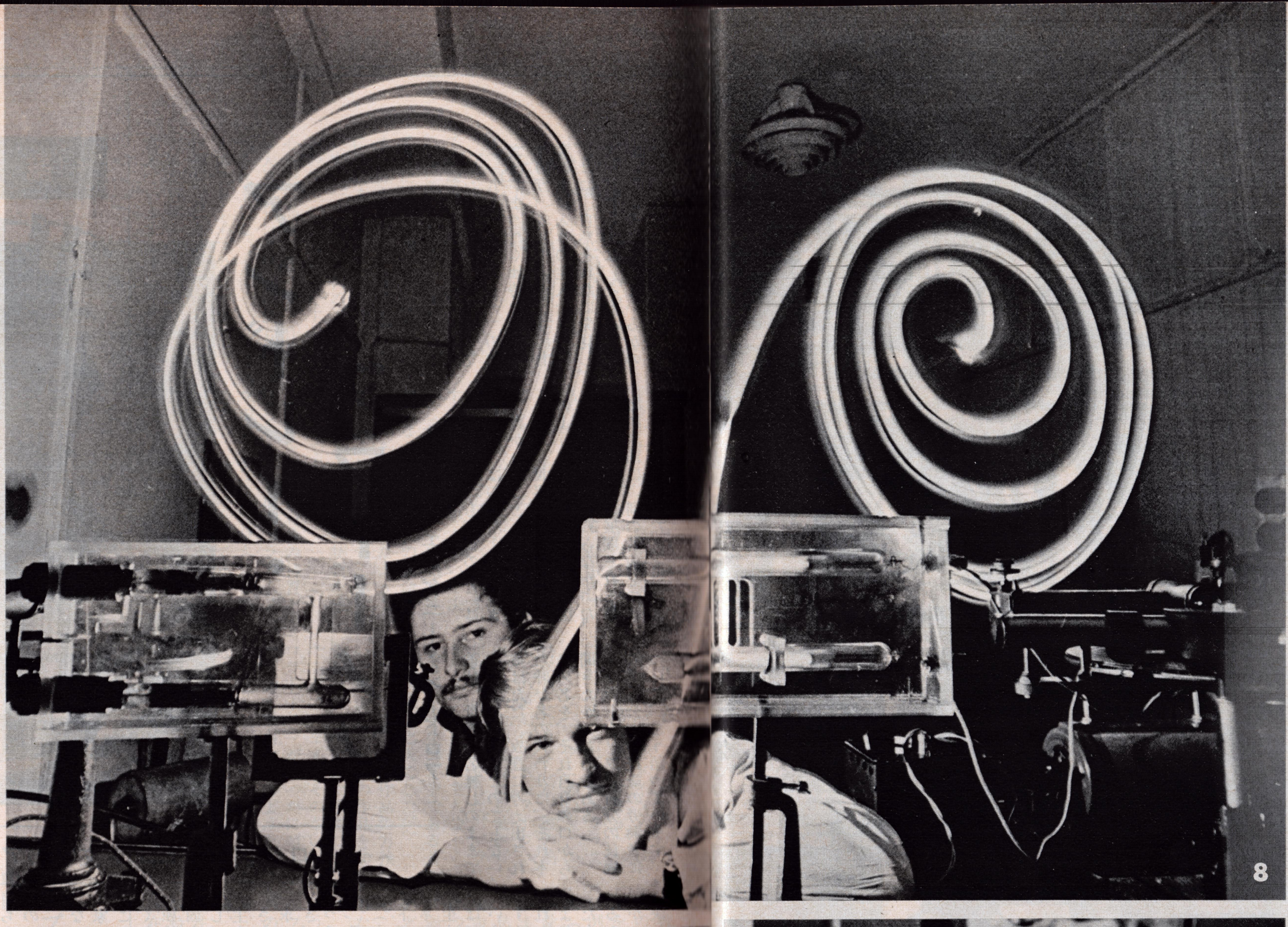
教授たちはツァーリズムに反対する一八三〇年の蜂起に積極的に参加した。ニコライⅠ世は勅令で大学を〝閉鎖〟してしまった。

なぜ〝閉鎖〟とカッコつきにしたかと言うと、大学は実質的には存在し続けたからである。もっとも、いくつかの小さな大学としてではあったが。一九一七年の10月社会主義大革命の直後「ビリニュスに労働大学を開設することに関する布告」が発令された。

ビリニュス大学の戦後の発展と学術的拡充は、私の記憶に新しい。私は一九四一年に力学・数学部に入学した。戦後になってから卒業し、研究活動に入り、学長に就任してからもう20年になる。

現在、一万六〇〇〇人の学生が在学している。将来の数学者、物理学者、化学者、医師、法律家、経済専門家、歴史学者たちである。リトワのどの研究所、学校、工場、官庁でもわれわれの大学の卒業生に出会わないことはない。最近の10年間に大学は三万人以上の人々を社会に送り出した。共和国の高等教育を受けた専門家の1/3は、ビリニュス大学の卒業生だ。卒業生の中には現在のリトワ共和国科学アカデミー総裁のマトゥリス、有名な作家のマルツィンキャビチュス、司法大臣のクリス、その他、リトワ共和国の著名な科学者や文化人が多数いる。

ビリニュス大学には国際的にも認められた一連の科学研究の独立した傾向や学派が形成されている。数学の確率論の学派や理論物理の学派がそれだ。半導体物理、心臓・血管外科学、植物生長促進、薬剤合成、弾道学等の分野のわれわれの研究は、世界的名声を得ている。









8　光学実験室の未来の物理学者たち
9　医学部の解剖学の授業
10　期末試験にみごとパス！
11　ビリニュス大学の学者たちの過去と現代の著作

ビリニュス大学の教授たちはフランス、イギリス、西独、米国、日本などの大学から招へいされている。また大学は国際大学連盟の一員として、外国の教育機関と広範なコンタクトを保っている。

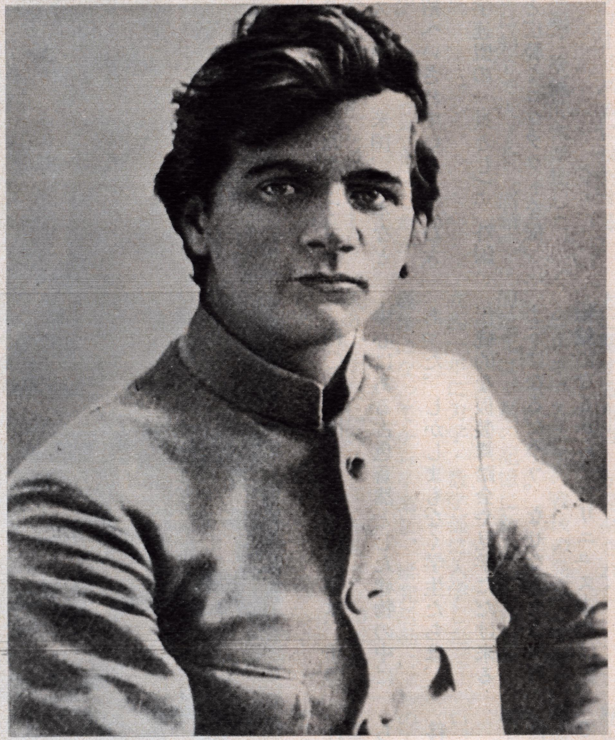
四〇〇年間われわれの教室は、市の中心にある古色蒼然とした建物の中にあった。しかしまもなく学生たちは、伝統的な仮装舞踏会や見学にだけ来るようになるだろう。なぜならここは博物館になるから。ビリニュス市のはずれの森の奥に新しいモダンな校舎が建ち始めている。すでに4学部がここに移転した。

私は、大学の古い建物の間にある中世風の快適な中庭を歩き回るのが好きである。壁に彫られたラテン語の銘「ここより道は星に通ず」を見る時、この言葉がわが大学の卒業生たちにとって、昔のように比ゆではなく、文字通りの意味を持っているなと思う。

☆　☆　☆

アンドレイ・プラトーノフ

文芸批評家　エブゲニー・シードロフ



アンドレイ・プラトーノフ（一八九九―一九五一）の散文は、まったく独特なオリジナリティを感じさせます。作家が気に入りの主人公といっしょに、自然を新たに発見し、すべてのものに、それまでなかった名前をつけているかのようです。「いくら読んでも、いくら考えても、彼の心には何か空っぽの場所――いままで書かれたことも語られたこともない世界が、騒がしい風のように通り抜けて行く空虚な場所――しか残らなかった。彼は自分の前に展開される無名の生活に、別の名前をつけたりはしなかった。とはいえ彼は、世界が名無しのままでいいと思っていたのでもない。彼はただ、故意に考え出された呼び名の代わりに、それ本来の名を、それ自身の口から聞きたかったのである」

プラトーノフは自分の長編の主人公――17歳の労働者について、こう語っています。

ロシア・ソビエト文学のアンソロジー

この文章は、作者自身についてもあてはまるでしょう。プラトーノフの世代が出会った世界は、激変の中にありました。革命によって転覆された現実は、生まれ変わり、各人は認識への全行程――自分自身への、したがって人々への道を新たに歩いて、生活の中に存在の確たる思想的、精神的基盤を見つけ出し、打ち立てなければならなかったのです。

プラトーノフは驚きを失わない幼児のような心と、思想家の頭脳とを持っていました。これが彼の創作の特徴――いくらかロマンチックな形象、独特な語彙（い）、彼だけに固有な語句の音楽――を決定しています。プラトーノフの主人公たちの、見た目の素朴さと単純さの陰には、真理を求める魂と思考の緊張した働き、新世界発見の喜びが脈打っています。

アンドレイ・プラトーノフ（本名アンドレイ・クリメントフ）は、中部ロシアのボロネジで、鉄道鍛冶工の家庭に生まれました。プラトーノフは10月革命ののちに回想しています――「私はボロネジのすぐ隣のヤムスカヤ村で生まれた。ヤムスカヤは並みの村よりちょっと大きい程度だった……その後、私には勉強するときが来た。村には女教師がいた。彼女のことを、私は決して忘れないだろう。なぜなら、この人から私は、あらゆる生き物、草や獣と血のつながった人間の話があることを知ったからだ。コボウ、野の歌、電気、機関車、大地をゆるがす汽笛のあいだには、結びつきが、血のつながりがあるのだ……石のような人間、ようやく芽ぶいた世界が、奇跡や自由に変わるのだ」

国内戦時代、18歳のプラトーノフは父親が運転する装甲列車の機関士助手でした。そのあと赤軍で戦いました。ボロネジの新聞には、彼の詩や論文が載りました。そして一九二二年、プラトーノフの最初の単行本――詩集と社会評論集が出版されます。

しかしプラトーノフは、散文で本領を発揮するようになります。一九二七年には、短編集が出版されました。このころ、電気技師の資格を持ったプラトーノフは、技師としての職につくことをやめ、文学に身を献げる決心をします。

次から次へと短編や中編が発表されました。労働は生活の最高の現れであると考えていたプラトーノフは、働く人々を好んで主人公に取り上げました。人間ばかりでなく、人間を取りまくすべてのもの――大地、星、風、花もまたプラトーノフの作品の中では生きて、働いており、仕事の中に自分の存在の意義を見ています。

プラトーノフは、姿を消しつつある古きロシアの田舎を描き、生まれつつある労農ロシアを鮮やかに描き出し、レーニンが一度ならず革命の事業にとってのその危険性を語った官僚主義を、風刺的に笑いとばしました。

プラトーノフの作品については論争も多く、批評家たちにもしばしば理解されませんでした。この作家の手法があまりにも特異で、既成の図式には収まりきらなかったからです。一九五〇年代の半ばに、この作家の作品にたいする関心が急に高まりました。作品は大量に発行され、手稿も公刊されました。

プラトーノフの鮮やかな諸短編が、私と同世代の読者にどんな感銘を与えたか、よく覚えています。その作品がかもし出す道徳的な力、困難でドラマチックな葛藤を克服する人間の創造的な才能にたいする信頼がどのようなものであったか、覚えています。小説『すばらしくも激しい世界で』の中で、ぬれ衣を着せられた主人公の擁護に立ち上がった語り手はこう語っています――「私は譲歩すまいと決心した。なぜなら、自然の外面的な力やわれわれの運命の中にはありえなかったような何かを感じたからです。私は人間としての自分の特質を感じたのです」

人間としての自分の特質を感じる――これはプラトーノフの主人公によく見られる特徴です。彼らにとって社会主義は、個々人の自由な発達を通じてのみんなの幸福を目標に掲げる、実際的なヒューマニズムです。

一九四一年にドイツ・ファシズムとの戦争が始まると、プラトーノフは新聞「クラスナヤ・ズベズダ」（赤い星）の特派員になりました。彼の前線での短編やルポルタージュはソ連の新聞雑誌に掲載され、単行本にもなりました。プラトーノフは自分の主人公――戦争の主要な働き手である普通の兵隊に忠実でした。

プラトーノフの作品の力強い心理主義が、彼の作品を20世紀散文のすぐれた手本にまで高めています。そのさい、プラトーノフがめったに暗示や会話、独白などのような、よく使われる手法にたよらず、直接の描写を通じて主人公の心理を伝えようとした、ということを強調するのは重要です。このような方法は、特別の技量、正確に選ばれた、無駄のない、含蓄ある作者の言葉を必要とします。

例としてプラトノーフの短編『3番目の息子』から、母性愛の感動的な形象を引いてみましょう。

「息子たちに豊かな、健康な生命を与えた老婆は、自分にはつつましやかな、小さな、貧弱な肉体しか残さず、たとえどんなに哀れな姿であっても、子どもたちを愛し、子どもたちを誇るために、死ぬまで、長いことそれを大切にしようとしてきた」

プラトーノフは、子どもたちの性格を見事に描いています。彼は幼児たちの考えや感情、彼が作家としての全霊を傾注した小さな主人公たちの気持ちの移り変わりを、自由自在に伝えることができました。たとえば、本号に紹介する悲しい物語『雌牛』のワーシャ・ルブツォフがそうです。この短編は、ソ連にとって困難だった年――戦時中の一九四三年に書かれました。

プラトーノフは興味深い文芸批評家でもありました。そして何よりもまず、一番好きだった詩人プーシキンについて、多く書いています。

アンドレイ・プラトーノフのすぐれた作品は、生活の幽玄な意味を探求する精神に貫かれています。彼の散文は、ソビエト文学に深い痕跡を残しています。なぜなら、思考し苦悩する自然の一部分としての人間、善と正と美にもとづいて打ち立てられる新しい社会関係の創造者としての人間を、彼の散文は見つめてきたからです。

〔短編〕

雌牛

アンドレイ・プラトーノフ

山田　はじめ　訳

チェルカス種の灰色の雌牛が、納屋に一頭だけで住んでいた。この納屋は外から色を塗った板でできており、線路番人の狭い屋敷庭にあった。納屋の中には、薪や干草、キビわら、用済みになった家財道具――ふたのない箱、焼け切れたサモワールの筒、ぼろ、足のとれた椅子などの隣に、雌牛が寝るための場所と長い冬をすごすための場所があった。

昼間と夕方、主人の息子のワーシャ・ルプツォフ少年が雌牛のところにやって来ては、頭の周囲の毛を撫でるのだった。今日もまた少年がやって来た。

「雌牛や、雌牛」と少年は言う。雌牛には名前がなかったので、少年は読本に書いてある通りに呼んだのだ。「おまえは雌牛だものね！　淋しがらなくていいんだよ。おまえの子どもは元気になっているよ。今日、ぼくの父さんが連れて来るからね」

雌牛には雄の子牛がいた。子牛はきのう何かをのどにつかえて、口からよだれと胆汁を流すようになった。父親は子牛が死んでしまうのではないかと心配して、獣医に見せるために今日、駅へ連れて行ったのだ。

雌牛は少年を横目に見ながら、黙って、とっくのむかしにひからびて、しわくちゃになった草の茎を噛んでいた。少年

は雌牛が好きだった。少年には雌牛のすべて――善良そうな温和な目、つの、ひたい、大きな、やせたからだ――が気に入っていた。目は黒っぽくくまどられていたので、雌牛はいつも疲れているか物思いに沈んでいるかのようだった。からだがやせているのは、力を自分の血や肉のために蓄えたのではなく、乳を出すためと仕事のために使ってしまったからだった。少年はさらに、自分のために乳を出してくれた、しぼんだ小さな乳首のある、やさしい、気持ちのいい乳房を撫で、丈夫な、短いのどの垂れ皮と、まえに突き出た力強い骨にさわった。

しばらく少年を見てから、雌牛は首を曲げ、急ぐふうもなく、桶から草をくわえ上げた。雌牛には、長いこと脇を眺めていたり、休息したりしている暇はなかった。いつも、休むことなく口を動かしていなければならなかった。雌牛のからだの中では、乳が休むことなく生まれているからだった。しかし餌は粗末で、同じものばかりだったので、雌牛はそれで胃を満たすために、長いこと苦労しなければならなかった。

ワーシャは納屋から出た。外は秋だった。線路番人の家のまわりは、一面の平らな、荒涼とした野原だった。野原は夏の繁茂とにぎやかさを失い、いまでは、草は刈られ、静まりかえって、わびしかった。

ようやく、夕暮れが始まった。灰色の冷たいとばりに覆われた空は、すでに闇の気配を漂わせていた。刈り倒された穀草の穂と冬にそなえて活動をやめた裸の低木を一日中ゆすぶっていた風は、いまでは地面の静かな、低い場所にもぐり込んで、暖炉の煙突の回転筒をかすかにきしらせ、秋の歌を始めていた。

単線の鉄道線路は、家の近くの、庭園に沿って走っていた。庭園ではこの時季には、すでに草も花も、すべてがしおれて、うなだれていた。ワーシャは庭園の柵の中に入り込まないよう用心していた。庭園がいまでは、自分が春に植えて芽を出させた植物たちの墓場のように思われたからだ。

母親は家の電灯をつけ、信号用のカンテラを外のベンチの上に置いた。

「もうじき四〇六列車が来るわ」と母親は息子に言った。「おまえが見送りなさい。お父さんは、なぜか見えないね。遊び歩いているわけでもあるまいに！」

父親は朝から、7km離れた駅へ子牛を連れて出かけた。きっと子牛を獣医にあずけて、自分は駅員の集会に参加しているか、軽食堂で一杯やっているか、ちょっとした技術的なことで相談にでも出かけているのだろう。あるいは、獣医診療所が込んでいて、番を待っているのかもしれない。ワーシャはカンテラを持って、踏切わきの横木に座った。列車の音はまだ聞こえなかった。少年は悲しくなった。こんなところに座って、列車の通過を見送っている暇などなかったからだ。あしたの予習をして、眠って、朝早く起きなければならないのだ。

少年は家から5km離れた学校に通っていた。4年生だった。

ワーシャは学校へ行くのが好きだった。先生の話を聴いたり、本を読んだりしながら、まだ知らない世界、自分からはずっと遠いと思われる世界を頭の中に描くことができたからだ。ナイル、エジプト、スペイン、極東、ミシシッピやエニセイ、静かなドンやアマゾンなどの大河、アラル海、モスクワ、アララト山、北氷洋のウエジェーニエ島――これらすべてがワーシャを興奮させた。ワーシャには、すべての国々、すべての人々が、自分が成長してやって来るのを待っているように思われた。しかしまだ、どこへも行くことはできないのだ。いま住んでいるここで生まれ、行ったことがあるのは、学校のあるコルホーズと駅だけだ。だから彼は、不安と喜びを抱いて、列車の窓から見える人々の顔をのぞき込むのだった。どんな人たちで、何を考えているのかしら。だが、列車はまたたくまに行ってしまい、人々は踏切にいる少年になど気づかずに、通り過ぎてしまう。それだけではない。列車はめったに来ないのだ。日に2往復、しかもそのうちの3本は夜中に通過する。

あるとき、列車がゆっくり走ってくれたおかげで、ワーシャは若い考え深げな男の人の顔を、はっきり見ることができた。その人は開け放された窓からステップを眺め、地平線の未知の場所を見ながら、パイプをくゆらせていた。緑の小旗を持ち上げて踏切のところに立っている少年を見ると、その人はほほえんで、はっきり言った――「さようなら、坊や！」そしてさらに手まで振ってくれた。〈さようなら〉とワーシャは心の中で答えた。〈大きくなったら、会いましょう！　生きてぼくを待っててね、死なないで！〉

それから長いこと少年は、汽車に乗ってどこへともなく走り去ったこの考え深げな人を思い出していた。あの人はきっとパラシュート兵か俳優か勲章をもらった人、あるいはとっても立派な人にちがいない、とワーシャはその人のことを考えた。だがそのうちに、あるとき少年の家のそばを通り過ぎて行ったこの人についての記憶は、少年の心の中で忘れ去られた。少年はさらに生活し、別のことを考えたり感じたりしなければならなかったからだ。

遠くで、秋の野の人気のない夜の中で、機関車が汽笛を鳴らした。ワーシャはさらに線路の方に進み出て、進行信号の灯火を頭上高くかかげた。彼はなおもしばらくのあいだ、走って来る列車の、しだいに大きくなる響きを聞いていた。それから、家の方をふり返った。屋敷の中では、雌牛が訴えるように鳴き出した。雌牛はずっと、子牛を待っているのだ。だが、子牛は帰って来ない。

〈お父さんたら、こんなに長いこと、どこをぶらついているんだろう？〉とワーシャは、むくれながら考えた。〈雌牛が泣いているというのに！　夜で、暗い。それなのに、お父さんはまだ帰らない〉

機関車が踏切にさしかかり、重そうに車輪を回転させ、闇の中へ火力のかぎり息をはきながら、手にカンテラを持った孤独な人間のかたわらを通り過ぎて行った。機関士は少年の方を見ることもなく、窓から大きく身を乗り出して、機械を見守っていた。蒸気がピストンのパッキングから漏れて、往復運動のたびに、外へほとばしり出ていたからだ。ワーシャもまた、それに気がついた。まもなく長い登りが始まり、シリンダーにすき間のある機関車は、列車を引っ張るのに苦労するだろう。少年は蒸気機関がどのようにして動くかを知っていた。物理の教科書で読んだのだ。たとえ教科書に載っていなかったとしても、それがどういうものか彼は知っただろう。何かを見ても、それがなぜ生きていて動くのかが分からないと、少年は悩むのだった。そんなわけだったから、少年は機関士が自分のカンテラに見向きもしないで通過して行ったのに腹を立てなかった。機関士は機械のことが心配だったのだ。機関車は夜中に、長い坂の途中で立往生してしまうかもしれない。そうなったら、列車を進めるのはむずかしくなる。とまれば車両がいくらか後退して、列車は伸び切る。無理に引っぱれば連結がはずれてしまうし、そっと引っぱったのでは動かないからだ。

ワーシャのかたわらを、重い4軸の車両が走って行く。そのバネは縮んでいる。少年には、車両に重い大切な荷が積まれているのだということが分かった。つづいて無蓋車が通り過ぎた。それらには、自動車、シートに覆われた機械、石炭、山のように積まれたキャベツが載っており、キャベツのあとに新品のレールがつづき、そのあと再び、有蓋車が始まった。有蓋車には家畜が載っていた。ワーシャはカンテラで車輪や軸受け座を照らし、異常がないかを見た。すべては順調だった。家畜を載せた車両から、子牛の鳴き声が聞こえた。すると納屋からは、自分の子どもを待ちわびている雌牛の、引っぱるような、泣くような声が、それに答えた。

最後の車両が、ゆっくりワーシャのわきを通り過ぎて行った。先頭の蒸気機関車が、けんめいにあえいでいるのが聞こえた。だが、機関車の車輪はからまわりして、列車は思うように進まない。ワーシャはカンテラを持って、機関車の方へ歩き出した。機関車がひどく苦しんでおり、彼はそのそばにいたかった。苦労を分かち合えるかもしれないと思ったからだ。

蒸気機関車は必死であえぎ、煙突からは石炭のかけらが吹き出し、カマの中のうなり声が聞こえた。機関車の車輪はゆっくり空転し、機関士が運転席の窓からそれを見守っていた。機関士助手が機関車のまえを歩いて、車輪がからまわりしないように、スコップで道床の砂をすくっては、それをレールの上に撒いていた。機関車の前照灯の光が、黒っぽい、重油まみれの、疲れた人間を照らしていた。ワーシャはカンテラを地面に置いて、スコップを持って道床で立ち働いている機関士助手の方に進み出た。

「ぼくがやります」とワーシャは言った。「あなたは機関車に乗って、手伝って下さい。ほら、もう少しで止まりそうです」

「できるかい？」と機関士助手は、彫りの深い、まっ黒い顔を向け、大きな明るい目で少年を見ながらきいた。「じゃ、やってごらん！　ただ、気をつけろよ、機関車をよく見ているんだ！」

スコップは、ワーシャには大きすぎて、重かった。彼はそれを助手に返した。

「手でやるよ、その方が楽だから」

ワーシャは身をかがめ、砂を手ですくって、それをすばやくレールの上に細長く撒いた。

「両方のレールにやってくれ」と助手は言って、機関車の方へ駆け出した。

ワーシャは両方のレールに、交互に砂をかけた。機関車は鋼鉄の車輪で砂を踏みしめながら、重そうに、ゆっくりと少年のあとから進んできた。石炭がらと冷えた蒸気の水滴がワーシャに降りかかったが、彼は仕事が面白くて、自分は機関車にとっていっそう大切なんだ、と感じていた。なぜなら、機関車は彼について進んでおり、彼のおかげでからまわりもしなければ、止まりもしなかったからだ。

ワーシャが仕事に気を取られていて、機関車が彼のすぐそばまで近づくと、機関士は短い汽笛を鳴らして、運転席から叫んだ。

「おい、よく見てるんだ！　もっと厚く、平らに撒いてくれ！」

ワーシャは機関車に気をつけながら、黙って働いた。だがそのうちに、どなられたり、指図されたりするのに腹が立ち、線路から跳び退いて、機関士に叫び返した。

「どうして砂を積まずに出発したの？　知らないわけじゃないでしょう！」

「全部使ってしまったんだ。砂箱が小さすぎるんだよ」と機関士が答えた。

「補助のを付ければいい」ワーシャは機関車と並んで歩きながら言った。「いらなくなった鉄を曲げれば作れるよ。ブリキ屋に注文すれば」

機関士は少年を見た。しかし、闇の中でよく見えなかった。ワーシャはきちんとした身なりをして、靴をはいていた。顔はあまり大きくなく、目を機関車からはなさない。機関士にも、家に同じくらいの少年がいた。

「それに、蒸気も漏れている。シリンダーやカマのわきなど、漏れちゃいけないところから」とワーシャが言う。「力が無駄にすきまから出てしまうだけだよ」

「おや、おや！　きみが運転して、列車を引いてくれ、私は降りて、並んで歩くよ」と機関士が言った。

「やらせて！」ワーシャは喜んだ。

機関車はとつぜん、自由になった囚人が駆け出すように、一カ所で全速力で車輪をまわし始めた。下のレールが遠くまで響き出した。

ワーシャはふたたび駆け出して、機関車の前輪の下のレールに、砂を散き始めた。「自分の息子がいなけりゃ、こいつを養子にしただろう」と機関士は、空転する機関車を静めながらつぶやいた。「小さいのに、もう一人前だ。

おまけに、すべてはこれからなんだからな……何てこった、どこかうしろの方で、まだブレーキがかかってるんじゃないだろうな。車掌のやつ、保養所にでもいるように、居眠りしているんだろう。下りになったら、揺さぶり起こしてやる」機関士はまだブレーキがかかっていたらはずさせようと、2度、長い汽笛を鳴らした。

　ワーシャはふり返って、線路からはなれた。

「どうした？」と機関士が声をかけた。

「何でもないよ。ここからはもう、坂もそんなに急じゃないから、ぼくがいなくても動くでしょう。そのあとは下りだし……」

「そうかもしれん」と機関士が上から言った。「さあ、取っておきな！」こう言って彼は少年に、大きなリンゴを二つ投げた。

　ワーシャは贈り物を地面から拾い上げた。

「食べるのはちょっと待った！」と機関士が言った。「うしろへ行って、車両の下をのぞいて、どこかブレーキがかかっていないか、音を聞いてくれ。かかってたら小高いところへ登って、きみのカンテラで合図するんだ、やり方は知ってるね？」

「ぼくはどんな合図も知っているよ」ワーシャはそう答えて、機関車のタラップに跳び乗った。それから身をかがめて、機関車の下をのぞいた。

「かかってる！」と彼は叫んだ。

「どこだ？」と機関士がきく。



「足もとです。炭水車の車台です！　ここの車輪はゆっくりまわっているのに、ほかの車台の車輪はもっと速くまわっています」

　機関士は、自分自身と、助手と、およそありとあらゆるものを罵った。ワーシャはタラップから跳び降りて、家に向かって歩き出した。

　遠くの地面で、彼のカンテラが光っていた。万一、ワーシャは車両の足まわりがうまく動いているか耳を傾けた。だが、ブレーキ・シューがこすれたり、きしったりするような音は、どこにも聞かれなかった。

　列車は通り過ぎた。少年はカンテラのある場所の方をふり返った。カンテラの光がとつぜん宙に浮いた。だれかがカンテラを持ち上げたのだ。ワーシャは駆け寄って、そこに父親を見た。

「ぼくんちの子牛はどこ？」少年は父親にたずねた。「死んじゃったの？」

「いや、治ったよ。私はあれを屠殺用に売ったんだ。いい値がついたよ。雄牛など何の役に立つ！」

「まだ小さかったのに」とワーシャが言った。

「小さい方が値がいいんだ、肉が柔らかいからさ」と父親が説明した。

　ワーシャはカンテラのガラスを切り替えて、白色光を緑にすると、その光を去って行く列車の方に向けて、何回かゆっくり、頭の上に持ち上げたり下ろしたりした。進行してよし、車輪は正常に動いている。ブレーキはどこにもかかっていない、という合図だった。

　静かになった。線路番人の屋敷の中で、雌牛が短く、悲しそうに鳴いた。眠らずに子牛を待っているのだ。

「一人で家に帰れ。私は受持ち区間を見まわってくる」と父親がワーシャに言った。

「道具は？」とワーシャが注意した。

「私はただ、犬釘の浮いたとこを見てくるだけだ。作業はやらん。私の心は、子牛のために疼いている。手塩にかけて、すっかりなじんでいたからなあ……売らなかったら、情が移って手放せなくなってしまうということを、分かってくれ……」

　こう言うと父親はカンテラを持って、首を左右にまわして線路を調べながら、線路に沿って歩き出した。

　ワーシャが庭に通じる木戸を開けると、雌牛は人間の気配を聞きつけて、ふたたび悲しそうに鳴き出した。

　ワーシャは納屋に入って、闇に目を慣らしながら、牛を見つめた。雌牛は何も食べていなかった。黙ったまま、ときおり息をしていた。大きくこそなれ、決して尽きることのない、こらえがたい悲しみが雌牛を苦しめていた。雌牛は人間がそうするように、その悲しみを言葉によっても、意識によっても、友人によっても、気晴らしによっても、慰めることができなかったからだ。ワーシャは長いこと雌牛を撫で、いたわった。だが雌牛はじっと動かず、無関心のままだった。雌牛にいま必要なのは、ただ子牛だけだった。人間であれ、草であれ、太陽であれ、何ものもそれに代わることはできなかった。

　雌牛には、一つの幸福を忘れ、別の幸福を見出して、それ以上苦しむことなく、ふたたび生きることができるなどとは、理解できなかった。雌牛の蒙昧な知力では、自分をあざむく役に立たなかった。ひとたび心や感情に飛び込んできたものは、圧殺されたり、忘れられたりすることがなかったからだ。

　雌牛は悲しそうに鳴いた。なぜなら、子牛を残しておくことができるためなら、生命に、本能に、まだ成長していない子牛が必要だという自分の感情にまったく従順だったからだ。いま、雌牛の心の中は熱く、痛かった。雌牛は大きな、うるんだ目で闇を見つめていたが、その目で、自分自身と自分の悲しみとを静めるために泣くことはできなかった。

　翌朝、ワーシャは早くから学校へ出かけ、父親は仕事のために、一枚刃の犂（すき）の準備を始めた。父親は春になったらキビを植えようと、雌牛を使って、線路わきの鉄道用地を耕すつもりだった。

　学校から帰ると、ワーシャは父親が雌牛を使って耕しているのを目にした。しかし、少ししか耕されていなかった。雌牛はおとなしく犂を引きながら、首を垂れて、よだれを地面に流していた。ワーシャと父親は、以前にも雌牛を使って仕事をしていた。雌牛はよく耕し、くびきをつけて歩くのに慣れ、それにがまんしていた。

　夕方、父親はくびきをはずして、雌牛を刈入れのすんだ畑に放して、草を食べさせた。ワーシャは家で机に向かって勉強しながら、ときおり窓をのぞいた。雌牛を見ていたのだ。雌牛は近くの畑に立ったまま、草も食べず、何もしなかった。

　きのうと同じ、薄暗い、淋しい夜がやってきた。煙突の回転筒が、長い秋の歌をうたうかのように、屋根の上できしんでいた。雌牛は暮れて行く野原に目を据えて、子牛を待っていた。もはや子牛を思って鳴くこともなく、子牛を呼ぼうともせず、ただ理解できぬまま耐えていた。

　勉強をすませると、ワーシャはパン切れを取り、それに塩をかけて、雌牛のところへ持って行った。雌牛はパンを食べようとせず、それまでと同じように、何の関心も示さなかった。ワーシャはしばらくそばに立っていたが、やがて、自分が雌牛の気持ちを理解しており、雌牛を愛していることを分かってもらうために、首を抱いた。だが雌牛は首を激しく引っ込めて、少年をふり放し、のどから出たとは思われないような声を出すと、野原の方へ駆け出した。遠くまで走って行くと、雌牛はとつぜんふり返って、跳ねたり、まえ足を曲げて頭を地面におしつけたりしながら、さっきの場所で待ちうけているワーシャの方に近づいて来た。

　雌牛は少年のかたわらを駆け抜け、屋敷のわきを通り抜けて、夕暮れの野原に姿を消した。その方角からもう一度、雌牛の鳴き声とは似ても似つかぬ声をワーシャは耳にした。

　コルホーズの協同組合からもどった母親と父親とワーシャは、真夜中まで周囲の野原のあちこちを歩き、雌牛を呼んだ。だが雌牛はそれに答えず、どこにもいなかった。夜食のあと、母親は養い手と働き手がいなくなったといって泣き出し、父親は座って、新しい雌牛を購入するための資金を貸してくれるよう、相互金庫へ出す申請を書いた。

　朝、ワーシャは一番に目を覚ました。窓はまだ灰色だった。彼はだれかが家のまわりで息をし、静かに動いているのを聞きつけた。彼は窓をのぞいて、雌牛を見つけた。雌牛は門のところに立って、家に入れてもらうのを待っていた。

　このときから、雌牛は生活し、耕したりコルホーズへ麦粉を取りに行かなければならないときは働いたが、乳はまったく出さなくなってしまった。雌牛は気むずかしく、分からず屋になった。ワーシャは水をやったり、餌をやったり、からだをきれいにしてやったりしたが、雌牛はそれに応えず、何をされても無関心だった。

　日中、歩きまわって元気になるようにと、雌牛は野原に放された。だが雌牛はあまり歩きまわらず、長いこと一カ所に立っていては、少し歩き、また歩くのを忘れて立ちどまるという具合だった。あるとき、雌牛は線路に出て、

枕木の上を静かに歩き出した。父親がそれを見つけると、雌牛はかたわらへ退いた。以前には従順で、敏感で、自分から線路に出るようなことはなかった。だからワーシャは、雌牛が列車に轢（ひ）かれるか自分から死ぬのではないかと心配になり、学校にいてもいつも雌牛のことを考え、学校からは走って家に帰るのだった。

　こうして、日がすっかり短くなったあるとき、夕暮れどきにワーシャが学校から帰ると、家のまえに貨物列車がとまっているのが見えた。不安に駆られた彼は、すぐに機関車の方へ走って行った。

　ワーシャが少しまえに運転の手助けをした、あの顔見知りの機関士と父親が、炭水車の下から死んだ雌牛を引きずり出していた。ワーシャは地面に座り込み、いちばん身近だったものが死んだ悲しみのあまり、身動きもできなかった。

「10分もまえに汽笛を鳴らしたんだ」と機関士が父親に言った。「あんたんとこの牛は、つんぼなのかい、馬鹿なのかい？　列車が接近したから急ブレーキをかけたんだが、間に合わなかったよ」

「こいつはつんぼじゃない、頭が狂ってたんだ。きっと、線路の上でいねむりでも始めたんだろう」と父が言った。

「いや、こいつは機関車から逃げた。だが、ゆっくりと、しかも、わきへよけようなどと考えもせずに」と機関士が答えた。「私は、よけるものとばかり思っていた」

　助手と火夫を加えた4人がかりで、無惨な姿の雌牛の胴体を炭水車の下から引きずり出し、すべての肉を、外の、線路わきの乾いた溝に投げ込んだ。

「さいわい、肉は新しい。塩漬けにして取っておくかね、売るかね？」と機関士が言った。

「売らなきゃならん」　父親は決心した。「別の雌牛を買うためのカネを作らなければならない。雌牛なしじゃ、大変だ」

「雌牛なしじゃ、無理だろう」と機関士も同意した。「カネを集めて、買うがいい。私もいくらか出すよ。たくさんはないが、少しならある。もうすぐ賞金ももらうことだし」

「一体、何だって私にカネを？」　父親はびっくりした。身内でもないし、だれも……それに、私だけで何とかなるよ。労働組合、相互金庫、勤務先、あんたも知ってのように、あちこちから……」

「さあ、私も出すよ」と機関士は譲らない。「あんたの息子さんは、私を助けてくれた。だからだよ。ほら、あそこに座ってる。やあ、今日は！」　機関士は笑った。

「今日は！」　ワーシャが答えた。

「私は生涯に一度も人を轢いたことはない」と機関士が言った。「一度だけ犬をやった……雌牛のために、あんた方に何の償いもしないんじゃ、私自身、気が重い」

「何の賞金をもらうの？」とワーシャがたずねた。「運転が下手くそなくせに」

「いまじゃ、いくらか上手になったよ」機関士は笑い出した。「覚えたんだ。われわれには資材が不足している。麻くずが1フントなくなっても、手に入らない。だから、あんな運転をしなきゃならないんだよ」

「新しい砂箱は取りつけた？」

「いや、小さいのを大きいのに取り替えたよ」

「やっと分かってもらったんだね」とワーシャは怒ったように言った。

　そこへ車掌長がやって来て、機関士に書類を渡した。機関士はそこに、駅でないところで停車した理由を書き込んだ。

　次の日、父親は村の地区協同組合へ雌牛の死体を売った。荷馬車がやって来て、死体を持って行った。ワーシャと父親は、荷馬車といっしょに出かけた。父親は肉の代金を受け取りたかったし、ワーシャは店で本を買おうと思ったからだ。二人は出先で一泊したが、買物をしてさらに半日そこですごし、昼すぎに家に向かった。

　彼らは、ワーシャが学んでいる学校のあるコルホーズを通って行かなければならなかった。父親と息子がコルホーズへ着いたときには、すっかり暗くなっていた。そこでワーシャは家に帰らずに、あすの朝早くまたここへ来るというむだをしないために、学校の番人のところへ泊ることになった。父親は一人で家に向かった。

　学校では、朝から試験が始まった。生徒たちに課されたテーマは、『祖国の役に立つために、自分はどのように生活し、働くか』というものだった。

　ワーシャはノートに次のように書いた――「どのように生活するか、ぼくには分かりません、まだ考えていません。ぼくの家に雌牛がいました。まだ生きていたときは、その乳をお母さんとお父さんとぼくが飲みました。そのあと、雌牛は自分の子ども――雄牛を生みました。子牛も乳を飲みました。ぼくたち3人と子牛、それでも全員に足りました。雌牛はさらに、耕したり、荷を運んだりもしました。そのあと、子牛は肉に売られ、殺され、食べられてしまいました。雌牛は悩むようになり、やがて列車に轢かれて死にました。雌牛もまた、食べられてしまいました。なぜなら、牛肉だったからです。いまは何もいません。雌牛とその子牛はどこ？　分かりません。でも、おかげでみんな助かりました。雌牛はぼくたちにすべてを、つまり、牛乳、子牛、肉、皮、内臓、骨をくれたのです。善良な雌牛でした。ぼくもまた、ぼくたちの祖国のみんなが、ぼくのために助かるようになりたいです。自分のためには少なくていい。なぜならぼくは、ぼくたちの雌牛を覚えているし、忘れないだろうからです」

　ワーシャが家へもどったときは、もう薄暗かった。父親はすでに家にいた。線路から帰ってきたばかりだった。彼は、機関士がタバコ入れに入れて機関車から投げてよこした2枚の紙幣――一〇〇ルーブルを母親に見せていた。

（さし絵　Y・ウラジーミロフ）

ВИЛЬНЮССКИЙ УНИВЕРСИТЕТ: ТРАДИЦИИ И СОВРЕМЕННОСТЬ

Ректор Вильнюсского университета,
академик Йонас КУБИЛЮС

Наш университе́т, существу́ющий уже́ четы́ре столе́тия, старе́йшее вы́сшее уче́бное заведе́ние не то́лько Лито́вской ССР, но и всей страны́.

Уже́ в XVII ве́ке в Ви́льнюс съезжа́лись учёные и преподава́тели европе́йских вы́сших уче́бных заведе́ний для обсужде́ния “уче́бных програ́мм.” Университе́т блиста́л имена́ми знамени́тых для своего́ вре́мени учёных. Его́ профе́ссор поэ́т Сарбе́виус был уве́нчан в Ри́ме лавро́вым венко́м. «Ли́рика», напи́санная им на лати́нском языке́, вы́держала в Евро́пе 60 изда́ний. Рису́нки для одного́ из них сде́лал вели́кий Ру́бенс.

В 1650 году́ вы́пускник университе́та Симона́вичюс написа́л кни́гу «Вели́кое иску́сство артилле́рии», в кото́рой изложи́л при́нципы раке́тной те́хники, в том числе́ многоступе́нчатых раке́т. Этот фундамента́льный нау́чный труд был переведён на францу́зский, англи́йский, неме́цкий языки́. «Ло́гику» профе́ссора Смигле́цкого изуча́ли в европе́йских университе́тах, а в Оксфорде издава́ли три́жды. Обсервато́рия университе́та (кста́ти, она́ сохрани́лась до на́ших дней) была́ образо́вана в 1753 году́.

Университе́т оказа́л большо́е влия́ние на разви́тие не только лито́вской культу́ры, но и культу́ры сосе́дних наро́дов (ру́сского, по́льского, украи́нского, белору́сского). В его́ стена́х учи́лись вели́кий по́льский поэ́т Ада́м Мицке́вич, вели́кий поэ́т Украи́ны Тара́с Шевче́нко и мно́гие други́е ви́дные де́ятели мирово́й культу́ры. В нача́ле XIX ве́ка Ви́льнюсский университе́т стал не то́лько мо́щным нау́чным це́нтром, но и распространи́телем передовы́х, свободолюби́вых иде́й. Его́ студе́нты и профессора́ при́няли акти́вное уча́стие в восста́нии 1830 го́да про́тив цари́зма, и царь Никола́й I свои́м ука́зом “закры́л” университе́т.

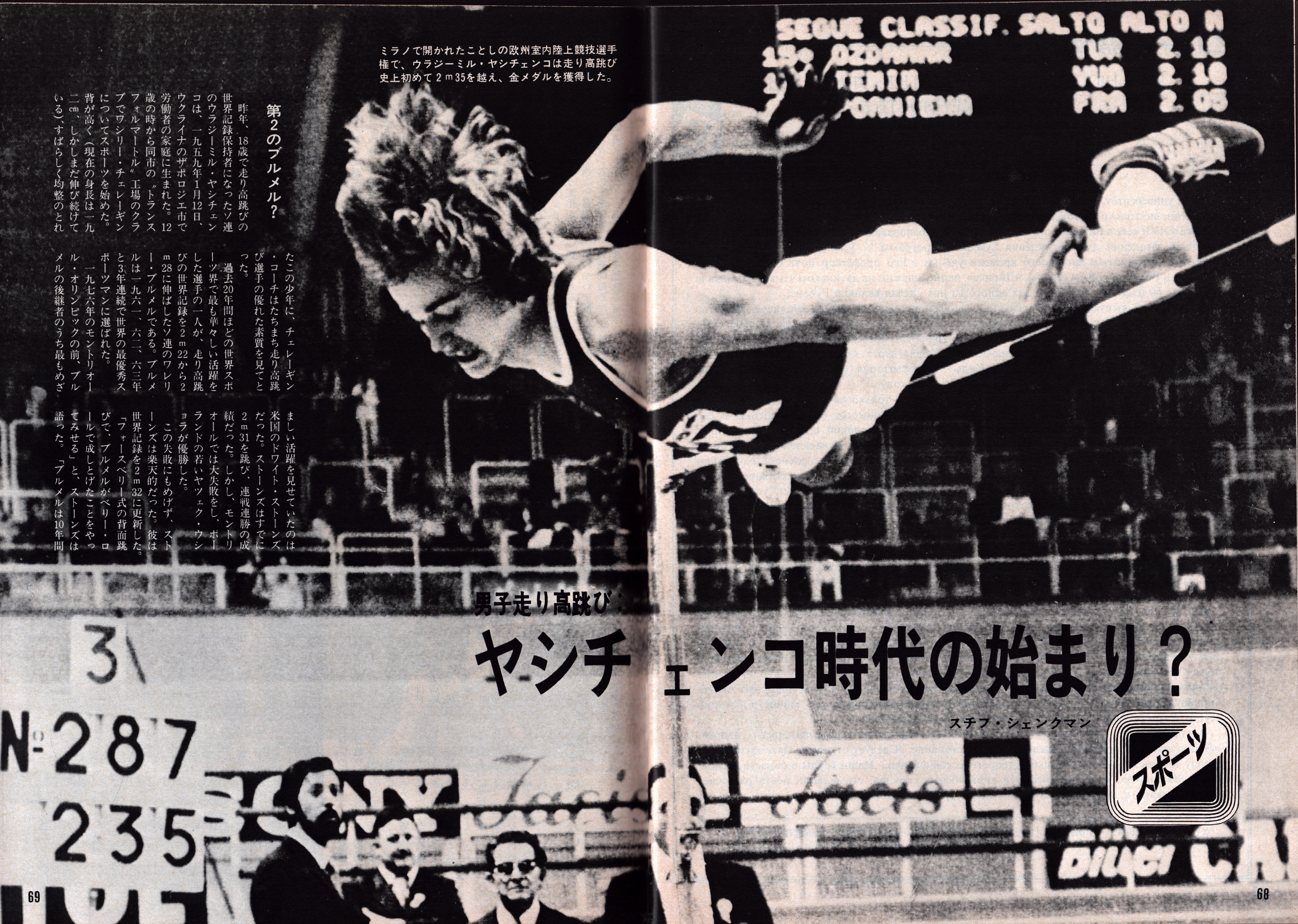
Я беру́ э́то сло́во в кавы́чки, потому́ что факти́чески университе́т продолжа́л существова́ть, но уже́ в ви́де не́скольких небольши́х университе́тов. Сра́зу по́сле Вели́кой Октя́брьской револю́ции 1917 го́да был и́здан декре́т “Об откры́тии Трудово́го университе́та в Ви́льнюсе”.

Послевое́нное разви́тие и нау́чное обогаще́ние университе́та происходи́ли на мое́й па́мяти. Я на́чал учи́ться в университе́те, на меха́нико-математи́ческом факульте́те, в 1941 году́. По́сле войны́ я зако́нчил его́, на́чал нау́чную де́ятельность и вот уже́ два́дцать лет ре́ктор.

Шестна́дцать ты́сяч студе́нтов обуча́ются сего́дня в университе́те. Среди́ них бу́дущие матема́тики, фи́зики, хи́мики, ме́дики, юри́сты, экономи́сты, исто́рики. На́ших вы́пускников мо́жно встре́тить в любо́м нау́чном институ́те Ли́твы, в любо́й шко́ле, на заво́дах и в учрежде́ниях. За после́дние три десятиле́тия университе́т зако́нчило бо́лее тридцати́ ты́сяч челове́к. Ка́ждый тре́тий специали́ст с вы́сшим образова́нием в респу́блике име́ет дипло́м Ви́льнюсского университе́та. Среди́ его́ вы́пускников ны́нешний президе́нт Акаде́мии нау́к Лито́вской ССР Ма́тулис, изве́стный писа́тель Марцинкя́вичус, мини́стр юсти́ции Ку́рис и мно́гие ви́дные де́ятели нау́ки и культу́ры респу́блики.

В университе́те образова́лся ряд самостоя́тельных нау́чно-иссле́довательских направле́ний и школ, получи́вших междунаро́дное призна́ние. Сле́дует отме́тить математи́ческую шко́лу тео́рии вероя́тностей, шко́лу теорети́ческой фи́зики. На́ши труды́ в о́бласти фи́зики полупроводнико́в, хиру́ргии се́рдца и кровено́сных сосу́дов, стимуля́ции ро́ста расте́ний, си́нтеза лека́рств, балли́стики и други́е по́льзуются мирово́й изве́стностью.

本号のテキストは54ページ掲載の「ソ連最古の大学」の原文です。スペースの都合で一部省略しました。



ミラノで開かれたことしの欧州室内陸上競技選手権で、ウラジーミル・ヤシチェンコは走り高跳び史上初めて2m35を越え、金メダルを獲得した。

スポーツ

男子走り高跳び：

ヤシチェンコ時代の始まり？

スチフ・シェンクマン

第2のブルメル？

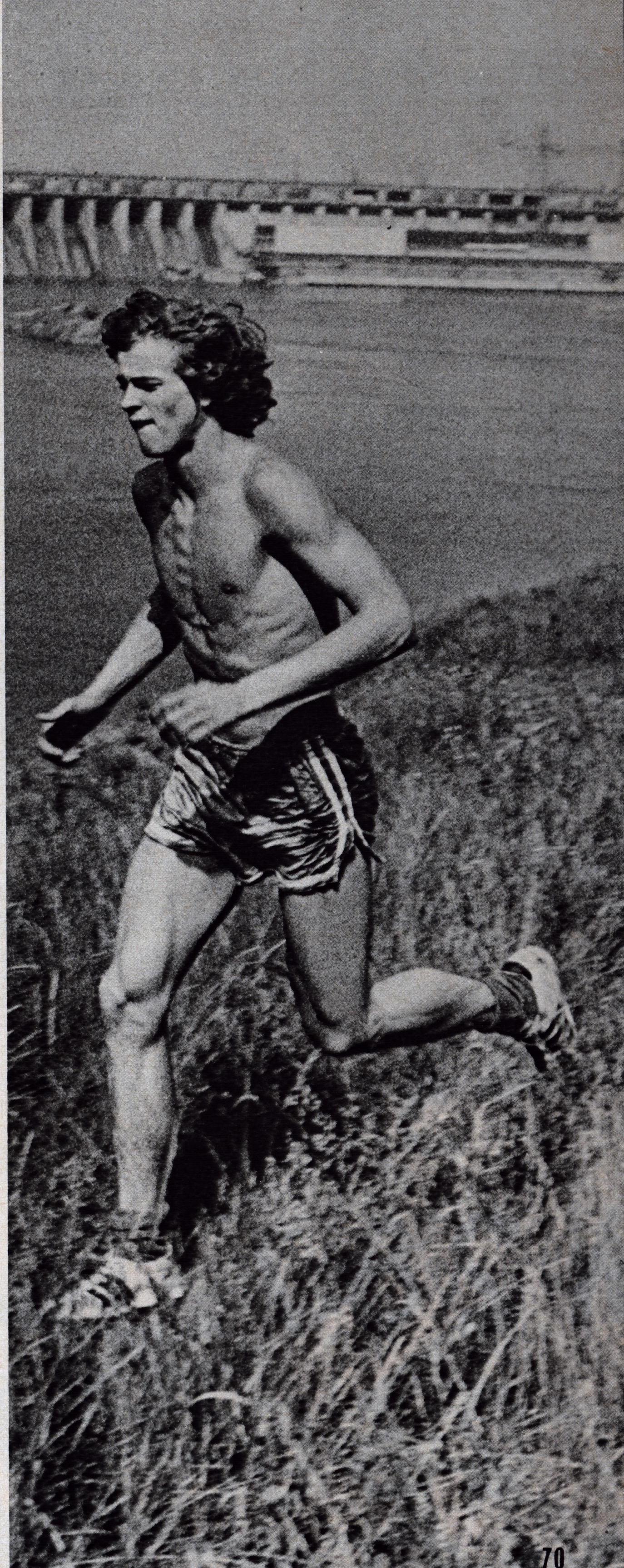
昨年、18歳で走り高跳びの世界記録保持者になったソ連のウラジーミル・ヤシチェンコは、一九五九年1月12日、ウクライナのザポロジエ市で労働者の家庭に生まれた。12歳の時から同市の〝トランスフォルマートル〟工場のクラブでワシリー・チェレーギンについてスポーツを始めた。背が高く（現在の身長は一九二cm、しかしまだ伸び続けている）、すばらしく均整のとれたこの少年に、チェレーギン・コーチはたちまち走り高跳び選手の優れた素質を見てとった。

過去20年間ほどの世界スポーツ界で最も華々しい活躍をした選手の一人が、走り高跳びの世界記録を2m22から2m28に伸ばしたソ連のワレリー・ブルメルである。ブルメルは一九六一、六二、六三年と3年連続で世界の最優秀スポーツマンに選ばれた。

一九七六年のモントリオール・オリンピックの前、ブルメルの後継者のうち最もめざましい活躍を見せていたのは米国のドワイト・ストーンズだった。ストーンズはすでに2m31を跳び、連戦連勝の成績だった。しかし、モントリオールでは大失敗をし、ポーランドの若いヤツェク・ウショラが優勝した。

この失敗にもめげず、ストーンズは楽天的だった。彼は世界記録を2m32に更新した。「フォースベリー式の背面跳びで、ブルメルがベリー・ロールで成しとげたことをやってみせる」と、ストーンズは語った。「ブルメルは10年間

ドニエプル川の岸をランニング（故郷ザポロジエ市で）



も世界記録保持者だった。私が最初の世界記録をマークしたのが一九七三年だから、八三年までは持ちこたえたい。ソ連のグリゴリエフ　ポーランドのウショラ、カナダのジェイコブスなど手ごわいライバルがいるが、負ける気はしない」

ストーンズがストックホルムのホテルでこのインタビューに応じたのは一九七七年7月3日の朝だった。そしてその日の夕方、彼は自分のまったく知らないウラジーミル・ヤシチェンコという選手が2m33を跳んで、新しい世界記録保持者になったことを知ったのである。

新しいスタイル

世界の一流走り高跳び選手の中で、ブルメルのコーチだったモスクワのウラジーミル・ジャチコフ教授が完成させた古いベリー・ロールで跳んでいるのはヤシチェンコとロルフ・バイルシュミット（ドイツ民主共和国）だけである。他の選手は背面跳びを採用している。この方法は助走のスピードを速くする必要があるが、マスターしやすいという利点がある。二つの方法の優劣については、すでにかなり長期間にわたって論争が行われてきた。

この論争で物を言うのは、何と言っても記録とオリンピックのメダル。最近の3人の世界記録保持者のうち、パトリク・マッドルフ（米国）とヤシチェンコの2人がベリー・ロール、ストーンズが背面跳びで世界記録を樹立した。また、最近3回のオリンピック・チャンピオンのうち、フォースベリー（米国）とウショラが背面跳び、ベリー・ロールはユーリー・タルマク（ソ連）一人である。

というわけで、今のところ勝負は五分五分といったところ。しかし、ソ連の走り高跳びの専門家として有名なユーリー・チスチャコフは、ベリー・ロールと背面跳びの論争の中から新しい跳び方が生まれるに違いないと見ている。

この跳び方はバーを越える時の選手の体の重心の位置に特徴がある。チスチャコフは最も有利な重心の位置を棒高跳びの選手たちから学んだ。棒高跳びの選手の場合、両足がすでにバーを越え、胴がバーの上にあるのに、頭と両手がまだバーの下にある場合が珍しくない。この場合、選手の重心はバーの下にあるが、チスチャコフによれば、この状態がいちばん有利だという。

ヤシチェンコが世界記録をマークしたときの映像記録を研究して、チスチャコフは棒高跳びの選手たちに見た理想的な跳び方にこの若い選手の重心の位置が非常に似ているという結論に達した。もっとも、ヤシチェンコの場合、バーを越す時はすべてが棒高跳びの選手と逆の順序で進行した。最初に頭と手がバーを越えたのである。しかし、これは事の本質に関係しない。あるいはヤシチェンコがまだ呼び名のない新しい跳び方の時代を走り高跳びに開くことになるかもしれない。

高さを気にしない！

若いヤシチェンコには計算ずくといったことは無縁である。経験豊かなジャンパーが記録を出そうとするときには、一段階ごとに自分の目標を正確に決めて跳ぶのが普通だが、ヤシチェンコは2m20をクリヤーすると、すぐにバーの高さを2m35にまで上げるように頼んだことが何回もあった。ベテラン・コーチのチェレーギンは自分の弟子にあらゆる限界を無視することを仕込んだ。ヤシチェンコには心理的な壁といったものはない。彼は同じように平静に2m35、2m40、あるいは2m45の高さにさえ向かい合える。肝心なのは、筋肉の新鮮さを維持することである。このため、ヤシチェンコは試合中、できるだけ少ない回数のジャンプで済ませようとする。いや、大体がエネルギーをセーブするために、大きな競技会にもそれほどひん繁に出場していない。

しかし、一九七八年はきわめて積極的なスタートを切った。モスクワのソ連室内陸上競技選手権ではグリゴリエフと激戦の末、2位になった。その後、ミラノの欧州室内陸上では5時間近くも続いた熱戦で2m35という室内世界新をマークした。さらにトビリシ（グルジア共和国首都）で開かれたプラウダ紙杯国際競技会では2m34という屋外の世界記録を樹立した。この競技会のあとの記者会見でヤシチェンコは次のように答えている。

――ストーンズ選手がこの大会に出場していたら、どうなったと思うか？

「その場合にはバーの高さが2m34以上になっていただろうと確信する」

――室内の2m35と屋外の2m34のどちらの記録が大事だと考えるか？

「ぼくは室内と屋外の記録を区別していない。走り高跳びではぼくの場合、絶対的な高さがあるだけだ」

――オリンピックまであと2年あるが、その間に世界記録は更新されると思うか？　また、モスクワ・オリンピックで優勝するにはどのくらいの高さを跳ばねばならないと思うか？

「オリンピックまでは何回も世界記録が書き直されると思う。現在の世界には新記録を出せる選手が2、3人いる」

――たとえば、だれか？

「さっき名前の出たストーンズだとか、あるいはソ連のベルコフもそうだ。モスクワで勝つには2m40を跳ぶ必要がある」

――跳べると思うか？

「恐らく、跳べると思う。しかし、オリンピックまでにはまだ名前を知られていない新しい選手が出てくる可能性もある」

スポーツクラブの後輩たちと





明るい人柄はみんなから愛されている。



コーチのワシリー・チェレーギンはヤシチェンコの〝育ての親〟。

olympics-80

オリンピックとヨット競技

レオニード・ゴリャノフ

ヨット競技は第1回アテネ大会（一八九六年）と第3回セント・ルイス大会（一九〇四年）を除き、オリンピックのすべての大会で行われてきた。しかし、最初のころは参加者が非常に少なかった。たとえば、一九〇〇年のパリ大会ではフランス、英国、ドイツ、スイスの選手が参加しただけだった。一九〇八年のロンドン大会でもメダルを争ったのは英国、ベルギー、フランス、スウェーデンのチームだけだった。

しかし、年とともにヨット競技は盛んになった。一九二四年の第8回パリ大会ではすでに19ヵ国のチームが参加し、一九七六年のモントリオール大会では55ヵ国の選手が出場した。

ヨット競技は、帆走という外見的には古い要素を持つスポーツだが、今日では最新の技術とともに歩んでいる。艇の建造にはプラスチックから超軽合金まであり、とあらゆる現代的な材料が利用されている。新しいクラス（級）が次々と出現し、ヨット競技で市民権を獲得している。

クラスと名称は比較的ひんぱんに変わっているが、オリンピック競技のヨットは大体2つの基本的なタイプ――操縦性の高いセンターボード艇と、キールボード艇（センターボード艇よりも大型で帆装も大きい）に分かれる。

各クラスとも各国は一チームしか出場できない。

ロシアのヨット競技は20世紀の初めには国際的にもある程度の成果を収めていた。たとえば、一九一二年のストックホルム・オリンピックではアレクサンドル・ビシネグラツキーがキャット艇の「ガリア2号」で銅メダルを獲得していた。

一九一七年の10月社会主義大革命のあと、主として個人の所有だったヨットは至るところで国有化された。一九二四年までにはすべてのヨット・クラブが労働組合あるいは体育評議会の管理下に入り、ヨットの使用が無料になった。

一九四五年からヨット競技のソ連選手権が行われるようになった。現在、全国に約五万人のヨットマンがおり、大きなヨット・クラブが多数できている。

ソ連のヨット界は、とくに第2次大戦後、一連の優れた選手を生み出した。モスクワのチミール・ピネギンは一九六〇年代の最優秀ヨットマンの一人に数えられている。ピネギンは一九六〇年のローマ大会でソ連のヨットマンとしては初めてスター級でオリンピック・チャンピオンになった。

キエフのワレンチン・マンキンの戦績も輝かしい。一九六八年のメキシコ・オリンピックでフィン級に優勝し、4年後のミュンヘン大会ではテンペスト級で金メダルを獲得した。一九七六年のモントリオール大会では同じテンペスト級で銀メダルの成績だった。

一九八〇年オリンピックのヨット競技は、国際オリンピック委員会の決定によりエストニア共和国の首都タリンで行われる。従って、三〇〇〇人以上と予想される選手と多数のツーリストがゴチックの過去と現代のモダンさが見事に溶け合ったこのソ連バルト海沿岸地方で最も美しいまちの一つを訪れることになる。

タリン市の風光明びな一角ピリタで最新式の設備をそなえたオリンピック・ヨット・センターの建設が全速力で進められている。オリンピック開催期間中は多くの航空便と特別急行列車がタリンとモスクワ、レニングラード間を連絡する。

ソ連政府の機構

ソ連政府の機構についての松浦祐司さん（大宮市）の質問にお答えします。

ソ連閣僚会議――ソ連政府――は、ソ連国家権力の最高の執行・処理機関です。ソ連閣僚会議は、閣僚会議議長（首相）、第1副議長（複数）、副議長（複数）、各閣僚、各国家委員会議長、閣僚会議官房長、それに15のすべての連邦構成共和国の閣僚会議議長をもって構成されます。そのほかソ連最高会議（国会）は他の組織の指導者を政府の構成員に加えることができます。たとえばソ連国立銀行総裁、ソ連中央統計局長が現在の政府の一員になっています。

ソ連政府は、ソ連最高会議により、連邦会議と民族会議の合同会議において（各共和国政府は共和国の最高会議によって）組織されます。ソ連閣僚会議はそのあらゆる活動においてソ連最高会議に責任を負い、報告の義務を負っています。政府はその活動にかんしてソ連最高会議に定期的に報告します。

最高会議の委任により、閣僚会議議長が組閣し、それを最高会議に提案します。閣僚会議議長はまた、政府の個々の成員を解任し、また任命する提案を最高会議に（会期から会期までの期間は最高会議幹部会に）提出する権利を持っています。

政府は、新たに選出されたソ連最高会議（選挙は5年に1回）にたいしてその第1回会期において自己の権限を解除します。

閣僚会議の常設機関は、議長、第1副議長、副議長からなる閣僚会議幹部会です。

閣議は、少なくとも3ヵ月に1回開かれ、幹部会は定期的に、必要に応じて開かれます。これらの会議での決定は、多数決によって採択されます。

政府に付属して、その機能を発揮するのを助ける常設委員会、臨時委員会、その他の作業機関もあります。

ソ連閣僚会議議長はA・N・コスイギンで、一九六四年からこの地位についています。

ソ連の貿易相手国

ソ連はどんな国々と貿易をしていますか、という河野隆志さん（新潟県）の質問にお答えします。

現在ソ連は世界の一一八ヵ国と貿易をしています。一九七七年のソ連の貿易総額は六三四億ルーブル（一九七六年に比べて11・6％の増）で、そのうちわけは、輸出が三三三億ルーブル、輸入が三〇一億ルーブルでした。（1ルーブルは約二八二円）。

ソ連の貿易総額で主要な地位を占めているのは社会主義諸国で、一九七七年には、その比率は57・3％でした。社会主義諸国のうちで大きな貿易相手国は、一九七七年にはドイツ民主共和国（貿易額六七億ルーブル）、ポーランド（六一億ルーブル）、ブルガリア（五二億ルーブル）でした。

ソ連の貿易額に占める資本主義先進工業国の比率は、一九七七年に29・6％でした。これらの国の中で主要な地位を占めたのは、ドイツ連邦共和国（三〇億ルーブル）、日本（二三億ルーブル）、フィンランド（一七億ルーブル）、米国（一五億ルーブル）でした。

一九七七年のソ連の発展途上諸国との貿易額の比率は13・1％で、これらの国のうちソ連の主な貿易相手国はインド（九億二六〇〇万ルーブル）、イラン（七億七五〇万ルーブル）、イラク（六億二〇〇万ルーブル）、エジプト（四億九二四〇万ルーブル）、ブラジル（三億一四〇〇万ルーブル）でした。

☆　☆　☆

催し物のお知らせ

日ソ親善協会の一九七八年度日ソ親善月間（11月7日の革命記念日の前後1ヵ月間）に向けて、ソ連から三つの歌舞アンサンブルが来日します。

「ボロネジの娘たち」 10月22日・福井県立体育館（国際フェスティバルに参加）、福井県民会館／24日・大阪市立浪速解放会館／26日・長崎NBCホール／28日・鹿屋市文化会館／30日・鹿児島市中央公民館／31日・宇土市民会館。

グルジア「アラグベリビ」アンサンブル 11月2日・名古屋　港湾会館／4日・甲府東高校講堂（予定）／7日・大宮　埼玉県商工会館／9日・千葉市民会館／11日・東京　九段会館。

カザフ・アンサンブル 11月7日・天童市民会館／11日・東京　九段会館／13日・釧路市厚生年金会館／14日・北見市経済センター／15日・旭川市文化会館。

公演についての詳細、その他の親善月間行事についてのお問合せは、東京都千代田区麹町2の3　麹町ガーデンビル内　日ソ親善協会　電話261・4897、または日ソ親善協会各支部へどうぞ。

★　★　★

第7回日ソ芸術教育シンポジウム

日時・11月3、4、5日。場所・東京　日本都市センター。テーマ「芸術教育とリアリズム――青少年の調和ある成長発達のために」

詳細についてのお問合わせは、東京都中野区新井2―12―10　芸術教育研究所　電話387・5461　へどうぞ。

東京で第2回ロシア＝ソビエト音楽祭

10月15日より27日まで日本で第2回ロシア＝ソビエト音楽祭が開催される。本誌のマリーナ・ルイクリナ記者がワシリー・クハルスキー・ソ連文化次官にこの音楽祭についてインタビューした。なお同次官は、音楽祭に参加するソ連代表団の団長をつとめる。

日本でロシア＝ソビエト音楽祭が開催されますが、その目的は？

「私には日本でのロシア＝ソビエト音楽祭の開催は、良い伝統になっていると思われます。それには理由があります。ロシア＝ソビエト音楽に対する日本の聴衆の関心はよく知られています。ほとんどすべての優れたソ連の音楽集団や演奏家はすでに再三日本で公演し、大きな成功を収めました。音楽祭を通じて私たちは、ロシア＝ソビエト音楽文化の発展の全貌を示し、演奏家の技量を披露する機会を持ちます。日本の聴衆が私たちの音楽の洗練された理解者であるのはうれしいことです。ですからソ連のアーチストの日本公演は、いつも非常に重要な、心おどる催しです。

今回の音楽祭は前回の一九七五年の音楽祭同様の成功を収めるものと期待しています。日本の聴衆は、新しい音楽集団やアーチストの名前、ソ連の作曲家の最新作を知るでしょう」

音楽祭のプログラムは？

「音楽祭は東京で開催されますが、そのほかに私たち代表団のうちの多くの音楽家は、10月中日本の各都市で公演します。

すでに日本におなじみのソ連人民芸術家エブゲニー・スベトラーノフ指揮の国立ソビエト交響楽団や有名なソ連の音楽家――バイオリニストのギドン・クレメル、ピアニストのラザール・ベルマンが公演するほか、ソ連人民芸術家クラフジー・プチッツァ指揮の全ソ放送・中央テレビ・アカデミー大合唱団（モスクワ放送合唱団）とバロック室内合奏団（モスクワ五重奏団）が日本で初めて公演します。

音楽祭ではロシアの作曲家――グリンカ、チャイコフスキー、ムソルグスキー、それにタネーエフ、ストラビンスキー、メトネルの作品、優れたソ連の作曲家――ショスタコービチ、プロコフィエフ、フレンニコフ、シチェドリンらの作品が演奏されます。プログラムに含まれているチーホン・フレンニコフのピアノ協奏曲第2番は作曲家自身が演奏します。

タチヤナ・スミルノワが、さきの訪日中に見た〝日本画展〟の印象をもとに作曲した室内楽曲〝5枚の日本の絵〟は、日本の聴衆の興味を引くでしょう。この作品はモスクワ五重奏団のために書かれたものです。

そのほか、ソ連諸民族の民族音楽――ロシア、ウクライナ、グルジアの歌も紹介されますが、そのなかの〝グリアの歌〟（グリアはグルジアの州）は、作曲家・ソ連人民芸術家オタール・タクタキシビリの指揮でモスクワ放送合唱団が歌います。彼の作品はいつも個性豊かで、大きな情緒的力を持っています。

私は第2回ロシア＝ソビエト音楽祭がソ日両国民間の文化交流の一層の発展と友好の強化を促進するものと期待しています」

第2回ロシア・ソビエト音楽祭日程

10月15日・日比谷公会堂・ラザール・ベルマン／10月20日・NHKホール・国立ソビエト交響楽団、モスクワ放送合唱団／10月21日・NHK・ホール・国立ソビエト交響楽団、モスクワ放送合唱団／10月22日2時・日比谷公会堂・モスクワ放送合唱団／10月22日7時・日比谷公会堂・ギドン・クレメル／10月24日・中央会館・モスクワ五重奏団／10月27日・厚生年金会館・国立ソビエト交響楽団

なお、詳細についてのお問合せは、新芸術家協会（電話03・503・7451）へどうぞ。

読者のページ

旅の思い出

福島県　遠藤　輝之助

飛行機で、イギリスからの帰途、フランクフルトを経由してモスクワに立ち寄った。給油のための着陸と思った乗客は、待合室の売店であれこれと土産ものを物色して、夫々思い思いの品を手に、カウンターに勘定の順番を待って並んでいた。国籍の異なる人々が財布の中から持ち合せの通貨を出して勘定する。ドル、日本円、フラン等々まちまちの貨幣を女性一人のカウンターが手ぎわよくさばいていたのには感心した。私は大型レコード十枚と孫が欲しがっていた五組入れロシア入れ子人形を手にして、カウンターの女性の手さばきにしばし見とれていた。

そのうちに飛行機の案内人が早く来るようにと告げに来るが、あと二、三人のところなので、あせる心を静めてカウンターに近づくのを待っていた。やっと勘定をすませて大急ぎでゲートを通って自分の席に着くことができた時は、ヤレヤレとほっとした。

窓外をみると、飛行場は夕映えに色どられて、陽は斜めに西の端に沈まんとしている。なんと静かなる一瞬なのだろうか。

程なく機はモスクワをあとにして東に向かって進んだ。明日の十時半には日本に着く。渡された毛布にくるまって窓外をみた。ソ連の奇麗な森林や点在する部落をながめているうちに闇がせまって来た。ふと目を覚ますと私の乗っている飛行機は一万米の上空を飛んでいる。機は白い雲の上を東へ東へと進んでいる。青い空には丸い月が空中に浮いている。「仲秋の月シベリヤの雲の上」の俳句を口ずさんだ。

今度の旅行は姉の墓参ではあったが、「三角紋様」に対する関心をテーマとした旅でもあった。紀元前ベスビアス山の噴火土に埋もれたポンペイ遺跡の家の入口の土間にある三角紋様とロンドン近郊のセントアルバンスの古い木造の家の入口にもポンペイと全く同じ三角模紋様をみた。

人間の考え方は、洋の東西を問わず同じ思考の上にあることを痛感した。このような思想は、今上空を飛んでいるソ連にもあるのだろう、否たしかにある。東洋の日本人の心の中にあるものが印度、ローマ、エジプト、独乙、フランスにもある。ソ連人の心の中にこのような思考が今尚育まれ生き続けているに違いない。

こんな想いを抱いているうちに、機は開けたシベリアの東部地方を飛んでいる。奇麗な豊かな森林、私共日本人にとってはうらやましい。

「あと一時間で羽田です」とのアナウンスに乗客は窓外をみる。陸地と海との境が白い波で区切られているのが良くみえる。日本に帰って来たのだなと思う反面、あの広々としたソ連の地を再び想い起こさずにはいられない。

再度ソ連を訪ねる時は「三角紋様」の研究テーマを携えて行きたい。

好評のグルジア映画『ピロスマニ』



自作を前に居酒屋で酒を飲むピロスマニ（アフタンジル・ワラジ演。なおワラジはグルジアの著名な美術家で、この映画の美術も担当）

日本ではめずらしいグルジア共和国の映画『ピロスマニ』(日本海映画提供・配給）が、9月15日から東京・岩波ホールで公開され、評判になっている。

この映画はグルジアの独学の天才画家ニコ・ピロスマニの数奇な生涯を描いた作品で、1974年シカゴ映画祭でゴールデン・ヒューゴ賞、アゾロ国際映画祭で最優秀伝記映画賞を受賞している。

ピロスマニ（1862―1918）の絵は、日本でも1977年、近代美術館の「素朴な画家たち」展で数点紹介され、絵画愛好家たちの間に静かな感動を呼んだ。

『ピロスマニ』のゲオルギー・シェンゲラーヤ監督も公開にさいして来日し、観客に次のようなあいさつをした。「私はこの映画によってグルジアの古い文化、豊かな自然、グルジア人の伝統的な精神を知ってもらいたいと思います。今日ややもすると古い固有の文化や伝統が忘れられがちですが、それは大切なものです。私の映画がすばらしい伝統文化をもつ日本の皆さんの共感を呼ぶことを念願しています」

なお『ピロスマニ』は、岩波ホール（電話03・262・5252）で10月中旬まで上映の予定。

文化と芸術

大入り満員のコムソモール劇場

指導者M・ザハロフにインタビュー





劇場のロビーで俳優たちの写真を見るファン

『星とフアキン・ムリエタの死』の1場面

一九二〇年代に創立されたモスクワのレーニン・コムソモール劇場は、伝統的に青年を対象にしたレパートリーを上演している。当然のことながら創立以来の50年間に、どの劇場もそうだが、隆盛と衰退の時期を経験した。

5年前の、ちょうど衰退の時期に、40歳のマルク・ザハロフがこの劇場の芸術指導者になった。彼は、青年の間に大きな影響力を持ち、そのために自分自身まだ若さを失わないでいる文化人の世代に属している。ザハロフは演出家として有名なだけでなく、風刺作家、時事漫筆家、漫画家としても知られている。

ザハロフの出現とともにレーニン・コムソモール劇場の芝居はいつも大入り満員になった。そのザハロフに彼の劇場についていろいろ聞いた(聞き手エレーナ・ゾーニナ)

必要なセンセーション

劇場は見せ物のうちで最も古い、最も伝統的な、最も室内的なものである。けっして暇を持て余していない20世紀の観客を何度も何度も劇場に足を向けさせるのは何か?

――大量情報手段がたくさんあるにもかかわらず、人々は俳優を見たり聴いたりするために、舞台との交流を感じるために劇場へ行く。芝居は観客に情緒と意味の充電をするだけでなく、舞台で起こっていることに直接参加しているという感覚を与える。

もちろん、劇場の入口付近の人だかりは、成功の絶対的な証拠ではないにしても、良い徴候だ。つまり、人々はカラーテレビ、ワイドスクリーン映画、ステレオよりもわれわれの方を選んでくれた、ということだ。演出家の仕事にあてはめて言うと、このことは、良心的ではあっても、健全なセンセーションの要素がないような演出は、年々その需要が少なくなるという意見にさらに私を傾けさせる。時の試練を経た伝統的な舞台手法は若い観客に興味を与えない。彼らは新しいものに驚きたがっている。

〝情緒的攻撃〟の目的



レーニン・コムソモール劇場の芸術会議



コンスタンチン・シーモノフ原作『わが町出身の若者』の舞台

批評家はあなたのことを、情緒的な、ときにはわざと人目を引く見せ物をつくり、芝居にしばしばロック音楽を取り入れたりして「観客を強襲している」と書いている。このような断定に同意するか？

――「情緒的攻撃」は客席の心を奪う方法にすぎないと私は考える。芝居が終わったあとで人々に考えさせる演出こそ、最も効果的なものだと考えている。ロックは舞台での劇的な状況を強め、それを情緒的に充実させるのに役立つ。観客はその時より完全に劇的状況を受け入れる。情緒の波が去ったあと、彼らはいろいろと考えるだろう。このような反応があるからこそ、働きがいがあるのだ。

あなたの劇場の創造的原則は？

――ソ連の傑出した演出家エブゲニー・ワフタンゴフの術語「空想的リアリズム」がわれわれにとって身近な言葉だ。われわれは空想的な構成、行動の場所と時間の転移、場面の急速な転換を好む。われわれの作品を受け入れない人は、それを折衷主義と非難し、支持する人は「合成」と呼んでいる。

われわれは日常生活的な真実らしさを追求する手法を否定するが、そのかわりしばしばロマンチックな高揚、象徴的表現、詩的な一般化を利用する。

〝現代のヒーロー〟の条件

あなたの考える「現代のヒーロー」とは？

――人々に新しい、必要な思想をもたらす人である。彼の理性、エネルギーは時代を追い越し、しばしば人々の抵抗に打ち勝って、しだいに人々の意識の中へ浸透する。しばしば彼は事業を一人かまたは少数の人たちで始める。この点にすでにドラマがあり、葛藤があり、性格を発展させるための基礎がある。

現代の観客――実生活に入ろうとしている若い観客――には、名誉と良心の最高のおきてに従って生きている人を示す必要がある。

現代の青年の特徴は何だと思うか？

――私と同年輩の人々は第2次世界大戦後に積極的に、だが不安をもって実生活に入った。われわれは妥協しなかったし、肯定でも、否定でもある程度オーソドックスであった。われわれに特有な風刺的憤りを現在の若者は皮肉にすり替えている。われわれのパトスを彼らはおとなしく、敬意を込めて受け入れるが、しかし一義的に受け入れるのではない。彼らは言うなればロマンチックであると同時に非常に現実的である。

彼らは否定的な特質を持っているか？

――持っている。一部の者の消極的な態度がそうだ。私はそれを〝心の空白状態〟と呼びたい。青年のこの一部は何かを否定し、何かを受け入れないが、この〝何か〟を正そうとするためにまったく何もしないし、また彼らの運命――道徳的、人間的な――を実現するために何もしない。この問題の解決で劇場――とくに青年のための劇場に割り当てられている役割は、けっして小さなものではない。

最近の上演作品から

レーニン・コムソモール劇場のレパートリーはどのようにつくられているか？あなたがとくに名前を挙げたい芝居は？

――われわれは青年が興味を持っている一連の問題――社会にたいする責任、愛、責務、道徳、倫理、父と子の問題、世代間の継承性――を取り上げる努力をしている。われわれの一座は健全な最大限要求主義者、探求、実験の精神で結ばれている。

われわれが成功だったと考えている劇の一つは、『誓いの休暇』(『ある兵士のバラード』と同じテーマとも言えるボリス・ワシリエフ原作の中編『名簿に記載なし』の脚色上演。この作品は一九四一年6月にドイツ・ファシスト侵略軍の攻撃を最初に引き受けたブレスト要塞の英雄的守備隊について書かれたものだ。

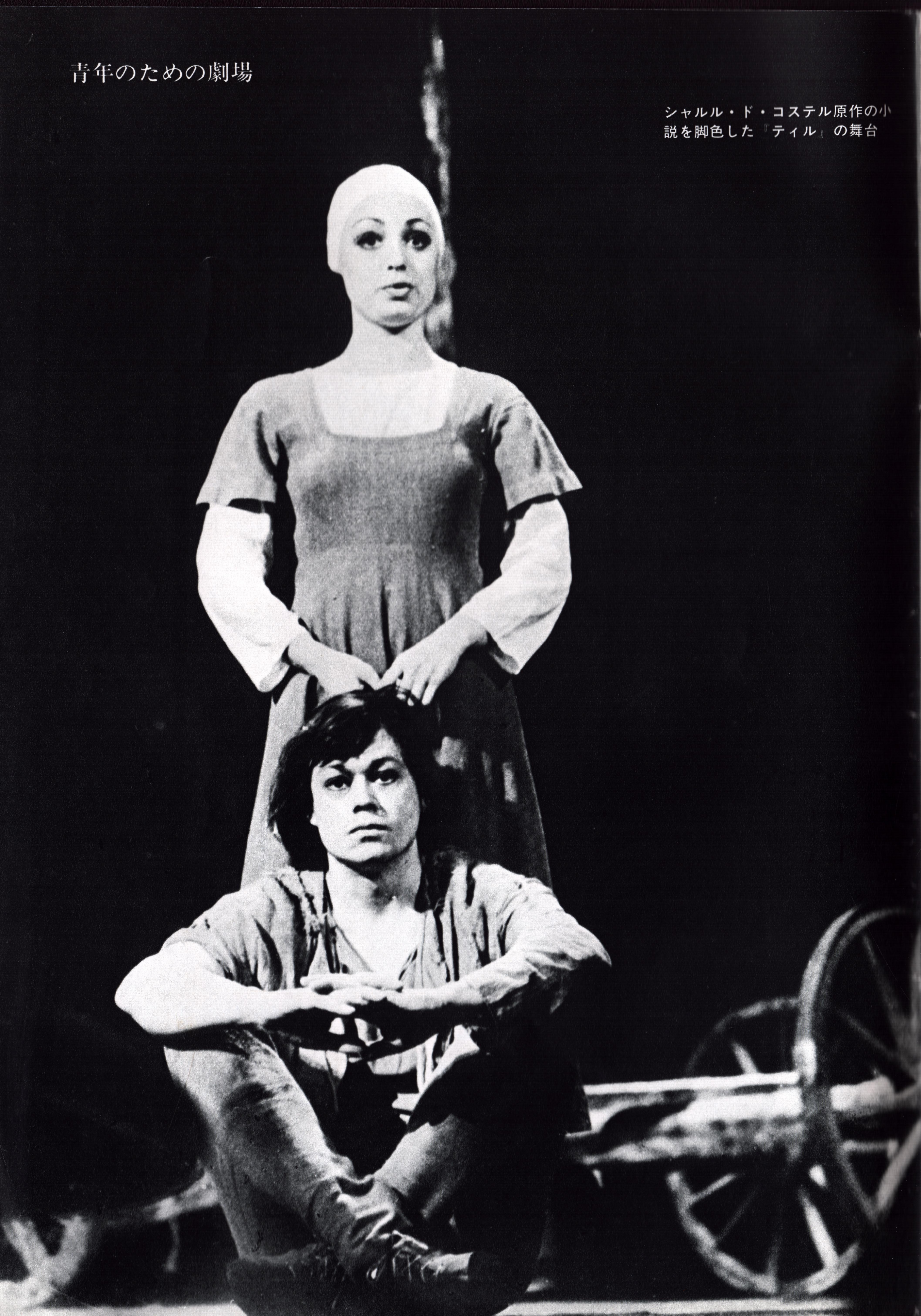
これは、ソ連国民がファシズムとの戦いで勝利をかちとるために払った代価について、死を超越することができたソビエト人の良心、責務、ヒューマニズムについての芝居である。

空想的な劇『21世紀の自動化都市』(戯曲は私とジャーナリストのユーリー・ビズボルとが書いた)は、巨大な建設場が舞台になっている。この芝居のジャンルは新聞の社会・政治評論に近く、そのルポルタージュ的タッチが大建設場の雄大さ、建設者=人間の労働のパトスを明らかにしている。

青年たちのジャズ好き、ミュージカル好きを考慮に入れて、劇場は昨シーズン、偉大なチリの詩人パブロ・ネルーダの作品によるロック・オペラ『星とファアキン・ムリエタの死』を上演した。すでに数年間成功裏に上演されているのが音楽劇『ティル』(ソ連の作家グリゴリー・ゴリンがベルギーの作家シャルル・ド・コステルの有名な長編小説を創意をこらして脚色した)である。われわれは『ティル』でフランドル人民の楽観主義、その英知、自由愛好を示そうと努めた。ニコライ・カラチエンツォフが演ずるティルは、闘士であり、戦士であり、ロマンチストであり、同時に道化者である。自由を愛する、誇り高き人民の精神を殺すことができないように、彼を殺すことはできない。

わが劇場はあえてシェークスピアにも取り組んだ。有名な映画監督のアンドレイ・タルコフスキーがアナトリー・ソロニツィンを主役に起用して、われわれの所で『ハムレット』を上演した(数年前ソロニツィンは14世紀の偉大なロシアの聖像画家アンドレイ

青年のための劇場



シャルル・ド・コステル原作の小説を脚色した『ティル』の舞台



『星とフアキン・ムリエタの死』の舞台から

・ルブリョフの役を、タルコフスキー監督の同名の映画で演じた)。オフェリアは、ソビエト演劇と映画の最も興味深い女優の一人であるインナ・チュリコワが演じた。

チェーホフの戯曲『イワノフ』――その主人公は実生活で自分の場所を見出せなかった失敗者である――を青年のためのこの劇場で上演した理由は?

――実際、チェーホフのイワノフは、彼を取りまいているプチブル根性、シニシズム、どん欲の輪をたち切ることができなかった。彼にとって40歳は独特の境界であり、総決算である。イワノフには実生活が得られなかった。素通りしたのである。

青年にこのような形象を示したかった。彼らもいつかは40歳になるからだ。彼らはいまや自分自身にたいし非常に厳格な態度をとらなければならないし、持っているエネルギーを最も効率よく消費しなければならない。人生を生きることが簡単ではないこと、名誉と良心の最高のおきてに従って人々との相互関係を打ち立てることが大事なことを彼らは理解しなければならない。

今日のソ連邦
一九七八年10月15日号
編集・発行 ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3—9—13、郵便番号141、電話03・447・3536）
印刷 大日本印刷株式会社